# 九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

**—** 6 **—** 

甘木市所在柿原古墳群の調査 II (I地区)

上 巻・

1986 福岡県教育委員会

# 九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

**—** 6 **—** 

甘木市所在柿原古墳群の調査 II (I地区) 上 巻



(1) 柿原古墳群 I 地区遠景(南から)



(2) 2号填石室全景



(1) C-14 短甲・鎌・斧・鋤先 出土状態



(2) C-28 須恵器 出土状態

#### 序

本書は、福岡県教育委員会が、日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施 している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告であります。

今回の報告は、昭和57・58年度に行った甘木市所在の柿原古墳群についてのもので、その第2冊目にあたります。柿原古墳群の調査は昭和60年度で完了いたしまして、今後その成果を、順次刊行してゆく予定であります。

調査に際しましては、地元の方々を始め、多くの皆様方の御協力をいただき、多大な 成果をあげることができました。深く感謝いたします。

本書が、文化財愛護思想の普及、学術研究等に役立つならば幸甚に存じます。

昭和61年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友 野 隆

#### 例 言

- 1. 本書は、福岡県教育委員会が、日本道路公団から委託を受けて実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書で、第6集目の上巻にあたる。
- 2. 本書に収録した遺跡は、甘木市大字柿原所在の柿原古墳群( $\overset{r_1}{I}$ 地区)についてのもので、その第2冊にあたる。なお、I地区中央で調査を行った縄文早・晩期の遺構・遺物については今後に譲ることにして、今回は割愛した。
- 3. 柿原古墳群の発掘調査は、福岡県教育委員会文化課が担当し、遺構の実測及び写真の撮影は、調査補助員の協力を得て、各調査担当者が行った。
- 4. 報告書の作成に際し、遺構と遺物の実測、及び製図は各調査担当者の他、調査補助 員並びに塩足里美・本田ひろみ・豊福弥生・鶴田佳子・松嶋邦子・原田和枝・佐藤淳 子各氏の協力を得た。
- 5. 遺物写真撮影は、九州歴史資料館石丸洋・藤美代子及び調査担当者・補助員が行った。
- 6. 出土遺物の整理は、岩瀬正信の指導のもとに、福岡県教育委員会管理部文化課甘木 発掘事務所にて行い、鉄器処理は、九州歴史資料館にて横田義章が行った。
- 7. 本文中の遺構標記に際しては、Cは石棺墓及び石棺系竪穴式石室・土壙墓(岩盤掘り抜きも含む)、Dは土壙を示す。
- 8. 本文中に使用した古墳石室各部の名称は、第1図に準拠し、本文中の遺物番号と図版写真番号は共通する。
- 9. 本書の執筆は、中間研志・新原正典・平嶋文博が分担し、各文末に氏名を記した。 編集は平嶋の協力のもとに中間が担当した。
- 10. 九州大学医学部解剖学教授永井昌文氏には人骨の鑑定に手をわずらわし、玉稿をいただいた。記して感謝したい。
- 11. 本報告書掲載の遺構における方位は、すべて磁北である。

## 本 文 目 次

## 〈上 巻〉

I	訓	『査の経過 ····································
II	亿	位置と環境 ⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯
III	I	地区の調査
	A	調査の概要
	В	横穴式石室古墳群の調査9
	,	
		〈中巻〉
	С	竪穴式石室・石棺系竪穴式石室群の調査131
	D	竪穴住居跡の調査245
	E	土壙群の調査248
	F	甕棺墓の調査255
	G	表土出土の遺物257
	Н	甘木市柿原古墳群人骨鑑定結果264
VI	各	<b>論</b>
	A	横穴式石室の類別と変遷267
	В	竪穴式石室・石棺系竪穴式石室272

### 図 版 目 次

			本文	対照頁
卷頭図	版	1	(1) 甘木市柿原古墳群 I 地区遠景(南から)	8
			(2) 2 号墳石室全景	••••11
		2	(1) C-14 短甲・鎌・斧・鋤先出土状態	…158
			(2) C-28 須恵器出土状態·····	…189
			〈下巻〉	
	•			
図版	1	(1)	古墳群遠景(南から) I 地区発掘全景(北から)	5
		(2)	I 地区発掘全景(北から)	8
図版	2	(1)	I 地区発掘前全景(北東から)	8 .
		(2)	I 地区南半全景(西から)	8
図版	3	(1)	2~7号墳全景(西から)	9
		(2)	2 号墳発掘前全景(東から)	
図版	4	(1)	2 号墳全景(南から)	
		(2)	2号墳石室(羨道部より玄室をのぞむ)	
図版	5	(1)	2 号墳全景(閉塞石除去後)	
		(2)	2 号墳玄室奥壁	
図版	6	(1)	2号墳玄室東側壁	
		(2)	2号墳内護列石(西側)	
		(3)	2 号墳内護列石(東側)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	12
図版	7	(1)		12
		(2)	* * ···	
図版	8	(1)		15
		(2)		
図版	9	(1)		
		(2)		
		(3)	2 号墳玄室出土刀子・留金具・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	17
図版	10	(1)		
		(2)	¥ • • • · · · · · · · · · · · · · · · ·	
		(3)		
図版	11	2	号墳前室出土須惠器杯類	21
図版	12	(1)	2 号墳前室出土須恵器	21

本文対照頁		
(2) 2号墳前庭部出土須恵器杯蓋22		
3 2 号墳前庭部出土須恵器杯類······22	ĩ 13	図版
4 2号墳前庭部出土須恵器・土師器27	ī 14	図版
5 2 号墳前庭部出土土師器27	i 15	図版
6 2号墳前庭部,周溝内出土須恵器26	i 16	図版
7 (1) 2号墳 I 区前面列石直下出土須恵器・土師器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	i 17	図版
(2) 2号墳Bトレンチ付近,Ⅲ区周溝内出土須恵器・土師器32		
8 2号墳Ⅳ区列石直下出土須恵器・土師器・・・・・・・・・・・・31	18	図版
9 (1) 2号墳Ⅳ区前面列石直下出土土師器31	19	図版
(2). 3号墳墳丘発掘前全景(東から)34		
0 (1) 3号墳全景(南から)36	20	図版
(2) 3号墳出土須恵器37		
1 (1) 3号墳出土土器・鉄鏃37	21	図版
(2) 4 号墳墳丘発掘前全景39		
2 (1) 4号墳全景(南から)39	22	図版
(2) 4 · 6 号墳遠景(南東から)39		
(3) 4 · 6 号墳遠景(南から)39		
3 (1) 4号墳石室(南から)40	23	図版
(2) 4号墳石室(西から)40		
. (3) 4 号墳前庭部土器出土状態42	3	•
4 (1) 4 号墳出土鉄器····································	24	図版
(2) 4 号墳出土須恵器46		
5 (1) 4 号墳出土土器46	25	図版
(2) 5 号墳出土鉄鏃		
6 (1) 5号墳全景(西から)49	26	図版
(2) 5号墳石室(西から)49		
7 (1) 6号墳墳丘発掘前全景(南から)	27	図版
(2) 6号墳全景(南から)		
(3) 6 · 4 号墳遠景(西から)		
8 (1) 6 号墳墳裾土器出土状態	28	図版.
(2) 6 号墳石室		
(3) 6 号墳玄室奥壁		
9 (1) 6 号墳西側壁	29	図版

			本文対照頁
		(2)	6 号墳出土鉄器・須恵器
図版	30	(1)	6 号墳出土土器
		(2)	4 ・ 6 ・ 7 号墳遠景(西南から)53
図版	31	(1)	7号墳発掘前全景(南東から)63
		(2)	7号墳全景(西から)64
図版	32	(1)	7 号墳出土土器67
		(2)	7 号墳石室64
		(3)	7 号墳副葬鉄器・土玉67
図版	33	8号	- 墳と出土土器69
図版	34	(1)	9 号墳・C-43全景······74
-		(2)	9 号墳出土遺物75
		(3)	9号墳・C-44・45・47遠景(北西から)74
図版 -	35	(1)	10・11号墳遠景(東から)77
		(2)	10号墳全景(南から)77
図版	36	(1)	10号墳出土鉄器80
		(2)	10・11号墳遠景(西から)・11号墳出土遺物84
図版	37	(1)	10号墳出土土師器
		(2)	10号墳石室79
		(3)	10号墳周溝と土層断面・・・・・・77
図版	38	(1)	11号墳石室
		(2)	11号墳全景(西から)
図版	39	(1)	12~18号墳発掘前遠景(東から)86
		(2)	12~18号墳全景(気球写真、 P.HOTOオオツカによる)86
図版	40	(1)	12号墳全景(南から)
		(2)	12号墳石室
図版	41	(1)	12号墳床面鉄器出土状態88
		(2)	12号墳出土土師器
			12号墳出土鉄器88
図版	42		12~18号墳発掘前遠景(北から)86
			13号墳全景(南から)90
図版	43		13号墳全景(西から)
			13・15号墳全景(東から)90
図版	44	(1)	13号墳石室(南から)90

			本文対照頁
		(2)	13号墳石室(西から)90
図版	45	(1)	13号墳玄室·····90
,		(2)	13号墳羨道部閉塞状況92
		(3)	13号墳周溝内土器出土状態92
図版	46	(1)	13号墳周溝内土器出土状態92
		(2)	13号墳墓道土器出土状態
		(3)	13号墳出土須恵器92
図版	47	13号	· 計墳出土須恵器·······92
図版	48	13号	<del>}</del> -墳出土土器······92
図版	49	(1)	14号墳全景(南から)96
		(2)	14号墳全景(西から)・・・・・・96
図版	50	(1)	14号墳(北から)96
		(2)	14号墳(南から)······96
図版	51	(1).	14号墳羨道部閉塞状況96
		(2)	14号墳 I 区地山直上土師器出土状態·····98
		(3)	14号墳出土土師器98
図版	52	(1)	13~15号墳遠景(西から)
		(2)	15号墳全景(南から)
図版	53	(1)	15号墳全景(南東から)
		(2)	15号墳全景(南西から)
図版	54	(1)	15号墳玄室99
		(2)	15号墳内護列石(南から)
		(3)	15号墳内護列石(東から)99
図版	55	(1)	15号墳周溝内土器出土状態100
		(2)	15号墳出土遺物100
図版	56	(1)	16号墳全景
		(2)	16号墳石室104
		(3)	16号墳出土遺物106
図版	57	(1)	17号墳全景(南から)107
		(2)	17・18号墳・D-6遠景(南西から)107
図版	58	(1)	17号墳石室109
		(2)	17号墳西側集石遺構109
図版	59	(上)	)17号墳出土土器109

本文対照	百
(下)12~18号墳遠景(東から)	11
页 60 (1) 18号墳全景(南から)	11
(2) 18号墳玄室	11
页 61 (1) 18号質石室(西から)1	11
(2) 18号墳石室(東から)	
夏 62 (1) 19号墳石室(北西から)	14
(2) 19号墳石室(南西から)1	14
ī 63 (1) 19号墳石室南東壁 ·······1	14
(2) 19号墳副葬鉄器出土状態1	16
· (3) 19号墳出土土器 ······1	17
ē 64 (1) 19号墳副葬鉄器 ·······1	16
(2) 20号墳全景(南から)1	19
ā 65 (1) 20号墳石室(南から)	19
(2) 20号墳石室(西から)	19
ā 66 (1) 20号墳石室 ·······1	19
(2) 20号墳羨道部閉塞状況1	21
(3) 20号墳出土須恵器	
ī 67 (1) 21号墳全景(南から)	
(2) 21号墳石室(西から)	22
ā 68 (1) 21号墳石室 ······1	22
(2) 22号墳石室1	24
〔 69 (1) 23号墳全景(南から)1:	26
(2) 23号墳・C-44遠景(東から)15	26
i 70 (1) 竪穴式石室群遠景(北から)1:	31
(2) 竪穴式石室群(南から)1:	31
71 (1) 竪穴式石室群発掘前遠景(西から) ·······1	31
(2) 竪穴式石室群全景(北から)1	31
i 72 (1) C - 1 ·······1	31
(2) C-1 蓋石除去後 ····································	31
(3) C-1・19号墳 ·······13	31
73 (1) C - 1 ······13	<b>31</b>
(2) $\cdot$ (3) C - 2	32
(4) $C-3$ 13	34

•

, .\*

			本文対照頁
図版	74	(1)	C-3 (左), C-3 出土土師器 (上) ······134
		(2)	C-4全景(南から)137
		(3)	C-4 ······137
図版	75	(1)	C – 4 ······137
		(2)	C-4頭骨検出状態 ······139
		(3)	C-4周溝内土器・鉄器出土状態 ······139
		(4)	C-4全景(東から)139
図版	76	(1)	C-4出土遺物 ······139
		(2)	C-5
		(3)	C = 5
		(4)	C-5基底石 ·····140
図版	77	(1)	C-5基底石復原状態 ·····140
		(2)	C-5 鉄器副葬状態 ·····142
		(3)	C - 5 出土鉄器 ······142
図版	78	(1)	C - 6 ······143
		(2)	C-6 蓋石除去後 ······143
		(3)	C - 6 ······143
		(4)	C-6 蓋石除去後 ······143
図版	79	(1)	C - 7 ·····145
		(2)	C - 7 控え積み除去後145
		(3)	C-7蓋石除去後 ······145
図版	80	(1)	C - 7 ·····145
		(2)	C-7蓋石除去後 ······145
		(3)	C - 7 枕石 ······145
		(4)	C - 8 ······147
図版	81	(1)	C - 8 ·····147
		(2)	22号墳、C-4・7・8・9全景(西から)148
図版	82	(1)	C-9 蓋石落込状態 ······148
		(2)	C - 9 ······148
		(3)	C-9須恵器出土状態 ······148
図版	83	(1)	C - 9 ·····148
		(2)	C-9須恵器出土状態 ······150
		(3)	C-9出土須惠器·土師器 ······150

			本文対照頁
図版	84	(1)	C -10 ·····151
		(2)	C-10鉄器出土状態 ·······152
		(3)	C-10出土鉄器 ·····152
図版	85	(1)	C -11 ·····152
		(2)	C -11 ·····152
		(3)	C -12 ······155
図版	86	(1)	C -12 ·····155
		(2)	C -13 ·····156
		(3)	C -13 ·····156
図版	87	(1)	C-13出土土器 ······156
		(2)	C-14 (手前) から南方の石室群を望む ······157
図版	88	(1)	C -14 ·····157
		(2)	C-14遺物取上げ後
		(3)	C-14遺物取上げ後 ·······158
図版	89	(1)	C-14副葬短甲・鎌・斧・鋤先出土状態 ······158
		(2)	C-14副葬太刀・鏃・刀子出土状態158
図版	90	(1)	C-14副葬品出土状態 ·······158
		(2)	C-14副葬短甲類出土状態(南から)158
		(3)	C-14副葬鉄鋤先 ········163
図版	91	c –	14副葬鉄器162
図版	92	(1)	C -15 ······164
		(2)	C -16166
		(3)	C-16鉄鏃出土状態 ······166
図版	93	(1)	C -16 ······166
		(2)	C-16西側出土土師器 ·······167
		(3)	C-16副葬鉄器 ······167
図版	94		C -17 ·······167
			C -18 ·······168
		(3)	C-18出土刀子 ·······170
		(4)	C -19 ······170
図版	95	(1)	C-19土器出土状態 ·······171
LINX.	50	(2)	C 19工術出土状態         C-19出土遺物
			C-19出工退物
		(3)	174

				本文対照頁
	図版	96	(1)	C -21 ·····174
			(2)	C - 21蓋石除去後 ······174
			(3)	C -22 ·····176
	図版	97	(1)	C -23 ······176
			(2)	C-23北東側祭祀土拡 ·····179
			(3)	C-23北東側土拡遺物出土状態 ······179
	図版	98	(1)	C -23出土遺物 ·····179
			(2)	C -24 ·····181 ·
	図版	99	(1)	C -24 ·····181
			(2)	C-25全景 ·····183
			(3)	C -25 ·····183
	図版	100	(1)	C-24·26全景 ·····185
			(2)	C-26 (手前) ······185
			(3)	C -27 ·····186
	図版	101	(1)	C-28全景 ·····187
			(2)	C -28 ·····189
	図版	102	C -	-28副葬土器189
	図版	103	(1)	C -29 ·····191
			(2)	C-29蓋石除去後 ······191
			(3)	C -30 ·····192
	図版	104	(1)	C -31 ·····193
'			(2)	C -32 ·····194
			(3)	C-32蓋石除去後 ······194
i	図版	105	(1)	C -33 ·····195
			(2)	C -34 ·····195
			(3)	C-34出土鉄鏃 ······197
			(4)	C - 34 ·····197
I	図版	106	(1)	C - 35 ·····197
			-	C-35鉄器出土状態 ······199
i	図版	107	c –	35副葬鉄器199
[	図版			C -36 ·····202
			(2)	C - 37全景 ·······202
			(3)	C -37 ·····202
				202

.

		•									
: •		ė	4								
·	٠.:					<b>'</b> ,					
	٠			٠,							
	,	<i>:</i>				*		· •		本文対照頁	
		図版	109			刀子					
<i>‡</i>				(2)							
				(3)		***************************************					
		図版		(1)			•				
			•	(2)	C-39全景				•••••	206	
				(3)							
		図版	111	(1)	_	勺土器出土状態					
					-	为土器出土状態		•			
						上器					
		図版	112			遠景					
				(2)	C -40 ·····		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	••••••	••••••	210	-
		•		(3)		全景 ,					•
٠.		図版	113	(1)							
:				(2)		······					
	•	A. C.			•	头鏃					
		図版	114	(1)							
				(2)						•	
		•		(3)		•••••					
		.図版	115								
						土鉄器					
						15全景					
		図版	116	, .							,
				(2)							
		図版	117			•••••					
						除去後					
		図版	118								
				(2)		遠景					
				(3)		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •					
	76	図版	119	(1)		•••••					
				(2)							
				(3)	$C-49\cdot 50$	10・11号墳遠	景	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		227	

		•
	本文対照頁	•
図版 120 (1)	C-51 (手前) から南を望む227	
(2)	C -51230	
(3)	C-51蓋石除去後 ······230	
図版 121 (1)	C-51脇出土鋤先 ······231	
(2)	C-51人骨 ······231	•
(3)	C-51蓋石除去後 ············230	
(4)	20.	
図版 122 (1)	C-52·53全景·····234	
(2)	C -52 ······234	
(3)	C-52出土鉄鏃 ······235	
図版 123 (1)	C -53 ·····236	
(2)	C-54(右)とC-54出土鉄鏃(左)238	
. (3)	C -55 ·····238	
図版 124 (1)	C-55(岩盤内に築造)238	•
(2)	C -56 ·····240	-
図版 125 (1)		
(2)	C - 57       241         C - 57枕石       241	
(3)		-
図版 126 (1)	C -57 ·····241	
(2)	C -58 ·····242	
. (3)	C -58 ·····242	
図版 127 C-	-59(1~4の順で敷石が検出された)243	
図版 128 (1)	1 号竪穴住居跡245	
(2)	1 号竪穴住居跡出土土師器245	
(3)	西丘陵上発掘全景248	
図版 129 (1)	D-1248	
	, 210	
	D – 5	
	D-6 (手前) と17号墳 (右上)	••
(2)	D – 7 ·····250	
	D = 8252	
	D-8 夜臼式土器出土状態 ······252	
(3)	D - 9 ·····253	

f. 1

		本文対照頁
図版 132	2 (1)	D-10 (左), C-59 (右) ······253
	(2)	D-11 ·····253
	(3)	D-13 ······254
図版 133	3 (1)	$K-1  \cdots  255$
	(2)	$K-1 \geq C-42 \hspace{1cm} \cdots \hspace{1cm} 255$
	(3)	K-1出土土器 ·····256
図版 134	1 表土	:出土遺物257
図版 135	5 新洲	1南西岸露出古墳石室7
図版 136	6 (1)	I 地区縄文調査全景(東から)1
	(2)	柿原古墳群全景(南から)1
		挿 図 目 次
		〈上 巻〉
		真
第1図		+部の名称
第2図		<b>b</b> b b b b b b b b b b b b b b b b b b
第3図		<b>計</b> 跡分布図
第 4 図		地区地形測量図 (1/600) 右折り込み8-9
第5図		地区遺構配置図 (1/600) 右折り込み8-9
第6図		<b>賃</b> 墳丘実測図(1/200)
第7図		<b>賃地山整形面実測図(1/200)10</b>
第8図		賃写真測量図 (1/80)右折り込み10-11
第9図		賃石室実測図(1/60)右折り込み10-11
第10図		賃墳丘断面実測図(1/60)右折り込み10-11
第11図		<b>賃石室内副葬品出土状態実測図(1/30)13</b>
第12図		<b>5</b>
第13図		賃玄室耳環・管玉実測図(2/3)16
第14図		賃玄室鉄器実測図(1/2)17
第15図		賃前室出土鉄器実測図(1/2)18
第16図	2 号墳	賃前庭・前面列石直下出土鉄器実測図(1/2)19
第17図		育前室出土土器実測図①(1/3)20
第18図		實前室出土土器実測図②(1/3) ·······21
第19図	2 号墳	<b>貴前庭部出土須恵器実測図①(1/3)23</b>

		頁
	第20図	2 号墳前庭部出土須恵器実測図②(1/3)24
	第21図	2 号墳前庭部出土須恵器実測図③(1/6)25
	第22図	2 号墳前庭部出土土師器実測図(1/3)27
	第23図	2号墳 I 区前面列石直下出土須恵器(上)・土師器(下)実測図(1/3)29
	第24図	2号墳Ⅳ区前面列石直下出土須恵器(上)・土師器(下)実測図(1/3)30
	第25図	2号墳Ⅳ区前面列石直下出土須恵器実測図(1/4)31
	第26図	2 号墳周溝内出土土器実測図(1/4)32
	第27図	2 号墳 Bトレンチ付近出土土器実測図(1/3)33
	第28図	3 号墳墳丘実測図(1/200)34
	第29図	3 号墳地山整形面実測図(1/200)34
	第30図	3 号墳石室実測図(1/60)
•	第31図	3 号墳墳丘断面実測図(1/60)右折り込み36-37
	第32図	3 号墳出土鉄器実測図(1/2)37
	第33図	3 号墳出土土器実測図①(1/3)37
	第34図	3 号墳出土土器実測図②(1/6)38
	第35図	4号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)40
	第36図	4 号墳石室実測図(1/60)右折り込み40-41
	第37図	4 号墳墳丘断面実測図(1/60)41
	第38図	4号墳玄室副葬鉄器 (左), 前庭部供献土器 (右) 出土状態実測図 (1/30)43
	第39図	4 号墳出土鉄器実測図(1/2)
	第40図	4 号墳出土須恵器実測図① (1/3)44
	第41図	4 号墳出土須恵器実測図② (1/3)45
	第42図	4 号墳出土須恵器・捏鉢実測図(1/6)46
	第43図	4 号墳出土土師器実測図(1/3)
	第44図	5 号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)49
	第45図	5 号墳石室墳丘断面実測図(1/60)
	第46図	5 号墳出土鉄器実測図(1/2)
	第47図	6号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)53
	第48図	6 号墳石室実測図(1/60)右折り込み54-55
	第49図	6 号墳墳丘断面実測図(1/60)
	第50図	6 号墳副葬・供献品出土状態実測図 (1/30) ······56
	第51図	6 号墳出土鉄器・紡錘車実測図 (1/2)
	第52図	6 号墳出土須恵器実測図① (1/3)

	頁
第53図	6 号墳出土須恵器実測図②(1/6)
第54図	6 号墳出土土師器実測図(1/3)62
第55図	7 号墳調査前墳丘実測図(1/200)64
第56図	7 号墳地山整形面実測図(1/200)
第57図	7 号墳石室実測図(1/60)65
第58図	7 号墳墳丘断面実測図(1/60)右折り込み66-67
第59図	7 号墳出土鉄器・土玉実測図(1/2)67
第60図	7 号墳出土土器実測図(1/3)68
第61図	7 号墳出土須恵器実測図(1/6)69
第62図	8 号墳地山整形面実測図(1/100)70
第63図	8 号墳石室実測図(1/60)71
第64図	8 号墳出土土器実測図(1/3)72
第65図	9 号墳地山整形面実測図(1/100)74
第66図	9 号墳石室実測図(1/60)75
第67図	9 号墳出土鉄器実測図(1/2)76
第68図	9 号墳出土土師器実測図(1/3)
第69図	10~18号墳周辺遺構配置図(1/600)77
第70図	10号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)78
第71図	10号墳石室実測図(1/60)78
第72図	10号墳墳丘断面実測図(1/60)79
第73図	10号墳出土鉄器実測図(1/2)
第74図	10号墳出土土師器実測図(1/3)
第75図	11号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200) ······82
第76図	11号墳石室実測図(1/60)83
第77図	11号墳墳丘断面実測図(1/60) 84
第78図	11号墳出土鉄器実測図(1/2)84
第79図	11号墳出土土師器実測図(1/3)
第80図	12号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)86
第81図	12号墳石室実測図(1/60)87
第82図	12号墳遺物出土状態実測図(1/30)
第83図	12号墳出土鉄器実測図(1/2)
第84図	12号墳出土土師器実測図(1/3)
第85図	13号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)90

頁	
1317 / 20/00 01	第86図
	第87図
図 13号墳出土須恵器実測図(1/3)93	第88図
図 13号墳出土土師器実測図①(1/3)94	第89図
図 13号墳出土土師器実測図②(1/4)95	第90図
図 14号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)96	第91図
図 14号墳石室実測図(1/60)97	第92図
図 14号墳出土土師器実測図(1/3)98	第93図
図 15号墳石室実測図(1/60)右折り込み98-99	第94図
図 15号墳調査前墳丘実測図(1/200)99	第95図
図 15号墳地山整形面実測図(1/200)99	第96図
図 15号墳出土鉄器実測図(1/2)100	第97図
図 15号墳出土土器実測図①(1/3)101	第98図
図 15号墳出土土器実測図②(1/4)102	第99図
図 16号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)103	第100図
図 16号墳石室実測図 (1/60)105	第101図
図 16号墳出土鉄器実測図(1/2)106	第102図
図 16号墳出土土器実測図(1/3)106	第103図
図 17号墳墳丘実測図 (左:調査前,右:地山整形面) (1/200) ·······107	第104図
図 17号墳石室実測図 (1/60)108	第105図
図 17号墳出土土器実測図(1/3・1/6)110	第106図
図 18号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)111	第107図
図 18号墳石室実測図(1/60)112	第108図
図 18号墳出土須恵器実測図(1/3)113	第109図
図 19号墳地山整形面実測図(1/100)114	第110図
図 19号墳石室実測図(1/40・1/20)115	第111図
図 19号墳出土鉄器実測図(1/2)116	第112図
図 19号墳出土土器実測図(1/3)117	第113図
図 20号墳地山整形面実測図(1/100)119	第114図
図 20号墳石室実測図 (1/60)120	第115図
図 20号墳主体部実測図 (1/40)右折り込み120-121	第116図
	第117図

第118図 21号墳地山整形面実測図(1/100) …………………………122

	·
第119図	頁 21号墳主体部実測図(1/40)・・・・・・・・・・右折り込み122-123
第120図	21号墳石室実測図(1/60)
第121図	21号墳周辺出土須恵器実測図(1/3)
第122図	22号墳石室実測図(1/40)
第123図	23号墳地山整形面実測図(1/100)
第124図	23号墳石室実測図(1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
<b>71</b>	
	〈中 巻〉
第125図	C-1地山整形面実測図(1/100) ······131
第126図	C-1出土土師器実測図(1/3) ·······132
第127図	C-1実測図 (1/30) 右折り込み132-133
第128図	C-2実測図 (1/30) ·····133
第129図	C-3地山整形面実測図(1/100) ······134
第130図	C-3 実測図 (1/30)
第131図	C-3出土土器実測図 (1/3) ······136
第132図	C-4地山整形面実測図(1/100) ······137
第133図	C-4 実測図(1/60) ······138
第134図	C-4主体部実測図(1/30)右折り込み138-139
第135図	C-4出土鉄器実測図(1/2) ······139
第136図	C-4出土土器実測図(1/3) ······140
第137図	C-5実測図(1/30)(右端図は復原図)141
第138図	C-5出土鉄剣実測図(1/4) ······142
第139図	C-5出土鉄器実測図(1/2) ······143
第140図	C-6実測図 (1/30) ·····144
第141図	C-7 実測図 (1/30)
第142図	C-8 実測図 (1/30) ······147
第143図	C-8出土須恵器実測図(1/3) ······148
第144図	C-9 実測図(1/30) ······149
第145図	C-9出土土器実測図(1/3) ······150
第146図	C-10実測図(1/30) ······151
第147図	C-10出土鉄器実測図(1/2) ······152
第148図	C-11実測図(1/30) ······153

頁	
	第149図
C-12実測図(1/30) ······154	第150図
C-13実測図(1/30) ······155	第151図
C-13出土土器実測図(1/3) ·····156	第152図
C-14地山整形面実測図(1/100) ······158	第153図
C-14実測図(1/30) ······159	第154図
C-14遺物出土状態実測図(1/10) ······160	第155図
C-14出土鉄器実測図① (1/2) ······161	第156図
C-14出土鉄鋤先実測図② (1/2) ······162	第157図
C-14出土鉄刀実測図③ (1/6) ·····163	第158図
C-15実測図(1/30) ······164	第159図
C-16実測図(1/30) ······165	第160図
C-16出土鉄器実測図(1/2) ······166	第161図
C-16付近出土土師器実測図(1/3) ······167	第162図
C-17実測図(1/30) ······168	第163図
C-18実測図 (1/30) ······169	第164図
C-18出土刀子実測図(1/2) ······170	第165図
C-19地山整形面実測図(1/100) ······171	第166図
C-19実測図(1/30) ·····172	第167図
C-19出土鉄刀実測図(1/4) ······173	第168図
C-19出土土器実測図(1/3) ·····173	第169図
C-20実測図(1/30) ······174	第170図
C-21実測図(1/30) ······175	第171図
C-22実測図 (1/30) ······177	第172図
C-23地山整形面実測図(1/100) ······178	第173図
C-23主体部実測図(1/30)······178	第174図
C-23祭祀土坛遺物出土状態実測図(1/30)······179	第175図
C-23祭祀土址出土鉄鋤先実測図 (1/2) ······180	第176図
C-23祭祀土址出土土器実測図(1/3) ······180	第177図
C-24地山整形面実測図(1/100) ······181	第178図
C-24実測図(1/30) ·····182	第179図
C-25地山整形面実測図(1/100) ······183	第180図
C-25実測図 (1/30) ·····184	第181図

•

	頁
第182図	C-25出土土器実測図(1/3) ·····184
第183図	C-26地山整形面実測図(1/100) ······185
第184図	C-26実測図(1/30) ······185
第185図	C-27実測図(1/30) ······186
第186図	C-28実測図(1/60) ·····187
第187図	C-28主体部実測図(1/30)·····188
第188図	C-28副葬土器実測図(1/3) ·····190
第189図	C-29実測図(1/30) ·····191
第190図	C-30実測図(1/30) ·····192
第191図	C-31実測図(1/30) ······193
第192図	C-32実測図(1/30) ······右折り込み194-195
第193図	C-33実測図(1/30) ······右折り込み194-195
第194図	C-34地山整形面実測図(1/100) ······196
第195図	C-34実測図(1/30) ·····196
第196図	C-34出土鉄器実測図(1/2) ·····197
第197図	C-34出土土師器実測図(1/3) ·····197
第198図	C-35地山整形面実測図(1/100) ······197
第199図	C-35実測図(1/30) ······198
第200図	C-35出土鉄刀実測図(1/6) ······199
第201図	C-35出土鉄器実測図① (1/2) ······200
第202図	C-35出土鉄器実測図② (1/2) ······201
第203図	C-36実測図(1/30)201
第204図	C-37地山整形面実測図(1/100) ······202
第205図	C-37実測図 (1/30)右折り込み202-203
第206図	C-37出土鉄器実測図(1/2) ······203
第207図	C-38地山整形面実測図(1/100) ······203
第208図	C-38実測図(1/30) ······204
第209図	C-38出土土器実測図(1/3) ······205
第210図	C-39地山整形面実測図(1/100) ······206
第211図	C-39実測図(1/30) ······207
第212図	C-39出土土器実測図(1/3) ······208
第213図	C-40地山整形面実測図(1/100) ······210
第214図	C-40 実測図(1/30) ···············211

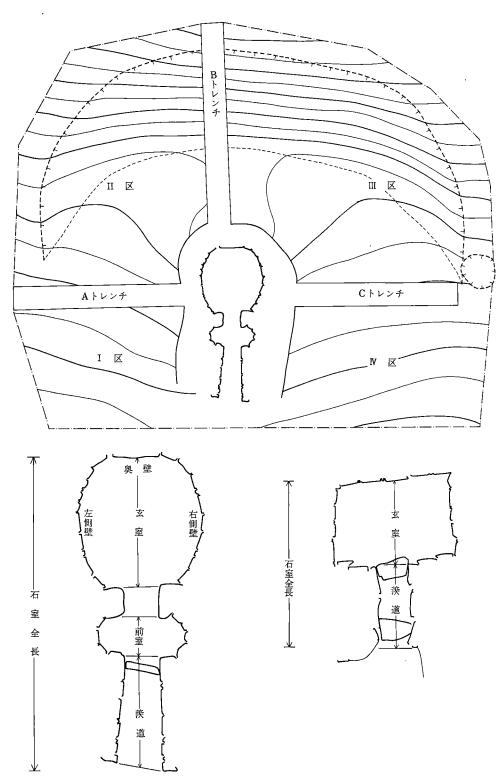
図 C-41地山整形面実測図(1/100) ···································	.014
図 C-41実測図 (1/30)	
図 C-41出土鉄器実測図(1/2)	
図 C-42実測図 (1/30) ····································	
図 C-42出土土師器実測図 (1/4) ····································	
図 C-43地山整形面実測図 (1/100)	
図 C-43実測図 (1/30) ····································	
図 C-43出土土師器実測図 (1/3) ·······2	
図 C-44地山整形面実測図(1/100)	
図 C-44実測図 (1/30) ····································	
図 C-44出土鉄器実測図(1/2)2	
☑ C-44出土土器実測図(1/3) ······2	
図 C-45地山整形面実測図(1/100) ······2	
図 C-45実測図(1/30)2	221
☑ C-45出土須恵器実測図(1/3) ······2	222
図 C-46実測図(1/30)2	222
☑ C-47地山整形面実測図(1/100) ······2	223
☑ C-47実測図(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	224
☑ C-48実測図(1/30)・・・・・・・・2	225
〗 C−49地山整形面実測図(1/100) ······2	226
〗 C−49実測図(1/30)2	227
〗 C−50実測図(1/30)・・・・・・・・・2	228
〗 C−51実測図(1/30) ······2	229
3 C-51人骨・玉出土状態実測図(1/10)2	230
】 C-51出土玉・鉄鋤先実測図(実大・1/2)2	
] C-52地山整形面実測図(1/100) ·······2	
C-52実測図(1/30)2	
C-52出土鉄器実測図(1/2) ······2	
C-53実測図(1/30)23	
│ C-54実測図(1/30)······23	
│ C −54出土鉄器実測図(1/2) ······23	
【 C−55実測図(1/30) ·······23	
C-56実測図(1/30)2a	240

	頁
第248図	C-57地山整形面実測図(1/100) ······241
第249図	C-57実測図(1/30) ······241
第250図	C-57出土土師器実測図(1/3) ······242
第251図	C-58実測図(1/30) ······243
第252図	C-59実測図(1/30) ······244
第253図	1 号竪穴住居跡実測図(1/60·1/30)······246
第254図	1号住居跡出土土師器実測図(1/4)247
第255図	D-1~5実測図(1/30) ······249
第256図	D-6出土土器実測図 (1/3) ······250
第257図	D-6~10実測図(1/60·1/30) ······251
第258図	D-7出土土師器実測図(1/3) ······252
第259図	D-11~13実測図(1/30)
第260図	K-1出土状態実測図(1/30) ······255
第261図	K-1実測図(1/4) ······256
第262図	K-1出土土師器実測図(1/3) ······256
第263図	表土出土土器実測図① (1/3・1/6)258
第264図	表土出土土器実測図②(1/4)260
第265図	表土出土土器実測図③(1/3)261
第266図	表土出土砥石実測図(1/4)263
第267図	表採玉・鉄器実測図(実大・1/2)263
第268図	横穴式石室分類表(石室:1/80, 遺物:1/6)右折り込み268-269
第269図	横穴式石室墓道復原図(1/1,200)270
第270図	竪穴式石室・石棺系竪穴式石室分類表右折り込み276-277
第271図	竪穴式石室・石棺系竪穴式石室頭位方向277
第272図	A類期竪穴式石室(左)・B 1 類期石棺系竪穴式石室(右)分布図(1/1,200)…280
第273図	C · B 2 類期石棺系竪穴式石室分布図(1/1,200) ·······281
第274図	C-14·40, 9·19号墳平面プラン比較図とそれらの方眼による操作結果(1/40) 289
第275図	2 号増方眼による操作結果(1/80)295

#### 表 目 次

# 〈上卷〉

頁
<b>5</b> 1 表 柿原古墳群調査工程表········ 2
<b>第2表 横穴式石室計測表128・12</b> 9
〈中 巻〉
第 3 表  C −51出土小玉一覧表······232 · 233
54表 竪穴式石室・石棺系竪穴式石室等計測表244-245 (折り込み)
§ 5 表 横穴式石室 I ~Ⅲ類の石室各部計測値と各所の比率・企画推定尺度 ············290
56表 柿原周辺のI~Ⅲ類古墳の石室各部計測値と各所の比率290
37表 横穴式石室Ⅳ・Ⅴ類の石室各部計測値と各所の比率・企画推定尺度 ·······292
38表 柿原周辺のⅣ・Ⅴ類古墳の石室各部計測値と各所の比率292
・9 表 横穴式石室 VI・VII類の石室各部計測値と各所の比率・企画推定尺度 ·······294
第10字 柿原图辺のW・W類街古墳の石宏冬部計測値と冬前の比率



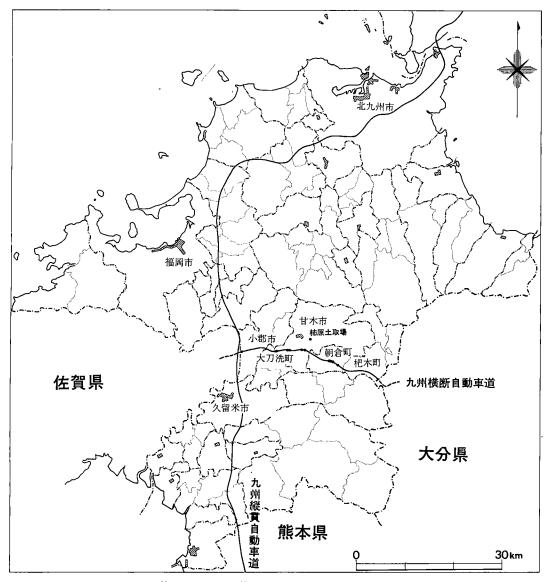
第 1 図 古墳各部の名称

#### I 調査の経過

九州横断自動車道建設に伴い、土取場となる福岡県甘木市大字柿原の柿原古墳群の発掘調査は、昭和55年度以来継続して行ってきたが、今回報告する I 地区については、昭和57・58年度に調査を実施した分である。

I 地区については、昭和55年度に新池に接する谷間部の数基の円墳についての地形測量を行ったが、本格的な作業は昭和57年度になってからである。(第1表参照)

昭和57年度は主として土取場中央部のG・H地区の調査を行ったが、それと並行して6月中旬より、I地区の伐採樹木の片付け及び地形測量を行い、8月より谷間部の古墳の調査に入っ



第 2 図 九州横断自動車道路線図

		r					
年 度	調査地区	調査期間	調査担当者	調査内容	調査面積	調査概要	備考
昭和55年度	D.I.L	\$55.4.26~7.24 \$55.12.15~\$56.1.10	栗原、石山 新原、佐々木	地形測量	14,700m²		
# 56年度	G	S 56.10.12~ S 57.2.19	新原、池辺	発掘調査	900m²	横穴式石室	報告書第4集
# 57年度	G.H.S	S 57. 5 .10~ S 58. 3 .29	浜田、新原 中間	"	8,300m²	横穴式石室、土址墓 石棺系竪穴式石室	n
" "	I	S 57. 6.14~ S 58. 3.31	浜田、新原 中間	地形測量 発掘調査	) 15.000m²	横穴式石室、石棺系竪穴式石室	報告書第6集
〃 58年度	I	\$58.4.4~12.28 \$59.3.1~3.23	新原、中間 小池	発掘調査	15,000	土坑墓、住居跡、縄文	"
<b># 59年度</b>	F	\$59.4.2~7.24	栗原、新原 小池、伊崎	"	5,000m²	横穴式石室、石棺墓、火葬墓、住居跡 	
11 11	L	S 59. 6. 4 ~ 7.26	栗原、小池	. "	1,600m²	横穴式石室、住居跡	
11 11	E	\$59.7.3~10.23	栗原、新原 小池、木村	"	4,600m²	横穴式石室、石棺墓、火葬墓 住居跡、頸棺墓	
п н	D	\$59.9.10~\$60.3.30	栗原、新原 小池、日高	地形測量 発掘調査	.7,300m²	横穴式石室、石棺墓	
″ 60年度	D	S 60. 4 . 1 ~ 4 .30	小池、日高	発掘調査	1,000m²	ıı	
" "	L	\$60.10.22~11.19	中間、小田	11	3,400m	横穴式石室	

第1表 柿原古墳群調査工程表

た。古墳調査の途中,表面から観察では確認されなかった,墳丘を持たない竪穴式石室が多数 検出されたので,谷間部分については全面発掘を行うこととした。その間,日地区の進行状況 に応じて,しばしば中断せざるを得ない事態もあったが,昭和58年3月末まで作業は続行した。

昭和58年度は、4月当初から作業を再開し、7月末までには谷間部の円墳や竪穴式石室群の調査を終了し、引きつづき谷間北側丘陵部に所在する円墳の調査へと移行した。その間、谷間部の調査中、縄文時代の遺物が多数出土し、当該期の遺構が予想されたため、8月末から2ヶ月間、グリッド方式による調査を行い、縄文前期の土城や、晩期の住居跡などを検出することができた。一方、丘陵部の調査は、昭和59年1月から2月末まで、G及びH地区の報告書作成の為一時中断したが、3月末には全て終了し、全期間を通してI地区約15,000㎡の調査は完了した。I地区では検出された遺構は横穴式石室23基、竪穴式石室・石棺系竪穴式石室59基、土 址13基、甕棺墓1基、それに竪穴式住居跡1軒である。

なお、発掘調査にあたり、柿原地権者協議会の山下利雄委員長には、作業員の方々の斡旋や、 地元との調整など、調査に際しての種々の御協力をいただいた。また、終始作業員として参加 された柿原・相窪・堤地区の皆様の援助に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和56年度から昭和60年度に及ぶ調査関係者は下記のとおりである。

#### 日本道路公団福岡建設局

 局 長
 竹原 清隆 (前任) 持丸竜一郎 (前任) 今村 浩三

 総務部長
 田代 勝重 (前任) 落合 一彦 (前任) 菱刈 庄二

 安元 富次

布川 堯(前任) 梅田 道人(前任) 森 宏之 管理課長代理 野口 利夫(前任) 佐伯 曹 日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所 所 長 江口 正一(前任) 乗松 紀三 副所長 矢野 浩司(前任) 西田 功 副所長 (技術担当) 中村 義治 庶務課長 森本 太助(前任) 松下 幸男(前任) 徳永 登 用地課長 溝口 萩男(前任) 岩下 剛 工務課長 深町 貞光(前任) 山口 宗雄(前任) 後藤二郎彦 小郡工事区工事長 田口 裕(前任) 友田 義則 甘木工事区工事長 瀬戸山邦雄(前任) 猪狩 宗雄 朝倉工事区工事長 吉永 英一(前任) 平沢 正(前任) 小手川良和 杷木工事区工事長 前田 雄一(前任) 山中 茂 福岡県教育委員会 総 括 教育長 浦山 太郎(前任) 友野 隆 教育次長 守屋 尚(前任) 安倍 徹 管理部長 森 英俊(前任) 伊藤 博之(前任) 大鶴 英雄 文化課課長 藤井 功(前任) 前田 栄一 〃 課長補佐 蓮尾 謙吉(前任) 中村 一世(前任) 平 聖峰 " 課長技術補佐 宮小路賀宏 〃 参事補佐 栗原 和彦

庶 務

管理課長

文化課庶務係長 大渕 幸夫(前任) 内山 孝之(前任) 松尾 満(前任)

> 平 聖峰 (兼任)

" 事務主査 平尾 敏映(前任) 三島 洋輝(前任) 長谷川伸弘

調 杳

> 文化課調查第2係長 栗原 和彦(前任) 宮小路賀宏(兼任)

技術主査 井上 裕弘.

> 主任技師 石山 勲 (現県立甘木歴史資料館副館長)

浜田 信也(前任,現技術主査)

木下 修(現京築教育事務所技術主査)

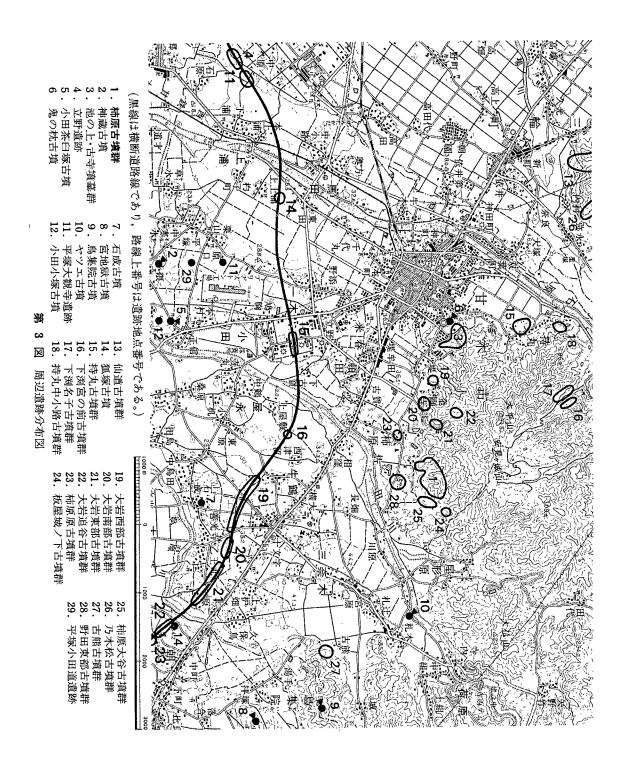
主任技師 高橋 章 児玉 眞一 (現北筑後教育事務所技術主査) 新原 正典 (現筑豊教育事務所技術主査) 中間 研志 佐々木隆彦 小池 史哲 " 池辺 元明 (現福岡教育事務所主任技師) 技 師 伊崎 俊秋 小田 和利 " 緒方 泉(前臨時職員) 文化財専門員 木村幾多郎 臨 時 職 員 日高 正幸 森山 栄一 (現筑紫野市教育委員会) 宮田 浩之 (現小郡市教育委員会) 調査補助員 高田 一弘 " 武田 光正 佐土原逸男 田中 康信 向田 雅彦 11 樋口 秀信(現佐賀県教育委員会嘱託) 平嶋 文博 柏原 孝俊 11

#### II 位置と環境

甘木市は、福岡県のほぼ中央に位置し、古処・馬見山地を北壁とし、その前面に朝倉低山地である大平山、大仏山等が存し、朝倉山塊を形成する。それらを源として小石原川、佐田川が南流し、東西に走る筑後川となる。平地部は、両河川によって形成された扇状低地と扇状台地が存し、これらの山塊と平地に甘木市が存する。その中で当古墳群は、朝倉低山地の一つである大平山の南東側山麓に位置する。大平山山麓は八つ手状で、起伏の激しい丘陵を派生する。当古墳群はその一辺で、7つの大小丘陵及びその間の谷を領域としている。その中でも、今回調査したのは、調査区西寄りで、東西に南方へ細長く派生する丘陵間のやや詰まって南へ派生する小丘陵とその谷間である。特に今回調査を行ったI区は、その谷間に多くの古墳が潜むように営まれていた。また、当調査地一帯は石材が豊富な所であり、地元で通称「柿原石」と呼ばれる片岩が容易に採取できる。これらは、古来より石棺墓の棺材や古墳の壁材として使用され、また、家屋の基礎・石垣として用いられ、現在にまで至っている。当古墳群に於いても、古墳の壁材・蓋石は殆んど柿原石である。

当地方に於ける古墳時代の歴史的環境については、第一に、扇状台地の南端に築き、内部主体が変形した竪穴式石室で4C後半の神蔵前方後円墳や、同じく扇状台地上で5C中頃の小田茶臼塚前方後円墳がある。また、小石原川を挟んで西側に方形・円形周溝墓を営む4C後半代の立野遺跡が存する。これらは、平地に営まれた墳墓であるが、一方、柿原古墳群と同様に大平山山麓に位置する4C末~5C中頃の、池の上・古寺墳墓群がある。この墳墓群は丘陵の尾根上に営まれ、岩盤を穿った石蓋土城墓や竪穴系横口式刳貫石室等が存する。また、時期は若干下るが、6C前半代の鬼の枕前方後円墳が池の上・古寺墳墓群と対峙して営まれている。6C中頃になると平地部では古墳が認められず、朝倉低山地である大平山山麓に集中するものであろう。しかし、それらについては調査が殆んど行われず、時期を確定することは出来ないが、その中でも昭和31年に朝倉高校により調査が行われ、その実態を知り得るものとして大岩古墳群がある。大岩古墳群は、大平山から南へ派生した丘陵頂部もしくは斜面に群集している。広範囲に点在するので、西部・南部・東部・迫谷の4支群に分割されている。時期的には、6C中~末頃の古墳である。終末期の古墳は、大平山山麓では今回報告の古墳以外に池の上9号が存するのみである。

また、これらと関わる集落跡は、古期のものとして扇状台地上で神蔵古墳の北に位置する小田道遺跡があり、小石原川扇状低地に上々浦遺跡が、時期的に若干下り西原遺跡が存在する。



これらは、神蔵古墳併行期かそれよりも古い集落跡である。それより以後のものとしては、6 C後半~8 C代の立野・宮原遺跡が、小石原川の西岸低台地上に立地する。以上のものが現在 知り得ている古墳時代の遺跡である。

これらの相互関係は明確に成し得ない。しかし、古墳などの構材の面から垣間見れば、小石原川・佐田川の両河川に挟まれた地に存する神蔵古墳・茶臼塚古墳などは、当古墳群の周辺から産する片岩(柿原石)を石材として用いている。即ち、神蔵古墳・茶臼塚古墳の主は、最低限でも小石原・佐田両河川に挟まれた平地と大平山南側山麓一帯を治め、この地域の盟主としてクニを形成していたと推察される。それにより当古墳群の被葬者は、それら盟主の被支配民であったことが窺える。

また、大平山山麓に於いても、当古墳群と池の上・古寺墳墓群と比べると、当古墳群では5 C代のものは、主に谷間に岩盤をさけて小形の竪穴式石室が営まれ、池の上・古寺墳墓群では、 丘陵の尾根上に岩盤を刳貫いて土坑墓等を築いている。これは習俗的な違いが感じられ、同じ 大平山山麓に於いてこれら2つの異なった共同体があった可能性が窺える。

また、調査区外ではあったが、L区丘陵端の東裾新池内に、明らかに石室と認められる石積みがあり、南西方向へ開口するものであろう。(図版135) (平嶋)

- 註 1 甘木市教育委員会『神蔵古墳』(甘木市文化財調査報告 第3集) 1978
  - 2 甘木市教育委員会『小田茶臼塚古墳』(甘木市文化財調査報告 第4集) 1979
  - 3 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』第5集 1984
  - 4 甘木市教育委員会『池の上墳墓群』(甘木市文化財調査報告 第5集) 1979 甘木市教育委員会『古寺墳墓群 I』(甘木市文化財調査報告 第14集) 1982 甘木市教育委員会『古寺墳墓群 II』(甘木市文化財調査報告 第15集) 1983
  - 5 柳田康雄「原始」『甘木市史』(上巻) 1983
  - 6 福岡県立朝倉高等学校史学部『埋もれていた朝倉文化』 昭和44年
  - 7 甘木市教育委員会『小田道遺跡』(甘木市文化財調査報告 第8集) 1981
  - 8 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』第1集 1982
  - 9 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』第2集 1983

#### III I地区の調査

#### A 調査の概要

精原古墳群 地区は、扇形に拡がる、柿原土採場内の中央部より、やや西寄りの谷部及び斜面に位置する。即ち、中央部に南方へ延びる、H地区の丘陵と、西端部のL地区の丘陵とに挟まれた谷部と、その北側奥の丘陵とである。現在、新池と称する堤池を南端とする谷の、緩斜面である。標高60mから110mの間を占め、大字柿原字大谷 $1327\cdot1322\sim1324$ 、字若山 $1303\cdot1303$ の $1\sim2$ の各地番にわたる。

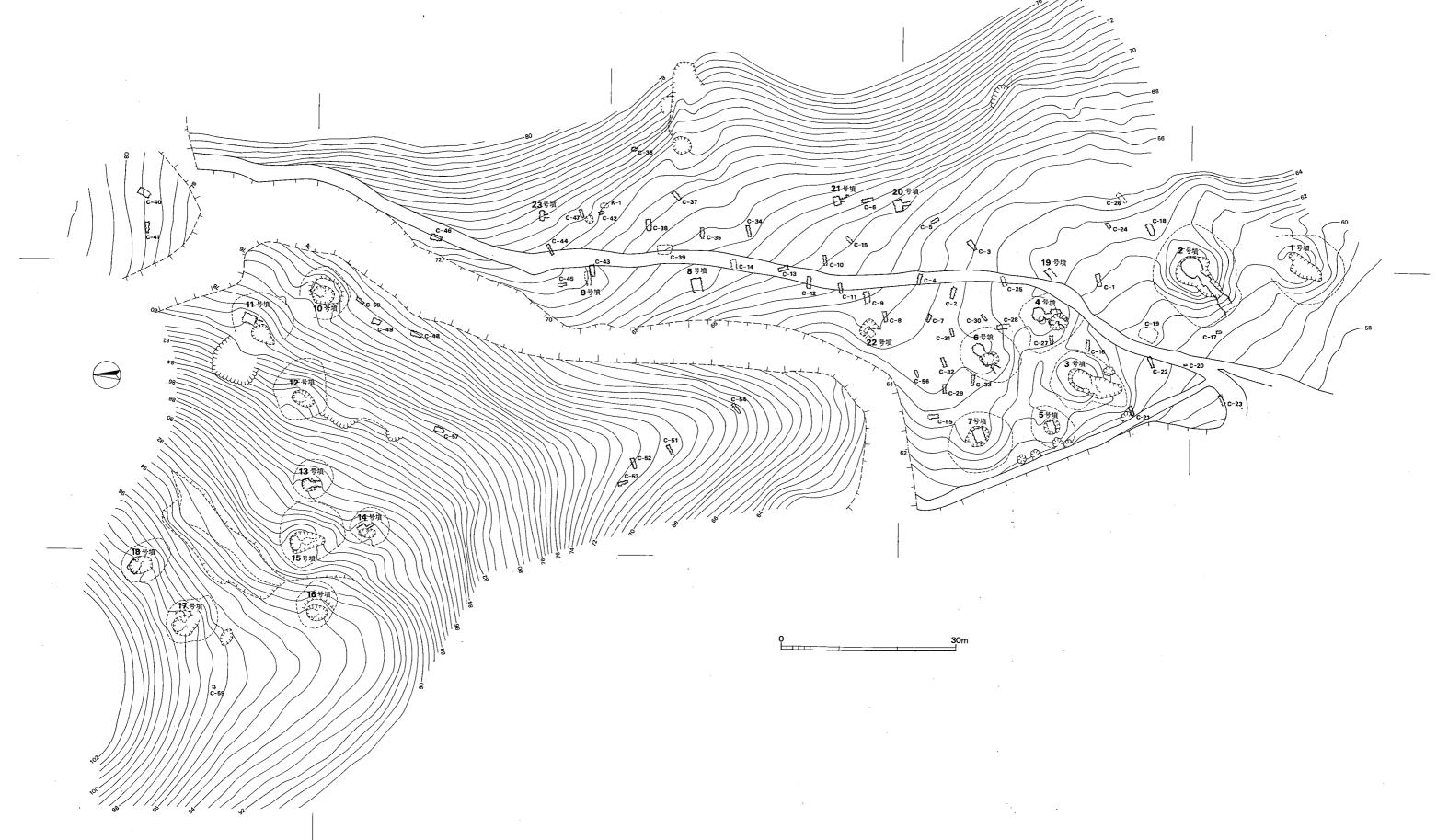
発掘調査は、当初の分布調査で確認されていた 2~7号墳から着手したが、I地区北方への、 伐採樹木除去作業の中途で、丘陵東斜面に10~18号墳の各墳丘を発見し、急拠これらの地形測 量にかかった。調査の進展に従い、予想をはるかにしのぐ横穴式石室古墳や、石棺系竪穴式石 室、土城墓等が検出されたが、それらの多くは、墳丘或いは、主体部上半までも削平されてお り、旧状を保たないものであった。

また、2~7号墳を中心とするやや平坦地では、古墳々丘中等より、弥生・縄文の各土器片が出土し、その下層にこれらの遺構の存在が予想された。各古墳調査完了後に、この地の36×40mの範囲に、一辺4mグリッドを設定し、全面発掘調査を行い、縄文早期・晩期の各遺構、遺物を大量に得た。(図版136)この成果については、報告を後に譲ることとして、今回は割愛させていただく。

縄文期を除く各期遺構の総数は、以下の通りである。

横穴式石室古墳	23基
竪穴式石室・石棺系竪穴式石室	55基
土址墓	1基
横口式小石室	2基
石囲い状小石室	1基
竪穴住居跡	1 軒
土址	13基
甕棺墓	1基

また、横穴式石室のうち1号墳は、未調査である。この古墳は2号墳の南に隣接し、2.5mの現存墳丘高を呈し、中央は大きな盗掘址で陥没しており、形態・規模ともに2・3号墳と、類似するものであろうと推定される。 (中間)





# B 横穴式石室古墳群の調査

## 1. 2 号 墳

墳丘(図版3・4,第6~10図)

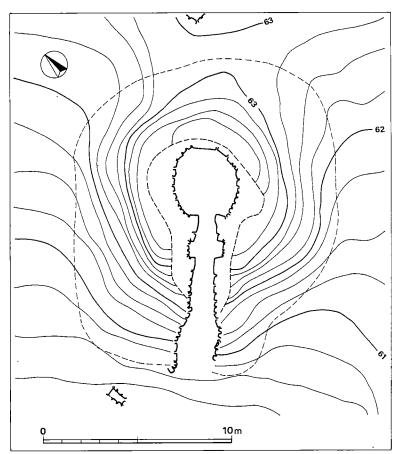
本墳は、北から南に延びる(H)舌状尾根の西麓の緩斜面に位置し、谷筋から見ると、上流に向かって右手前の昇り口近くにあたる。

調査前の観察では、墳丘は北東から南西方向が約17m、南東から北西方向が約14mの楕円形プランをなし、墳丘高は現状で3m強を測る。墳頂部は大きく陥没しており、石室自体は、かなり破壊されている事が予測された。しかし、墳丘の他の部分の残存状態はよく、周縁は削除された痕跡もなかった。

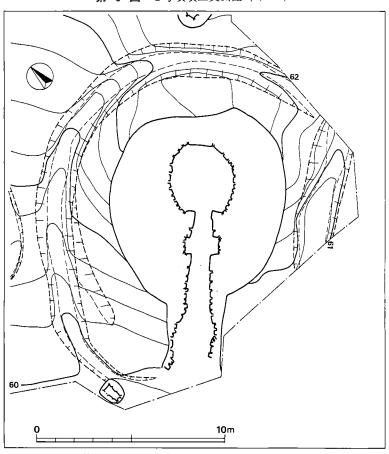
本墳は斜面上に等高線に直行させて石室を構築している。この為北東側が高く,南西側が低い地形を呈し,墳丘基底面をつくる為の地山整形もかなりの作業量が推測される。墳丘規模は,周溝外径で17.5~17.0m,周溝内側径で16.0~12.0m,周溝幅は1.8mとなる。前庭部へと浅くなる周溝は,全周をめぐる。周溝の深さは北側で0.7m,西側で0.3m,東側では深く,0.7mとなる。東側周溝部は,プランがやや歪となり,構築前の,小さな流水路的な谷を利用した節がみられる。

盛土は、旧表土層上に2.1m残っており、石室の墓址掘削後に、石室構築各段階に応じた盛土作業が行なわれている。即ち、玄室奥壁鏡石設置時のレベルまで墓址内の裏込め版築作業が行われ、次に鏡石上の大石上端レベルまでの、石室側壁構築後に、主軸中心から径4m前後を裾端とする盛土が施され、側壁石積の強化がなされている。更に数段の穹窿状石積の後に、天井石架構が行われた後に、大きく盛土が行われ、内護列石の構築が完成される。そこで一段落し、祭祀が行われた後、最終的な盛土、即ち、内護列石と周溝の間と、墳頂部への化粧盛土が施されて、墳丘構築が完成する。

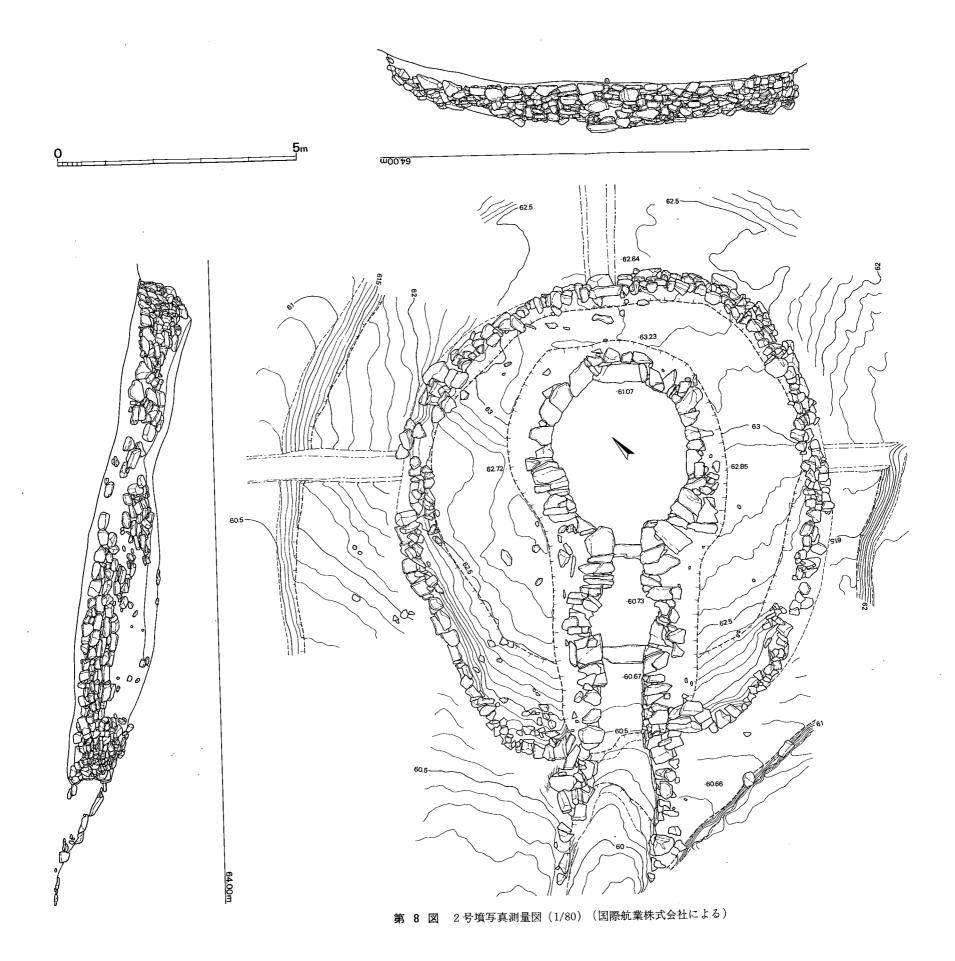
内護列石(第8図) 先に報告したG-1号墳にも顕著にみられた墳丘内構築物であり、当I-2号墳のものも同様に、全周に高く設けられている。まさに石垣とも称すべきもので、通常の古墳の墳丘内前面等にみられる「列石」の類とは明確に区別されねばならない。即ち、ここで称する内護列石とは、高さ1m以上に、8段以上の石を積み上げ、その傾斜は急であり、それが全周にめぐり、作業自体も石室部構築に次ぐ、一大工事なのである。また、「葺石」とも全く異なる性格を有する。即ち、墳丘盛土表面の保護という点からは、内護列石は明らかに墳丘内部の施設であり、内護列石構築後も、その外縁と周溝の間に盛土を行っていることからも、葺石との違いがわかる。本来外面には、表われない施設なのである。

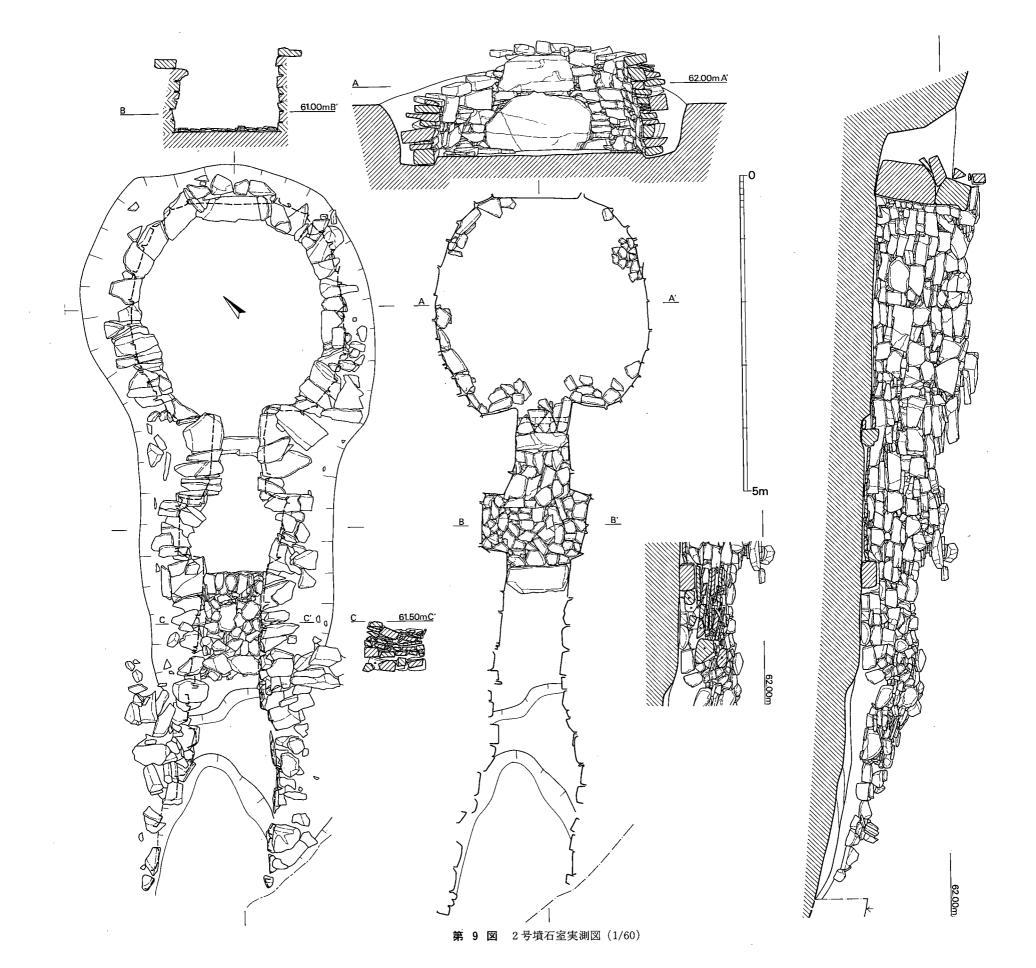


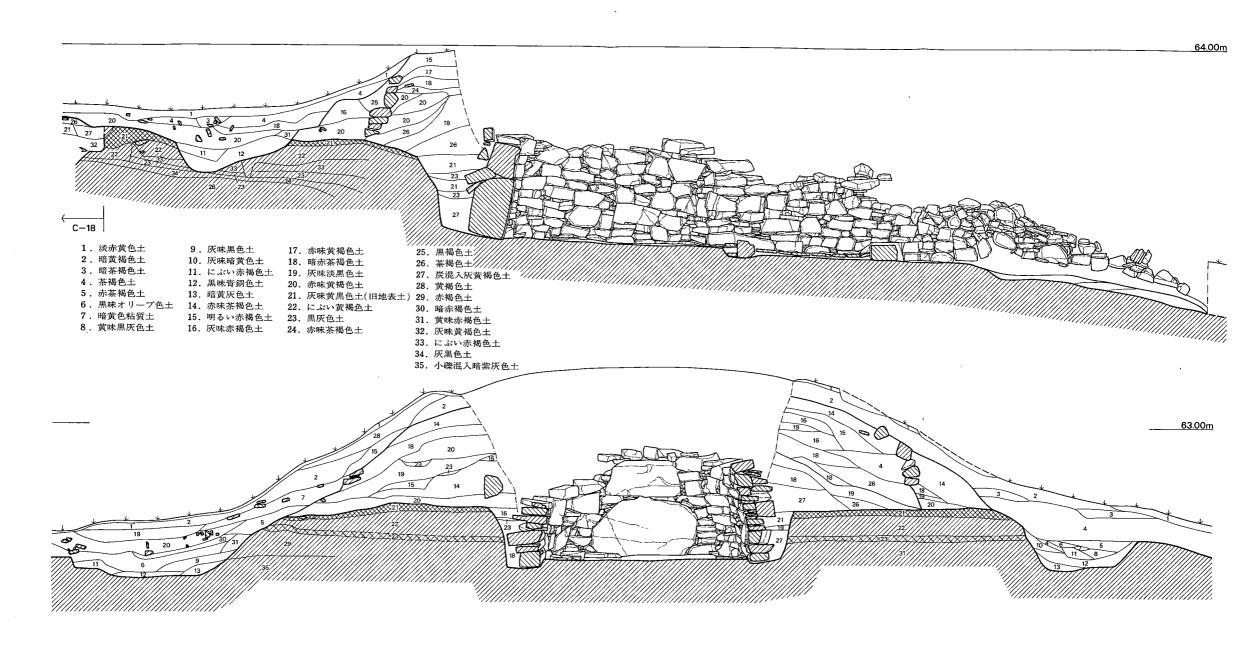
第 6 図 2号墳墳丘実測図 (1/200)



第 7 図 2号墳地山整形面実測図 (1/200)







当 I-2 号墳の内護列石は,羨道部外端から連続して巡らされており,羨道外側の袖石は,その後に雑に積まれたものである。全体のプランは,やや長円形を呈しており,長軸径は10m,短軸径 9 mを測る。構築順は,まず前半部を羨道部端から両周囲へ積んでゆき,後に玄室部を中心として,円を描くように,北半部を構築する。南半・北半は,各々の基底部レベルを,水平に保つようにしており,その結果,玄門部両端付近で各々の基底列石線が上下にすれ違う。これは,もともと斜面に直交して,当古墳を構築した結果であり,同様な現象がG-1 号墳にも顕著にみられる。

更に、この施設の性格の1つとして認められることは、両古墳に共通して、玄室を中心とする部分において、列石上端レベルを揃えて、平坦面をつくり出すという意図が窺える。このことは、天井石架構の為に作業面を確保したという目的の一端も想定できよう。勿論、墳丘盛土崩壊の防止と墳丘規模と範囲の確定が主目的ではあっただろう。

内護列石の使用石材は、やや大ぶりの自然塊石を基底部に据えて、それから上は、近辺で採 集した緑色片岩板石を積み上げている。 奥壁側の列石最上端には、その位置を意識したものか、 長い石を横位に積み、他部位の小口積み法とは区別している。

### 主体部(図版4~6,第9図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN43°Eにとり、西南の谷に向かって開口する、複室の両袖式横穴式石室である。石室の掘り方は、長軸で8.4m、短軸で4.7m程の不整長円形プランを呈し、奥壁部で深さ1.2mを測る。石室は、天井部・壁体の上部を欠くが、全体の様相は大旨、残り良好である。玄室から羨道部にかけて、大きく陥没孔がみられ、盗掘と、更に石材採出によると考えられる。玄室は特に盗掘がひどく、床面敷石も壁際にわずかに残る程度であった。ただ、前室から、閉塞石を含めた羨道、更に前庭部までは遺物も良く残存し、殆んど荒らされていない状況であった。

石室全長は、羨道部端までで8.0m、袖石南端までで10.97mを測る。

玄室は、長さ3.27m、最大幅3.35m、奥壁際の幅1.4m、玄門側の幅2.0mを測り、強い胴張りプランを呈する。残存する側壁は、奥壁に大きな鏡石1個を、その上にやや小ぶりの大石1個を積む他は、やや厚手の緑色片岩板石の、小口積みである。床面からの高さ1.7mまで残り、東側で、11段積み上げている。基底部は、墓址底を0.15mほど掘りくぼめて、側壁を構築している。他地域古墳の如く、最下部の所謂腰石に大きな石材を使用することはなく、最下段から板石の小口積みである。側壁上下間での石材の異種選択は認められない。ただ、玄門袖石最下部にだけは、やや厚手の大きな石を使用している。奥壁・両側壁ともに、床面に近いところから内傾させて、わずかづつ持ち送りを行っている。

玄室と前室の間は、長さ1.4mと通常のものより長めで、壁基底石も大小の2石を据えてい

る。玄門部より0.4m前室寄りに引っ込んだ位置に、仕切り石が埋め込まれている。この石の玄室側際には、3石の根石がみられ、石室構築の丁寧さが窺われる。

前室は、主軸長1.0m、幅1.63mの横長な、やや歪な長方形プランをなし、床面には扁平な、板石をしきつめており、遺物の残りも良好であった。両側壁は、大旨玄室のそれと構築法は同様であるが、ただ右壁はかなり垂直に立ち上がり、内側へのせり出しは、現存部上端でわずかに認められるのみである。羨道部との境に、わずかに羨道側へ引っ込んで、仕切り石が据えられる。玄門寄りの仕切り石との間は1.8mを測る。

羨道部は,長さ2.1m,幅は1.0~1.1mとなり,床面には敷石を施さない。側壁は,いくらか雑に小塊石を積んでおり,前室までと様相がいくらか異なる。

閉塞石が、前室寄りの仕切り石上面から、長さ1.6mの間に施されている。前室側の積んだ面は、きれいに揃えられており、緑色片岩板石の密で丁寧な閉塞である。ただ、下位と前庭側には、塊石(図中▲印)を意識的に使用して、閉塞全体の強化に努めている。

羨道部外端から内護列石へは、連続して積み巡らされており、羨道部の外側へは、その後に若干の積石をして、袖状部を付けている。その間を、ここでは前庭部と称しておくが、これは所謂墓道的な掘り込みが、全くみられない為である。この前庭部両脇の袖部積石は、全く雑で、石材も最下部に一応大きめの塊石を置くが、全体にいい加減で、その基底部プランも歪んでいる。羨道部には遺物が殆んど無く、前庭部に多量に残存していた。

床面は、玄室から前室・羨道部にかけて、わずかに傾斜して低くなるが、大旨平坦であり、 羨道部外端で20cmほど段落ちし、前庭部で更に大きく落ち込んでいる。

この前庭部は、おそらく西側墳裾付近で、浅く不明瞭となる周溝の面とつながるものと推測され、古墳前面側の周溝は、掘られていないと考えられる。

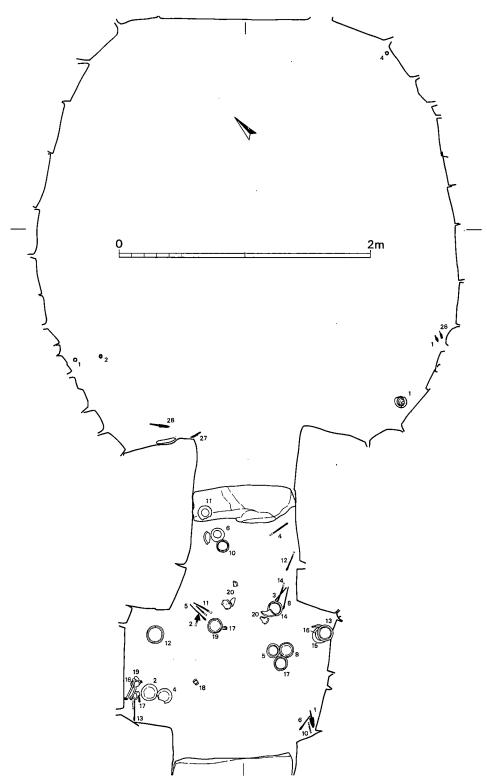
尚, 前庭部から西南側の部分については、調査範囲の境界ぎりぎりまで掘った。更にその先にいくらかの供献土器等の残存が予想されたが、未調査のまま残した。

### 遺物出土状況(図版7・8, 第11・12図)

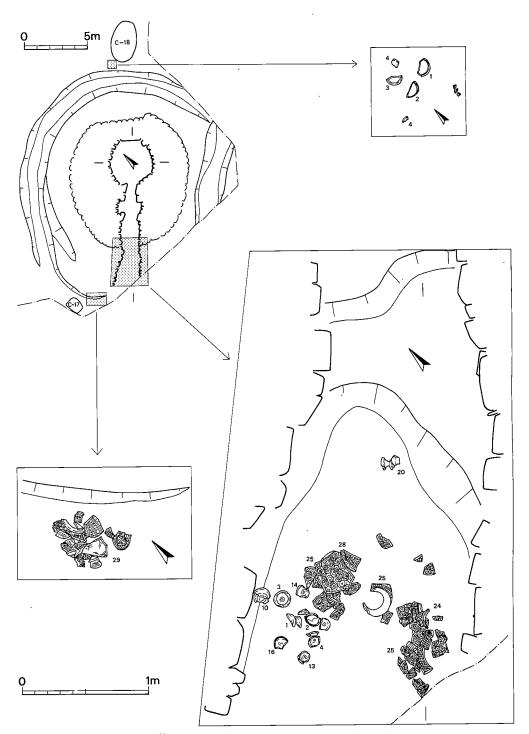
2号墳は既に、玄室において敷石の殆んどが除去される程の盗掘を受けていたが、前室・前庭部・周溝の一部等に副葬品・供献品を良く残していた。

玄室では、攪乱埋土中から、鉄鏃10+α本、留金具3点、耳環2点、碧玉製管玉1点が出土した。床面からは、耳環3点、鉄刀子3点、鉄鏃1本が出土しており、更に右壁玄門寄りでは、床面敷石より6 cm浮いて、土師器底部糸切り小皿が出土した。これは盗掘の時期を示すものかもしれない。

前室では、その出土状況で、大きく2類に別けられる。即ち、床面敷石直上のもの(鉄器のすべてと須恵器杯蓋2点)と、敷石から6~20cm浮いて出土したもの(須恵器杯蓋9点、杯身



第 11 図 2号墳石室内副葬品出土状態実測図(1/30)



**第 12 図** 2 号墳土器出土状態実測図 (1/30)

6点、高杯脚部 1点)である。土器の年代より、少なくとも 2回の追葬が考えられることから、このように各々浮いた状態での出土状況がみられるのであろう。又それらの際の攪乱により、古手の土器がかなり上位に検出される結果となったと考えられる。例えば、第17図 3・12の領恵器は床面より20㎝以上浮いている。前室西南隅の須恵器 2点(2・4)は、壁際であった為か、初葬の時の床面直上の原位置をかろうじて保ったものかと考えられる。鉄器は、すべて床面直上出土の為、追葬時副葬の物の判別なし難いが、少なくとも南西隅の床面直上杯蓋に接する馬具類は、初葬時のものであろう。須恵器杯類は、身と蓋とセットになり、かぶさって出土した物はなく、明らかに容器として、中に食物等を入れて供献したと確定できるものはない。かえって、土器そのものを、重ねて供献したような形跡さえみられる。(例13・15・16)また、鉄鏃 3 本づつが、主軸に対称に出土している。これらは、鋒先を下にした矢 3 本づつを、側壁に立てかけて、玄室への入口を守ったという、所謂辟邪の役割を果たしたものと考えられる。

前庭部では、南端の大きな落ち込みの中に、須恵器大甕3点が、完全に破砕された状態で出土したのを始め、その周辺に混然として、須恵器杯蓋・身・高杯・脚付椀・坩・腿・横瓶、土師器高杯・椀・杯身・蓋・脚付ミニチュア、鉄鏃片等が、多量に出土した。各々は時期差があり、追葬の存在を知ることができる。足の踏み場もない程、土器の量が多く、出土状況から各葬時のまとまりを判別することは、困難と言わざるを得ない。

I 区前面列石直下では、鉄刀子片・留金具、須恵器杯蓋・璲・高杯、土師器杯身・高杯等が 出土しており、中には列石積石間隙に、食い込んだ物もあった。特に土師器高杯の量が目立ち、 祭祀的性格を感じさせる。

Ⅳ区列石前面直下からは、I区と同様に須恵器杯身・蓋・高杯、土師器杯身・高杯等が出土 している。器種・数量ともに、I区前面列石直下の様相と酷似しており、或いは同時に左右前 面に同様の祭祀が施されたかと考えられる。

この I 区・IV区列石前面直下の祭祀は、内護列石直前ではあるが、構築直後の竣功記念としての祭祀とともに、盛土のやや薄いこの前面における追葬時、各々の祭祀も行われたと考えられよう。

前庭部西側の浅い周溝内から、須恵器甕1点が、完全に破砕されて出土した。前庭部における、甕出土の状況と同様である。

玄室のはるか裏側にあたる、周溝のすぐ外側のC-18脇より、須恵器杯身3点と、土師器高杯1点が、かたまって出土した。その位置から考えて、当2号墳に伴う供献品と考えた。又、Ⅲ区周溝内からは、土師器甕(把手付)1点が出土している。

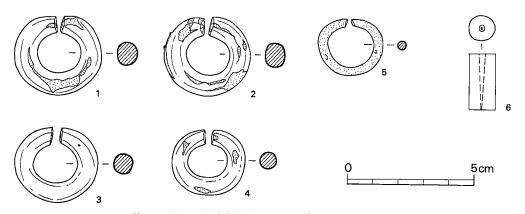
以上の遺物出土状態の様相をまとめると、前室床面直上の遺物と、前庭部出土の一部、I・IV区前面列石直下出土の大部分、また周溝・及びその周辺の遺物が初築・初葬時のものであり、その他が追葬時以降の年代を示している。更に、祭祀的様相の濃い I・IV区前面列石直下と、

前庭部の状況も特徴的である。

### 出土遺物

装飾品(図版9,第13図)

耳環  $(1 \sim 5)$   $1 \cdot 2 \cdot 4$  は玄室床面直上出土, $3 \cdot 5$  は玄室内攪乱埋土中出土品である。 1 は径3.4×3.1cm,重量31.5gの銅地銀張りで,断面は長円形となる。 2 は径3.4×3.1cm,重量31.0gの銅地銀張りで,断面は長円形となる。  $1 \cdot 2$  は対となろう。 3 は径3.2×3.0cm,重量24.3 gの銅地銀張りで,銹は無く,残り良好である。 4 は径2.9×2.6cm,重量16.2gの銅地銀張りで,断面は円形をなす。 5 は径2.6×2.2cmで重量3.4g,銅地のみ残り全面緑錆で覆われる。管玉(6) 玄室内攪乱土中出土品で,濃緑色碧玉製。長さ2.2cm,径1.05cmで,裏面は縦半分が欠損しており,現在重量3.5gを量る。



第 13 図 2号墳玄室出土耳環·管玉実測図 (2/3)

#### 鉄 器

#### 玄室出土鉄器 (第14図)

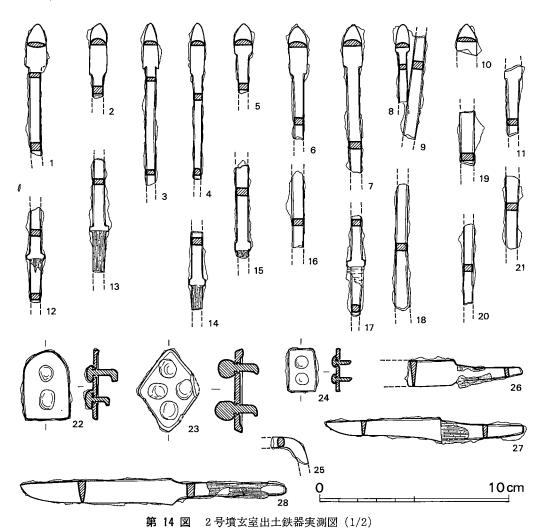
鉄鏃(1~21)1のみ床面直上のもので、他は攪乱土中出土品である。すべて棘箆被鑿箭式の もので、身部下端が角関となるもの、膓抉状を呈するもの(3)などがある。身部は片丸造り が多く、1も片丸造りの可能性がある。全長がわかるものは無い。

**刀子**(26~28)いずれも床面出土である。26は棟側が角関となり、茎部には鹿角がわずかに付着する。茎部長3.5cm。27は全長10.5cm、身長6.1cmで、身全体が内反り状となる。28は全長14.0cm、身長8.0cmで茎部の長いタイプである。両削関となり、全体に直線的な類となる。

留金具(22~24)いずれも玄室攪乱土出土品である。22は長さ3.6cm,幅2.4cm,片方が丸くなる。鋲先端は2本とも打ち曲げられている。鍍金等全く無く,すべて鉄製。23は菱形をした4.

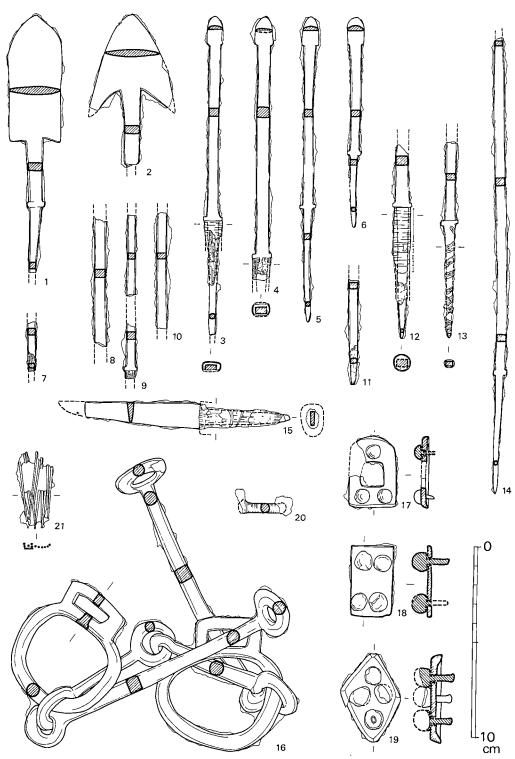
3×3.3cmの4 鋲付で鉄製。24は小形長方形で2.25×1.45cmの2 鋲付で鉄製。

**不明鉄片** (25) 断面楕円形に近い鉄棒を、くの字に曲げたものである。鉸具の輪金となる可能 性も考えられる。



前室出土鉄器 (図版9・10, 第15図)

鉄鏃( $1\sim14$ ) 1 は棘箆被広鋒両丸造柳葉式でわずかに膓抉気味となる。身長6.5cm,身幅2.7 cmを測る。 2 は箆被広鋒両丸造膓抉三角形鏃である。  $3\sim6$  は片丸造棘箆被鑿箭式で長短 2 種がある。 5 は全長16.0cm,茎部長5.9cm,6 は全長11.0cm,茎部長3.9cmである。  $3\cdot4$  には樺沓巻きが残る。  $7\sim13$ は鋒先が明確でないが,12は棘部から1.9cm間は 1 枚の樺巻で,それ以下は幅  $3\sim4$  mmの細い樺巻を施している。 13は木箆がみられず,幅  $2\sim4$  mmの細い樺が螺旋状に



第 15 図 2号墳前室出土鉄器実測図 (1/2)

巻きつけられている。柄を付けず、手持ちで使用する工具類となる可能性も考えられる。14は 鋒先部を欠くが現存23.9cmと異状に長く、鏃以外の可能性も考えねばなるまい。

**刀子**(15) 残存部身長6.1cm, 茎長4.8cmを測り, 木質が多く残る。

轡 (16) 鉄製部分全部が残る。引手金具長15.4cm,素環鏡板には長方形孔の立聞が付く。銜部 分は2本の両端円環付のものを連結したタイプである。

**留金具** (17~19) いずれも全面鉄製で金張り等はみられない。17は中央に透し孔があり、片端が丸くなる 3 鋲のタイプで、長さ3.8cm、幅2.6cmを測る。18は長方形の 4 鋲タイプで、長さ3.7cm、幅2.3cmを測る。19は菱形の 4 鋲タイプで、長さ4.7cm、幅3.3cmを測る。17と19は縁辺が裏面側へ突出する。

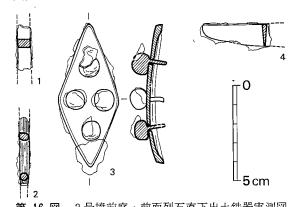
両頭座金付留金具 (20) 復原長2.5cm, 中央部径0.5cmの断面円形をなす。中央部には皮か何かを巻いている。

針 (21) 計11本が銹着しており、3.7~4.0cmの長さである。糸通し孔は明らかでない。この裏面に平らな木質が付着しており、小箱に入れて副葬されたものと考えられる。

#### 前庭・前面列石直下出土鉄器 (図版10、第16図)

鉄鏃(1・2)いずれも前庭部出土小 片で、2は茎部で木質が残る。

留金具(3) I区前面列石直下出土品で、長い菱形のタイプである。鋲を 4本有し、緑錆が鋲上部に吹き出しており、 鋲頭部のみに金銅張りしてあったもの と考えられる。他部分は鉄地そのまま である。長さ7.5cm、幅3.25cmで、全体 にややカーブしており、打ちつけた対象 物が曲面をなしたものかと思われる。



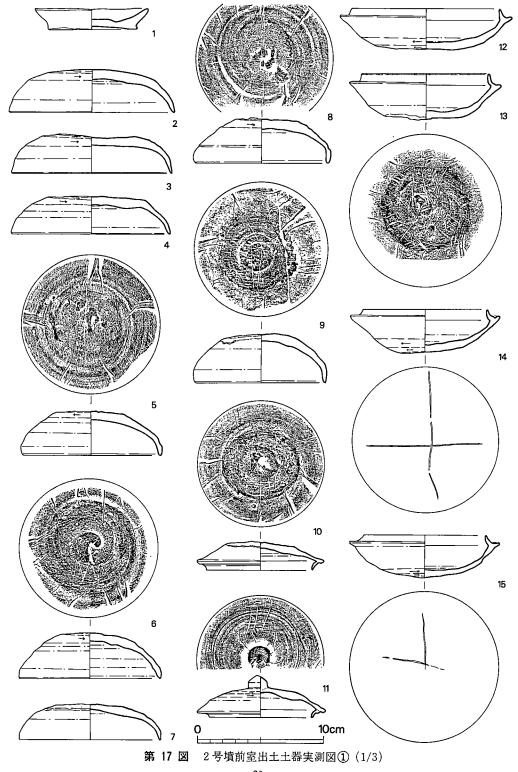
第 16 図 2 号墳前庭・前面列石直下出土鉄器実測図 (1/2)

刀子 (4) I区前面列石直下出土品で、鋒先部のみの残片である。現存長3.6cm。

#### 土器

#### 玄室出土土器

土師器小皿(図版11,第17図1)玄室内からは、この1点のみ出土した。口径9.0cm,器高1.6 cm,底径7.1cmで底部糸切り、内底面はナデツケがみられる。焼成良く黄褐色~淡赤褐色をなし、部分的に口縁端に油煙がこびりつく。灯明皿に使用されたものであろう。平安末~鎌倉初頭前後とされようか。床面敷石より6cm浮いて出土しており、本墳玄室の盗掘の時期を示すものかと考えられる。



**- 20 -**

#### 前室出土土器

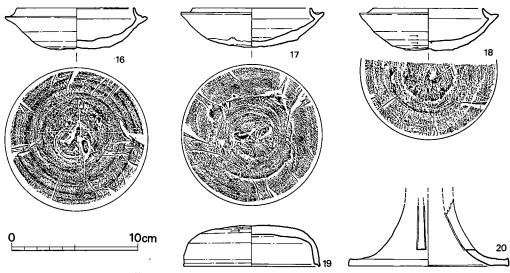
須恵器 (図版11, 第17図)

杯蓋 I 類(2~4)口径13.1~12.6cm, 器高3.3~3.0cmの大型品である。いずれも天井外面は左廻りの回転へラ削りを施し、口縁端部へとやや薄くつくる。 4 は身の12とセットとなろう。いずれも粗石英粒かなり含み、焼成堅緻である。 4 の内面中央にはナデツケがみられない。

杯蓋II類( $6\cdot7$ )口径 $11.3\sim11.2$ cm,器高 $3.6\sim2.8$ cmで,7の如く I 類の形態を良く残すものと,6のように端部が丸味を帯びてくるものとがある。6は天井外面左廻り回転へラ削り,焼成軟質で淡灰褐色をなし,天井外面にW字形のヘラ記号を施す。7の天井外面は僅かにナデッケ状となり未調整的で,端部はシャープである。焼成良く,濃灰色をなす。

杯蓋Ⅲ類(5・8・9)口径11.0~10.4cm,器高3.9~4.5cmで,端部が丸く,天井外面に未調整部分を残す類である。後述する前庭部出土品中で,身・蓋が完全にセットになるものがあり,その判断から,返りのある身が蓋となるという,身と蓋の逆転するタイプを知ることができた。その中で身Ⅲ類としたものが,ここで述べる蓋Ⅲ類に相当する。よって本来ならば,この類は身Ⅲ類と称すべき所ではあるが,前室出土品の中に明らかな身・蓋のセット関係を示すものが無いため,一応ここでは蓋Ⅲ類として掲げておく。5は,天井外面未調整で,十字形の極めて浅いへラ記号を施す。焼成やや軟質で,内外灰~灰白色をなす。8も天井外面中央部かなりが未調整で,周縁部のみ回転へラ削りを行い,浅い十字形へラ記号を施す。胎土に細砂粒をかなり含み,焼成は堅緻で内面青灰色,外面は暗灰褐色をなす。9も天井外面未調整のままで,5本直線の組み合わさったへラ記号を施す。所謂生焼けで淡灰白色をなす。

杯蓋Ⅳ類 (10・11) 未だやや長めの返りを付けながら、明らかに扁平・小型化した類で撮も付



**第 18 図** 2 号墳前室出土土器実測図② (1/3)

く類である。10は口径10cm、器高2.3cmで、天井外面は切り離し後、未調整のままである。外面には横棒に縦3本線をいれたへラ記号がみられる。胎土・焼成ともに良く、濃青灰色をなす。11は左廻り回転へラ削りを施し、小さな擬宝珠撮を付ける。全体にかなりシャープで、精製な感じを受ける。胎土・焼成・技法ともに10・11は酷似している。

**杯身**I類(12)受け部径13.6cm, 器高3.2cmを測る。底外面は左廻りへラ削りが施され, 胎土に 粗石英粒をかなり含む。これは特徴的である。焼成堅緻で濃灰色をなす。内底面中央まで回転 ナデのままで, ナデツケを施さない。

**杯身**II類  $(13\sim15)$  受け部径 $12.0\sim11.8$ cm,器高 $3.6\sim3.3$ cmの法量を示すもので,底部外面は左廻り回転へラ削りを施す。13は底外面に組織圧痕がみられ,4本直線を組み合わせたへラ記号が施される。14は底外面に浅く薄い大きな十字形へラ記号を施している。15は焼成軟質で,灰白色をなす。底外面には消えかかっているが,丁字あるいは十字形のヘラ記号が施されている。

杯身Ⅲ類(16~18)受け部径11.3~11.0cm,器高3.3~3.1cmで底部外面に未調整部分を大きく残す類である。この類は,前述したように,蓋Ⅲ類となる可能性の強いものである。16は底外面中央が未調整で,その周縁部のみ回転へラ削りを施す。外面全体に大きな十字の細く浅いへラ記号を施す。17は底外面未調整で,その周縁に粘土はみ出しがみられる。×印の真中の下に縦1本線を入れた,鋭利なヘラ記号を施す。18は天井外面未調整で,焼成堅緻で内外面ともに青灰色をなす。%残存。底外面には横棒に縦3本線を入れたヘラ記号が施される。前室中央の床面から20cm浮いて出土した。

坩蓋(19)短頸の坩等の蓋となると考えられ、口径10.8cm、器高3.2cmとなる。口縁端部はシャープでややへこみ、天井外面は左廻りの回転へラ削りを施す。胎土精良で焼成堅緻、内面淡灰色、外面は灰黒色をなす。

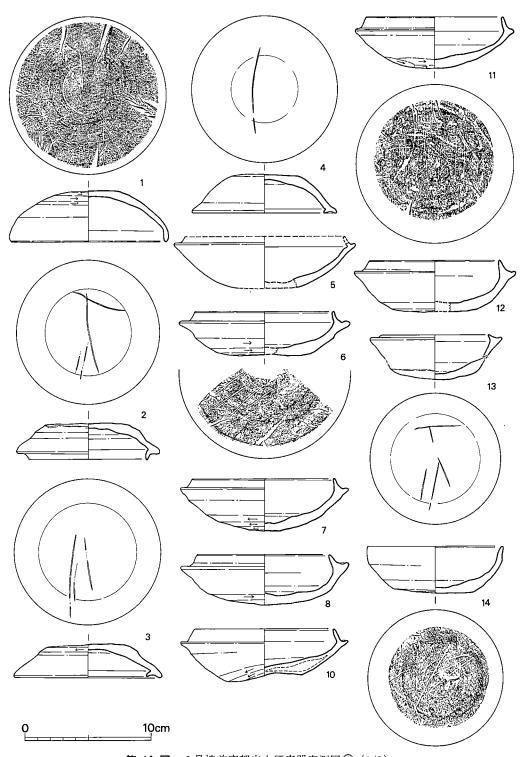
高杯(20)縦長の長方形透しを有する脚部である。裾端部は上下ともシャープな角をなし、内外面ともに回転ナデを施す。透し部は対称位置に2ヶ所のみで、透し内側には、粘土はみ出しがみられる。胎土精良で焼成堅緻、淡青灰色をなす。

#### 前庭部出土土器

須恵器(図版12~14, 第19~21図)

杯蓋 I 類(1) 口径12.7cm, 器高4.0cmで, 天井外面は左廻りの回転へラ削りを施す。胎土に粗石英粒を幾らか含み、焼成堅緻で,外面暗灰~灰黒色,内面は青灰色を呈する。天井外面に恐らく×印となるへラ記号が施されている。

杯蓋III類(2~4)前室出土須恵器で分類した杯蓋II類は、ここでは出土せず、身が逆転して蓋となったものを蓋III類とした。口径11.7~11.4cm、器高3.0~2.7cmである。 3 点とも所謂生焼けで灰白色を呈し、14・16の逆転した身と同様であり、セット関係をなすものである。 3 点とも天井外面はヘラ切離し後未調整のままであり、また各々図示した如きヘラ記号を施すが、



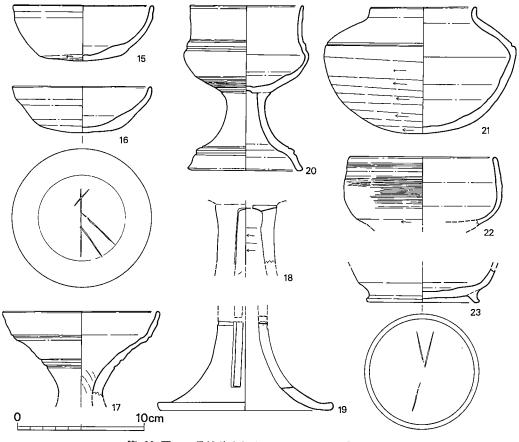
第 19 図 2 号墳前庭部出土須恵器実測図① (1/3)

#### 2 号墳

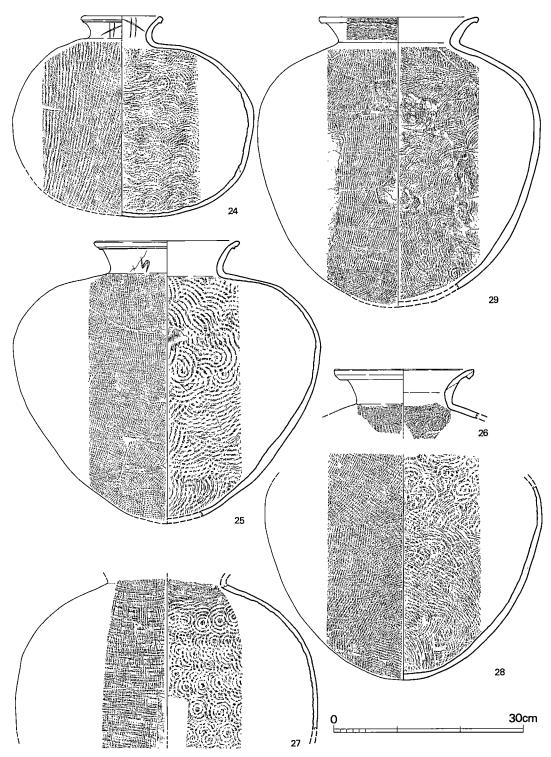
全てかなりの部分が磨減した消えかかっている状況である。また、13も同様に生焼けで調整も同じであり、復原の関係で深い器形となったが、もっと浅い器形と考えて、やはりこの蓋III類に入れた方がよさそうである。

杯身 I 類(5~7・10・11)口径12.7~10.9cm, 器高4.2~3.5cmで, 5を除いて他は,口径11 cm前後に集中する。5は破片資料で法量は正確さを欠く。焼成不良で白褐色をなす。全面磨減して調整不明。6は底外面に4本線のヘラ記号がみられ、右廻り回転ヘラ削りが施される。7 は胎土に黒色微細粒・石英細粒をかなり含み、焼成堅緻で、外面は灰かぶりで暗灰~淡灰色をなし、内面は灰色を呈する。10は全体に焼き歪み著しく、底面は焼きぶくらみが全体に著しい。11は、底外面に手持ちのヘラ削りが施されており異質である。また6本の雑な平行線のヘラ記号がみられる。焼成やや軟質で、内面青灰色、外面は暗灰~茶灰色をなす。

**杯身**II類( $8\cdot12$ )口径10.4cm,器高4.0cmを測り,器壁厚く特徴的な類であるが,法量だけからみると I 類と明確に区別し得るか疑問も感ずる。 2 点ともに生焼けで,淡いこげ茶色を呈し,



第 20 図 2 号墳前庭部出土須恵器実測図② (1/3)



第 21 図 2号墳前庭部出土須恵器実測図③ (1/6)

器表は全面磨減している。底外面は回転へラ削りのようである。

**杯身Ⅲ類**(14·16)蓋が逆転して身となったもので、2点とも生焼けで灰白色をなす。明らかに杯蓋Ⅲ類とセットをなすものである。14は、底外面は右廻り回転へラ削りを施し、14·16とも4本直線の組み合わさった、同じへラ記号がみられる。

**B**(17) 口径12.4cm,内外面ともに回転ナデ、頸部内面にはシボリ痕が残る。胎土に粗石英粒をかなり多く含み、特徴的ですらある。焼成堅緻で青灰色をなす。

高杯(18・19)18は縦長透し孔を有する脚部上端片で、胎土良く、焼成軟質である。内面には 横位のへラ削り痕がみられる。19は、長脚二段透しの高杯となろう。内外面回転ナデ、胎土に 粗石英をわずかに含み、焼成軟質で淡白褐色を呈する。透しは全周に3個所配する。

脚付椀(20・22)22は、口径11.7cmで、体部が丸くふくらみをみせる。体部外面は、1 cmに10本の目の細かいカキ目が施され、最下端はヘラ削りがみられる。胎土に細石英粒と微細黒色粒子がやや目立つ。焼成堅緻外面は灰かぶりで灰~灰黒色をなし、内面は青灰色を呈する。20は、口径9.0cm、器高13.0cm、脚部高6.2cmを測る。椀部内底面はナデツケがみられ、外面下半にカキ目が施される。他は回転ナデ。胎土に粗石英粒を若干含み、焼成堅緻。脚内面以外は灰かぶりで、黒~灰黒色を呈する。脚裾端が一部焼き歪んでいる。

坩(21) 口径8.1cm, 器高9.9cm, 胴部最大径15.2cmを測る。外面下半は回転へラ削りを施し, 内底面は不整方向のナデツケがみられる。焼成堅緻で暗青灰色をなす。

高台付杯(23)焼成やや不良の混入品である。底外面に×印となるへラ記号がみられる。7C末に近い後葉の所産である。

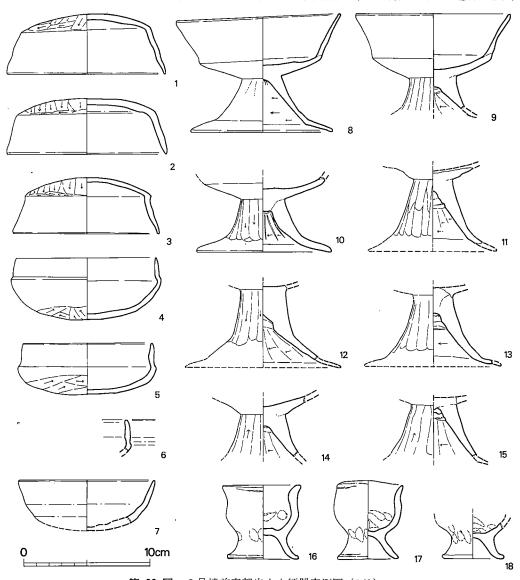
横瓶(24)口径12.0cm, 器高31.5cm, 胴部最大径38.5cmを測る。頸部内外面に同じへラ記号が施される。外面のヘラ記号は, 実際には図で断面側にある。胴部外面は格子目に極めて近い条 蓆状叩目を, 施し, 内面は青海波が全面密にみられる。内面下半は粗い施法で凹凸著しい。左側肩部付近にのみ縦方向カキ目が施される。

甕(25~28)25は、口径23.2cm、器高44.6cm、胴部最大径49.7cmの、肩の張った器形をなす。 頸部外面には折れ線のへラ記号がみられる。頸部外面カキ目、胴部外面は格子目叩きの上に、 間隔をおいてカキ目を施す。胴部内面には、粗大な青海波がみられる。粗砂粒を多く含み、焼 成堅緻で外面灰~灰黒色、内面は淡灰色をなす。肩には灰かぶりがみられる。26は、口径21.8 cmで焼成甘く淡褐色を呈する。胴部外面は縦位の平行条線状叩目、内面は青海波がみられる。 27は、肩から胴上半部であるが、胴部外面は格子目に近い条蓆状叩目の上を、横位の雑なカキ 目を施す。内面は密な青海波がみられ、焼き良く、内外面ともに暗灰色をなす。28は、下半部 であるが、最大径43.8cmを測る。25と同様な肩の張った倒卵形となろう。外面は格子目に近い 条蓆状叩目の上を間隔を置いて粗い横位カキ目を巡らす。内面は青海波が密に施される。焼成 堅緻で青灰~暗灰色をなす。

#### 土師器 (図版15, 第22図)

杯蓋( $1\sim3$ )所謂須恵器写しの器形であるが、その程度により各々差がある。いずれも天井外面は、殆んど一方向への手持ちのヘラ削りがみられ、他は横ナデが施される。 2 は、全体にシャープさに欠けるが、調整手法は他と同様である。  $1\cdot3$  は胎土精良であるが、 2 は黒色微細粒子・茶色粒子をかなり含む。3 の体部との境目稜は、非常にシャープである。口径 $12.7\sim11.7$ cm、器高 $4.8\sim4.4$ cmを測る。

杯身 $(4\sim6)$ 4は、口径11.1cm、器高4.9cmで全体に薄手精製で、内外数ケ所に黒色漆の痕跡



第 22 図 2 号墳前庭部出土土師器実測図 (1/3)

が残り、内外面漆塗となろう。底外面は手持ちへラ削り、胎土精良で焼成良く淡褐色をなす。 5は、口径10.3cm、器高4.1cmでやや小型品である。底外面は手持ちへラ削り、内面は極めて平 滑である。他はロクロ使用と思われる様な、回転ナデで内外全体に淡(赤)茶色のスリップをか けている。ただ、丹塗り的な赤さではない。6は、口径11cm前後のものかと考えられる。胎土・ 焼成ともに良好で淡茶色を呈する。

椀 (7, 第20図15) 7は、口径10.8cm, 胎土精良で淡橙褐色を呈し、明らかに古墳時代土師器である。第20図15は、口径11.1cm, 器高4.4cmを測り、底外面は須恵器的な回転へラ削りを施す。焼成良く淡黄褐色を呈する。

高杯(8~15)8は、口径13.1cm、器高9.1cm、脚端径11.4cmを測る。脚端部内面は段状に小さな玉縁的になる。脚柱部外面は縦位へラ削り的な感じも僅かに残り、ヘラ削り後、丁寧な回転ナデが行なわれたと考えられる。脚柱内面は回転方向の丁寧な削りが施される。胎土精良で焼成良好、淡赤茶~淡黄褐色をなす。9は、口径12.3cm、杯部高5.0cmで胎土精良、全面肌色を呈する。脚柱外面は縦位へラ削りが施される。10~15も脚の短いタイプで、いずれも胎土精良、同工である。脚柱内上位が充実したものと、そうでないものとがある。

台付ミニチュア (16~18) 16は、口径6.3cm、器高5.8cm、17は、口径5.3cm、器高6.2cmとなる。 3点ともにほぼ同工で、上部内面がナデツケ状で、指オサエ痕がいくらかみられる他は横ナデ を施す。いずれも胎土精良、焼成良好で明橙茶色をなす。部分的に手捏的な感じも残るが、全 体に一応丁寧なつくりである。

#### I区前面列石直下出土土器

須恵器 (図版17, 第23図)

杯蓋(1・2)1は、口径12.0cm、器高3.9cmを測り、天井外面は左廻り回転へラ削りを施す。 焼成やや軟質で内面淡茶褐色、外面は淡茶~灰黒色を呈する。体部外面には4本線のヘラ記号 がみられる。前庭部類別で蓋I類の小ぶりの範囲に入る。2は、擬宝珠撮の付くタイプで、×印 のヘラ記号を施す。焼成軟質で外面暗茶褐色、内面は淡青灰色をなす。口径10.7cm、器高3.1cm を測り、天井外面には回転ヘラ削りが施され、同内面にはナデツケがみられる。

**聰** (3) %弱残存する破片であるが、外面上半にカキ目を施し、胴下位外面は回転へラ削りを施す。焼成いくらか軟質で、淡いねずみ色を呈する。

高杯(4・5) 4 は、口径11.3cmで内外面回転ナデ、杯内底面はナデツケる。屈折稜から上の外面は灰かぶりで灰黒色、内面は淡灰黒色をなす。 5 は、脚端径11.0cmの脚柱径の小さいタイプである。内外の丁度対称的な位置に鋭利な 2 本沈線のへラ記号がみられる。胎土に細石英粒を多く含み、焼成堅緻で、外面灰かぶりで灰~黒色、内面は黒色を呈する。

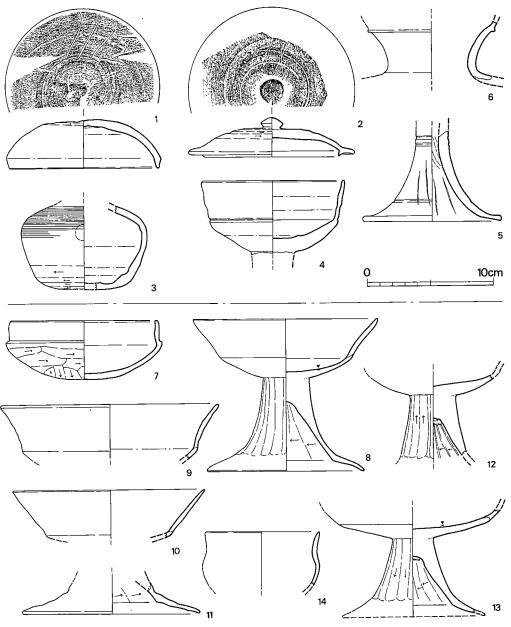
壺(6)所謂陶質土器的な大形態,或いは口縁の内湾する壺片である。内外面ともに回転ナデで,稜線はシャープである。胎土精良で,焼成やや軟質で灰色を呈す。この時期の墓地が,こ

の北辺に拡がっていることから、当2号墳築造時の混入品であろう。

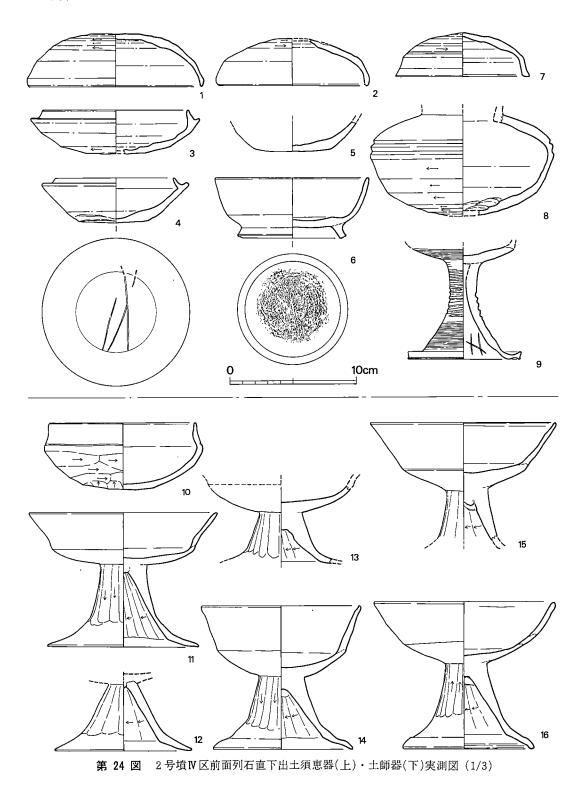
土師器 (図版17, 第23図7~14)

**杯身**(7)口径11.7cm, 器高4.6cmで体部外面は手持ちへラ削り, 他は回転ナデ, 内底面はナデックを。胎土精良, 焼成良好で茶褐色を呈する。

高杯 (8~13) 8は、口径14.7cm、器高12.0cm、脚端径12.5cmで、脚裾の拡がる部分は内湾気



第23 図 2号墳 I 区前面列石直下出土須恵器(上)・土師器(下)実測図 (1/3)



- 30 **-**

味になる。脚柱の外面は縦へラ削り、内面は回転方向へのヘラ削りを施す。杯部底内面に籾圧 痕がみられる。これは13の内底面にもみられる。他の $9\sim13$ も胎土精良で焼成良好である。

小型椀 (14) 薄手でミニチュアになるかもしれない。胎土・焼成ともに良好である。

#### Ⅳ区前面列石直下出土土器

須恵器 (図版18, 第24・25図)

杯蓋( $1\cdot 2$ ) 1 は、口径13.6cm、器高4.1cmで杯蓋 I 類の大きい部類に入る。天井外面は右廻り回転へラ削りを施す。焼成堅緻で青灰色を呈する。 2 は、口径11.9cm、器高3.7cmで、蓋II 類の大きい方にあたる。

杯身(3・4) 3 は、口径11.4cm、器高3.5cmを測り、杯身 I 類に該当する。外面の一部に灰かぶりがみられ、内面はまだら状に前面剝げている。 ½残存。4は、生焼けで灰白色を呈し、口径9.4cm、器高3.5cmを測る。 逆転して杯蓋III類となる可能性が強く、外面にはやや消えかかったへラ記号がみられる。内面中央まで回転ナデを施し、ナデツケはみられない。

高台付杯(6)口径12.2cm, 器高4.7cmで, 高台やや高く外方へ踏ん張る形状をなす。底外面には×印へラ記号を施す。焼成軟質で内面淡青灰色, 外面暗褐~灰褐色をなす。 7 C 後葉の所産で, 前庭部・I 区前面列石直下の各所から出土する様相と軌を一にする類である。

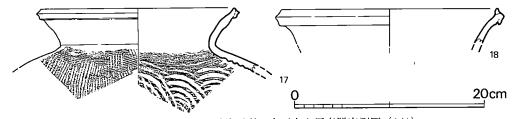
坩蓋(7)口径10.6cm, 器高3.4cmで外面は回転へラ削り, 口唇は平坦面をなす。小口径の短頸 壺の蓋となろう。焼成堅緻で灰黒色を呈する。

**B** (8) 明らかに古式須恵器の様相を呈するもので、復原最大径14.5cmを測る。外面胴下半は 左廻り回転へラ削り、底内面は径2cmの不整円形棒状工具突き跡痕が明瞭である。他内外面は回 転ナデによる。胎土に僅かに粗石英粒を含み、焼成やや軟質で、外面淡灰色、内面は灰色をな す。

高杯 (9) 脚端径8.9cm, 脚部高7.7cmの脚柱の細いタイプとなる。脚柱外面中央には、螺旋状の太い沈線が施され、他はカキ目がみられる。脚内面には細いへラ記号が刻まれる。

**甕** (17・18) 17は、口径20.3cmで胴部外面には格子目叩き、内面には青海波あて具痕がみられる。18は、口径22.7cmで、胎土・焼成ともに良好である。頸部外面にはカキ目が施される。 土師器(図版18・19、第24図)

杯身 (10) 口径11.6cm, 器高5.2cmの深いタイプで, 須恵器杯 I 類と伴う時期となろう。底外面



第 25 図 2号墳Ⅳ区前面列石直下出土須恵器実測図(1/4)

は中央が一方向への、その周縁が回転方向への手持ちへラ削りが施される。外面屈曲部には細い手描きの沈線が巡る。胎土精良で、淡橙茶色をなし、外面には部分的に赤茶色のスリップが残っている。

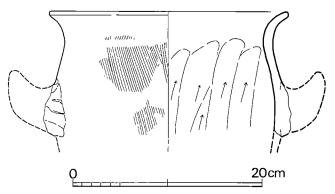
高杯(11~16)11は、口径14.9cm、器高10.6cmで胎土精良、脚柱外面は縦へラ削り、内面は回転方向へのへラ削りを施す。脚端内面がわずかにへこむ。14は、口径12.6cm、器高11.2cmの杯部の小さいタイプである。脚裾内面が内湾気味となる。15は、口径14.7cmで口唇内側が特徴的にへこむ。外面全面の各所に赤茶色スリップが残る。16は、口径14.4cm、器高11.5cmで、脚端内側がへこむ。以上の高杯6点のこの位置での出土はかなりの祭祀的性格を表している。

杯 (5) 底径 6 cmで、白黄色の焼成不良品で調整明らかでないが、底部へラ切りの奈良期の所産である。

周溝等出土土器 (図版16・17, 第21図29, 第26・27図)

土師器甕(第26図)III区周溝内 出土品で、口径25.1cmを測る。 口頸部は未だ肥厚せず、内面は 削り上げ、外面にはハケを施す。 外面は二次火熱を受けて赤変し、 煤も若干付着する。

須恵器甕 (第21図29) I区周溝内 の前庭部寄りの部分で破砕され て、一括出土したものである。 (第12図)口径25.4cm、復原器高

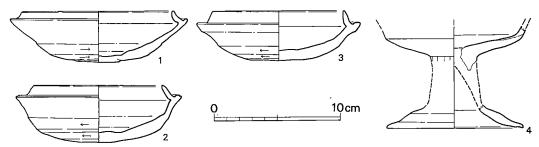


第 26 図 2号墳周溝内出土土器実測図(1/4)

46cm程,胴部最大径45.0cmのやや肩の張った器形をなす。頸部外面上半には波長の長い櫛描波 状文が施され,その下半にはカキ目がみられる。胴部外面は,殆んど格子目に近い条蓆状叩き の上に,間隔をおいたカキ目が施される。内面はやや細めの青海波が密にみられる。粗砂粒多 く含み,焼成堅緻で,外面胴肩部は灰かぶりする。内面は灰色を呈する。½以上接合された。 **須恵器杯身**(第27図 1 ~ 3)土師器高杯の 4 とともに,北東側の周溝外縁に出土したものであ る。 1 は杯身 I 類の大きい部類に, 2 · 3 は杯身 II 類に該当する。 1 は,口径12.1cm,器高4. 0cmで,焼成軟質にて淡灰色を呈する。 2 · 3 は,全体に焼き歪み著しく,いずれも図上で修正 復原したもので,口径10.4~10.2cmを測る。

**土師器高杯**(第27図4)同一個体が破砕されたような状態で出土したもので、全容は不明瞭である。胎土精良で脚柱外面は、縦ヘラ削りが施される。

以上の2号墳出土の遺物を総括してみよう。装身具は耳環5個と管玉がみられ、3体以上の



第 27 図 2号墳Bトレンチ付近出土土器実測図(1/3)

複葬乃至追葬が知られるところである。管玉は当古墳群では、装飾品出土例が異常に少ない中での、貴重例である。

鉄器は、前室の武器・馬具を中心とした副葬品に代表されるが、中でも針の出土は極めて特異とすべきであろう。後期古墳群副葬品の中に通常みられないもので、しかも11本一括して副葬したということは、単に婦人の埋葬とだけ解釈してよいものだろうか。また、少量ではあるが、I区前面列石直下にも留金具・刀子などの出土があり、祭祀的性格を有する供献品として、前室副葬品のものと区別すべき類であろう。

土器は多量かつ時期幅がかなりあり、以下に古い順に時期を区切ってみよう。

古式須恵器期 本墳から北~西方へ拡がる,5 C代いっぱいの墓地に伴う時期のものが,前面 列石直下から出土したが,これは本墳築造工事に伴って掘削,攪乱されて混入したものと考え ておく。

- 6 C後葉~末期 前室・前庭を中心とした須恵器類別で杯蓋・身 I 類とした時期である。杯蓋・身 I 類には先に記した通り、法量において大小ある。大の方をとれば、須恵器Ⅲ B 期の 6 C 後葉となるが、数量的に僅かで、また小の方と確実に共伴するような様相がみられるので、本墳の初築の時期は、須恵器Ⅲ B が残る IV 期の段階、即ち 6 C 後葉に近い末頃と考えられる。
- **7 C初頭期** 須恵器杯蓋・身II類とした時期で、数量的には僅かである。一応第1回目の追葬と考えるが、I類と共伴する例が多い為、明らかではない。
- 7 C前葉期 須恵器杯蓋・身Ⅲ類とした時期で、蓋と身が逆転する可能性のあるものが多く含まれる。量的にも多く、しっかりした追葬が行われたと考えられ、現存する閉塞もこの時の所産かもしれない。ただ、土器は所謂生焼けのものが多く、葬送用の仮器として選択されたものと考える。これは I・Ⅱ類の須恵器の中にも焼き歪みの著しいものがあり、これらもそう考えて良い類であろう。
- 7 C後葉期 須恵器杯蓋・身 N類のものであるが、量的に少なく、再使用的追葬と考えられる。なおここでは須恵器 V 期の段階が、この前の N 期との間に抜けている。これは、7 C後葉期までの間の石室不使用・断絶が認められるわけで、やはりこの7 C後葉段階での再使用的追葬の意味が首背され得べき処であろう。 (中間)

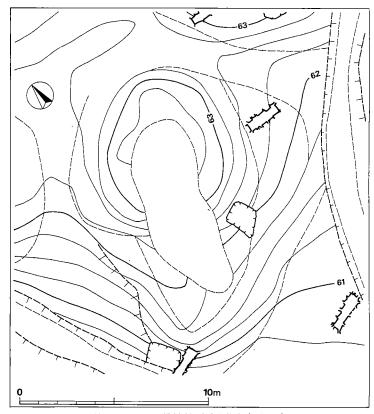
# 2. 3号墳

墳丘(図版20,第28~31図) 本墳は,2号墳の北西 方向,北西隣接の5号墳 の周溝を切って営まれる。 主軸は緩斜面に直行して おり,2号墳と対をなす ように南西谷側へ開口す る。

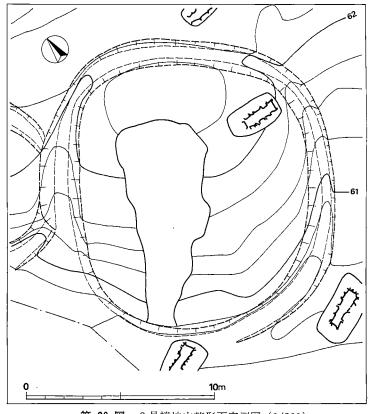
調査前の観察では,東 西12.5m,南北10m前後 に墳丘がみられ,高さ1. 25m強残存していた。中 央は大きく陥没孔がみられ,大規模な石室破壊が 予想された。

発掘後,ほぼ全周に巡 る周溝が検出され,周溝 外径で15.5×15.6m,内 径で16.0×12.0mの規模 であった。深さは南西側 で0.5m,北東側,南東側 で0.3mであった。墳丘宮 土は,2号墳と同様に内 護列石構築と深く関連し ての作業が行なわれてい る。

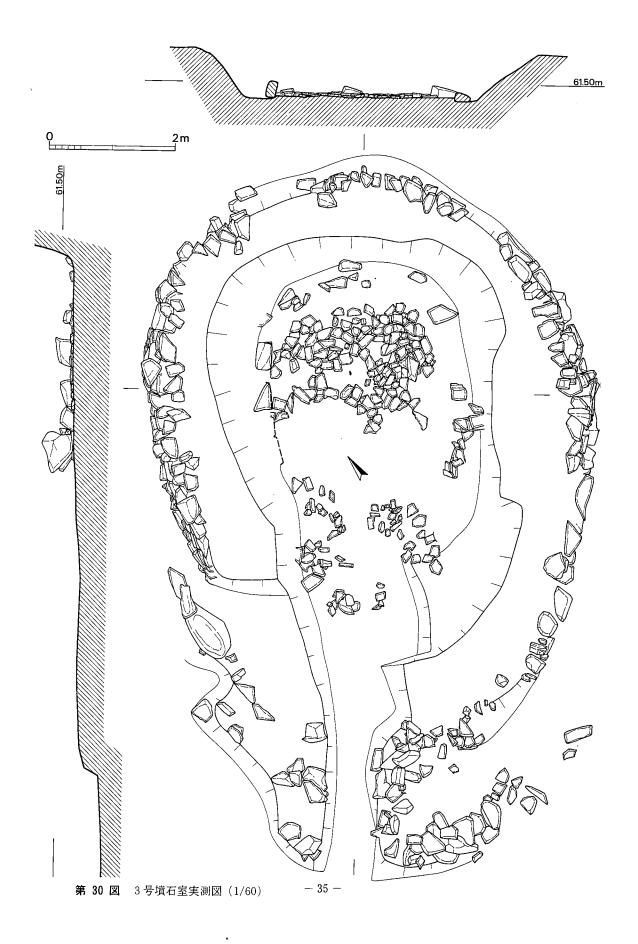
石室部の残りが極めて 悪いので明確ではないが、 2号墳例を参考にするな らば、まず石室側壁をか



第 28 図 3 号墳墳丘実測図 (1/200)



第 29 図 3 号墳地山整形面実測図 (1/200)



なりの高さまで積み上げながら、裏込め・控えの盛土を行う。次に内護列石構築作業にかかる。 まず、羨道前面端にあたる部位から両巡りに積む。これは前室両側にあたる所までで、次に玄 室を中心としてほぼ円形に巡らす。この両者の違いで、全体のプランとして長円形となり、両 側中途でずれがでてくる。本墳では更に墓道前面の周溝際に若干の石積みが行われる。玄室周 辺の内護列石上端レベルで平坦面をつくり、天井石を架構後に最終的な盛土を行う。

北西側周溝部分で、5号墳の周溝の上半を切っており、また、西南側周溝内のC-21、東側墳丘下のC-16よりも本墳の方が新しい。

### 主体部(図版20,第30図)

本墳は、前述の如く石室部が大きく破壊され、その石材の殆どが抜き去られており、全体の様相は明確ではない。墓址・残った石材の様相からみて、両袖式複室横穴式石室となろう。主軸をN38°Eにとり、2号墳とほぼ同方向をなしている。

玄室部は、左側中央付近の最基底側石が4個残っており、これから考えると、幅約2.9mの三味胴張りのプランをなすと考えられる。また扁平片岩小板石の敷石が奥壁側にかなり残存していた。

他の前室・羨道部分は、完全に石が抜かれて全くその形態・規模は判別できない。ただ、2号墳と異なる点は、幅0.8m、長さ2.3mほどの墓道が付き、周溝へとつながっている事である。以上の石室状況から推測できることは、2号墳と占地、開口状況とも似ており、石室・周溝の規模も2号墳に次ぐものであり、かなり近い時期の築造を考え得る。築造順序としては、2号墳に次ぎ、4・6号墳に先行するものであろう。

### 遺物出土状況 (第30図)

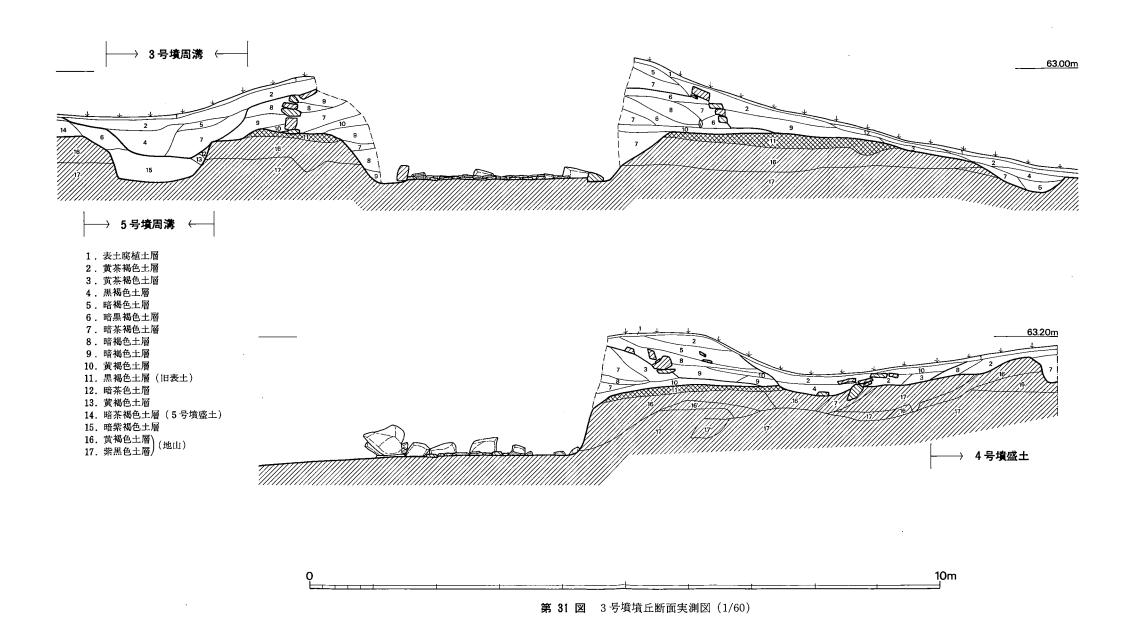
本3号墳は、石室部分の破壊が著しく、出土副葬品・供献品で原位置を示すものは、皆無と言って良い。墳丘上・周溝内出土のものも、殆どが表土・攪乱層中のものである。

玄室内の敷石が残る部分の床面から、鉄鏃2点が出土したが、原位置を保つものとは考えられない。他にも鉄器の副葬されていた可能性も強い。

南側周溝の埋土やや上層から、耳環1点が出土したが、周溝内埋葬としても他に痕跡は見当たらず、偶々落したか、3号墳玄室盗掘の際に掻き出したものかであろう。

またⅣ区周溝内からは、耳環出土地点より西側で、須恵器甕が破砕された状態で出土した。 これは2号墳周溝でみられた様相と同一の性格のものであろう。また、Ⅲ区周溝内からは須恵 器杯1点と、須恵器高杯1点が出土し、築造年代を示すものであろう。

他の土器類は、墳丘内出土品で、まとまったものは無い。



### 出土遺物

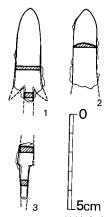
耳環 前述した如く、現物が行方不明であり、詳細は明らかではない。 太めで断面楕円形をなすタイプで、銅胎銀張りのものであった。

鉄鏃(第32図)玄室床面出土品で、1は、平造広鋒膓抉柳葉式で、3と つながって箆被部を有するものとなるかと思われる。 2 は、片丸造広鋒 柳葉式となるタイプである。

#### 須恵器 (第33・34図)

**杯身** (1・2) 1は、III区周溝内出土品で、口径10.8cm、器高3.1cmを測 る。2号墳で分類した須恵器杯身 I 類の小さい部類に入る。完形で精製 品であり、天井外面は左廻りへラ削り、その上に2本直線のヘラ記号が 第32図 3号墳出土 施される。2は、IV区墳裾盛土中出土品で、小片である。復原口径12.0

cmとなり、焼成堅緻で内面青灰色、外面暗青灰色を呈する。

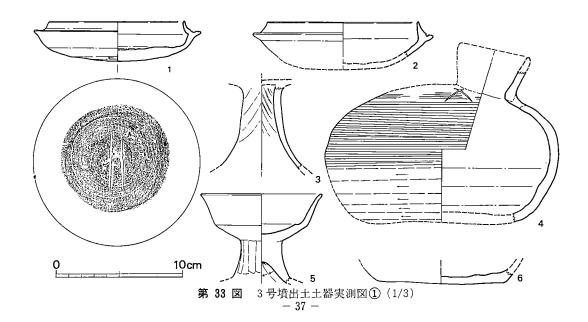


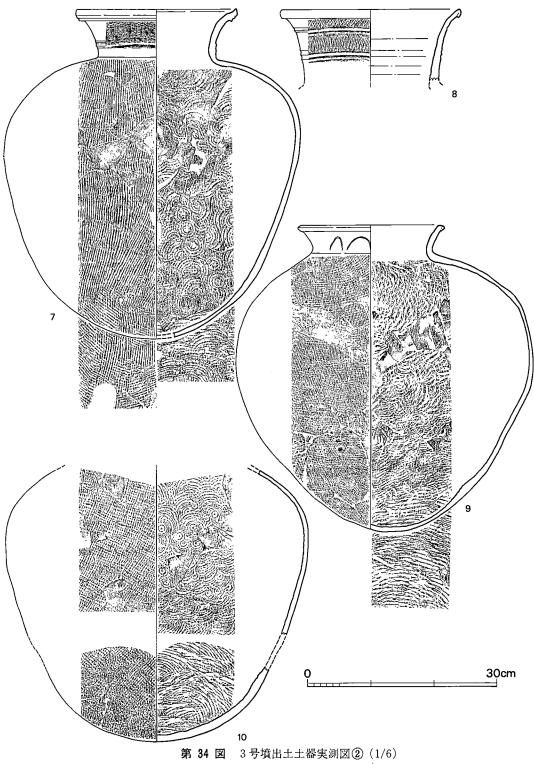
鉄器実測図 (1/2)

高杯 (3) 脚柱のやや細めのタイプで、内外にシボリによるシワが残る。胎土に細砂幾らか含 み、焼成堅緻で灰色をなす。

平瓶 (4) Ⅳ区墳丘内出土品で、胴部最大径18.5cmとなる。胴部下半は回転へラ削り、上半は カキ目を施す。頸部付け根近くに×印となると思われるへう記号がみられる。頸部接合の為の 孔抉りによる段を残さない。焼き良く暗青灰色をなす。

甕(7~10) 7は,口径25.4cm,器高52.2cm,胴部最大径47.0cmを測る。頸部外面には細かい 櫛描波状文が施され、胴部内面には粗い青海波が見られる。下半は施法が粗雑で凹凸著しい。 胴部外面は条蓆状叩目の上を、間隔をあけてカキ目が施される。8は、口径27.9cmで、Ⅳ区周





**- 38 -**

構内出土品である。頸部外面の口縁と、つまみ出した2条の凸帯の間に、波長のつまった縦長の櫛描波状文を雑に施す。9は、古墳東面のⅣ区を中心とした墳丘・周溝・墓道等に散乱していたものが、殆ど完形に接合したものである。やはり破砕して撒き散らされたものと考えられる。口径22.0cm、器高48.8cm、胴部最大径47.3cmを測り、頸部外面には逆U字形のへラ記号が2個連続して施される。胴部外面は格子目叩目の上をカキ目、内面は青海波が密にみられる。10は、Ⅳ区周溝内出土品で、肩の張る器形となろう。外面は格子目叩目の上を間隔をおいてカキ目、内面は青海波で、下半は粗雑となり凹凸著しい。

土師器 (第33図)

高杯(5) I 区墳丘内出土品で、口径9.6cmの小型の杯部となるタイプである。脚柱内面は横位へラ削り、外面は縦へラ削りを施す。焼成良く淡褐色をなす。内外面かなり磨滅して調整不明。杯(6) I 区墳丘内、IV区墳丘裾・列石前出土品で、底径10.0cmの底部糸切りである。平安末〜鎌倉初頭期の所産である。

以上の3号墳は、既述の如く石室部の破壊が著しく、全容を知ることができなかった。ただ、2号墳との比較から、2号墳より規模においてわずかに小ぶりであり、4・6号墳よりも2号墳に近似性を見出し得るところである。

遺物も確実に初築・追葬等を示してくれる資料に乏しいが、Ⅲ区周溝底から出土した須恵器 杯身から、須恵器Ⅳ期の古い方と考えて、本3号墳の初築は6C末~7C初頭前後と考える。 築造序としては、5号墳・2号墳より新しく、4・6号墳より古いと考えられよう。 (中間)

# 3.4 号 墳

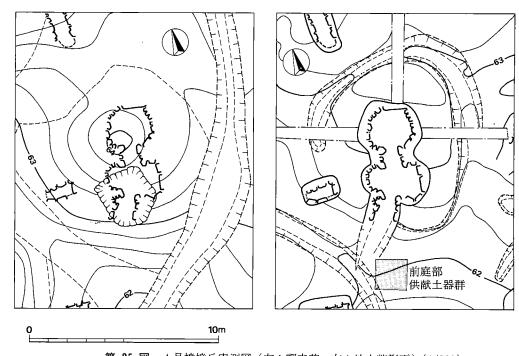
墳丘 (第35~37図)

本墳は3号墳の北東,6号墳の南東に位置し、緩斜面に直交して南々西へ開口している。 調査前の観察では、南北に10m、東西に9m程の墳丘が残り、南裾から1.5m程の高さであった。中央よりやや南寄りには、径3m程の陥没孔がみられた。

周溝は外径が $9.4 \times 9.3 \text{m}$ ,内径が $8.5 \times 6.6 \text{m}$ の,かなり歪な不整円形を呈する。  $I \boxtimes \cdot \mathbb{N} \boxtimes \mathbb{N}$ では明瞭でなく,占地自体が斜面である為,基本的には北半分だけの馬蹄形周溝となるタイプであろう。深さは北側で0.25 m,西側で0.3 m,東側で0.25 mとなる。

墳丘盛土は、縄文晩期包含層の黒色土の上に積まれているが、それ程残りは良くない。北側で高さ0.55m残るが、盛土作業序は明確でない。

本墳でも内護列石がみられるが、2・3号墳例の如く顕著ではなく、痕跡的ですらある。まず、羨道から西側へ開く石積みが東縁へ続いてゆく。この連なりは一応北側まで検出されたが、



第 35 図 4 号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)

プランは南北に長く、確実な輪郭はつかめない。西半側は殆どわからない。また2・3号墳では、この内護列石外縁から周溝内縁までの間が平坦面をなして幅を維持しているのに対し、ここでは北側に僅かに幅50cm程存在する程度である。

また、玄室を中心として墓址を囲むように、上述の内護列石より内側に列石が巡る。これは 最大2段の積石しか無く、また南東部分のみにしか残らず、全容・性格は明瞭でない。

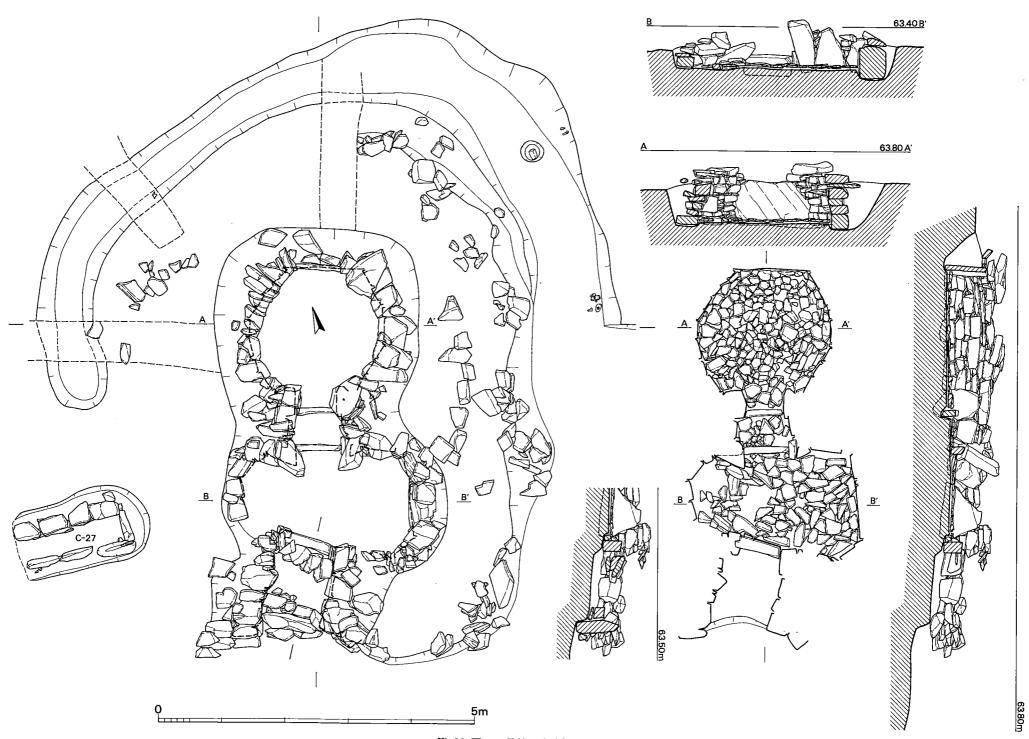
### 主体部(図版22・23, 第36図)

主軸をN17°30′Eにとる両袖式複室横穴式石室である。羨道部の主軸は大きく西にふる。石室全長は5.9mである。

瓢簞形の各コーナーが丸味をおびた墓址プランをなし、掘方底の深さは最も深い東側で70cm程度である。墓址は、縄文晩期包含層の黒色土上面から切り込んで、縄文早期押型文土器の包含層である黄褐色土の最下位近くまで掘り込んでいる。

玄室は、長さ1.9m、奥壁際で幅1.2m、中央部最大幅2.15m、玄門際で幅1.27mを測る、胴張りの極めて強いプランを呈する。残存する側壁は右壁で7段、0.9mの高さとなる。

奥壁は,正面からは2号墳の鏡石の如き観を呈するが,実際は厚さ8cmの,扁平な広い板石を横長に立てたものである。



第 36 図 4 号墳石室実測図 (1/60)

第 37 図 4 号墳墳丘断面実測図 (1/60)

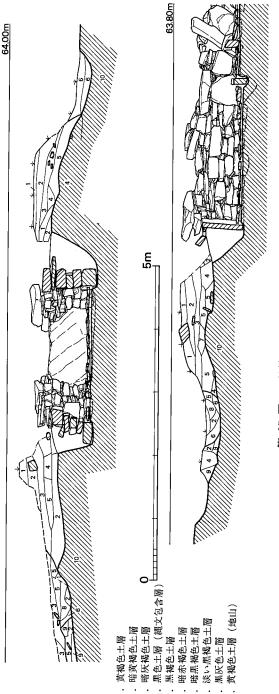
両側壁は、まず墓址底をわずかに掘り下げて、厚さ15~25cm程の、他の壁積石に比べればやや厚手の、緑色片岩板石を据える。その上に、板石を小口積みに積みあげながら、各々の間隙には小板石を充塡している。奥壁の鏡石も僅かに内傾しているが、左右側壁はすでに、2段目から少しづつ内側へせり出すように持ち送っている。

玄門部分の両袖石は、しっかりした 立石であり、石材も石室全体のうちで、 この2石のみ安山岩の大石を選択使用 している。また、玄室床面には片岩の 小板石を密に敷きつめている。

玄室と前室の間は,長さ1.0m,幅0.58~0.8mで,2ヶ所の框石で仕切っており,その間にも小板石の敷石が施されている。

前室は、長さが主軸部で1.4m,右壁 寄りで1.65m,左壁寄りで1.2m,最大 幅が2.65mの横長の不整長方形プラン をなす。床面プラン自体も、極めて歪 である。前室の玄室側の袖石は、左右 2個とも立石であるが、いずれも前室 側へ斜めに倒れている。これは玄門の 袖立石と比べ、石材自体も板状であり 細長く、またその掘り込みも極めて浅 いためであろう。

前室の右側壁は、その最基底に大きい石を立てて、しっかり埋め込んでおり、まさに腰石と呼ぶべき様相を呈している。それに対して左側壁は、玄室側壁と同様、板石を長辺を前面に揃え



た小口積みにしている。床面敷石も一応かなりの範囲に板石を敷くが、前室のものより大きい ものをやや雑に敷いており、両者の差異は一目瞭然としている。

以上の様相と、石室主軸が前室から羨道部にかけて西にふってしまうこと等から、前室~羨道部は、初築時のものではなく、後の追葬時に手が加わって、修理・再構築し直したものではないかと考える。即ち、前室左壁の小口積み部分が初築時のプランを残しており、初築の段階では左右対称に、最大幅2.3m程の強い胴張りの横長なプランの、わりと整美な形態をなす前室であったと推定できる。その後、前室の玄室側の両袖石が、石材の脆弱さと掘り込みの工法の甘さから、上部積石の重量に耐えきれず傾きはじめ、その結果前室の上部構造の大半が崩壊したものと考えられる。そして追葬の際、前室から手前の壊れのひどい部分を大部分除去して、作り直したものと考えられる。

以上の推定の証左の1つとして、玄室の東南側旧表土直上に設置された内護列石のうち、1 石が明らかに前室掘方内に突出しており、初築時と考えられる内側内護列石の在方として不自 然であることも掲げられる。

また、墓道も改修された可能性がある。即ち、墓道も現状では主軸線と大幅にずれており、 当初主軸線上にあったとすれば、より古い3号墳の周溝を完全に避けて通れる筈であるが、追 葬時には、3号墳周溝が浅いくぼみの小径的な感じとなってしまっていて、そこを墓道として 使用せんがために、本4号墳墓道を、改修時に3号墳周溝へ結びつけるようになったものと考 える。

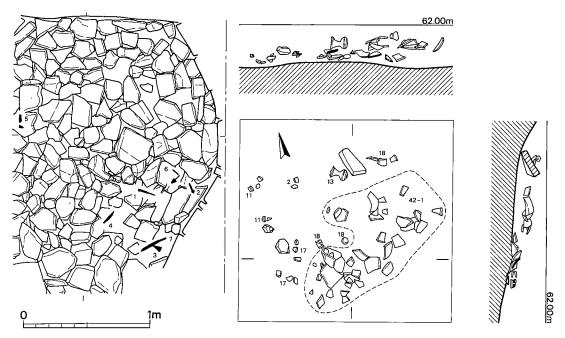
羨道部の閉塞は,前後2ヶ所に施されており,前室入口際では板石を小口積みにしており, 羨門際では厚手の板状石を立ててその前後に大小の石を込めている。羨道床面は,敷石は無く, 前室床面より25cm程低くなっている。羨道部側壁は,玄室のそれと比べて積み方が全く粗雑で ある。

## 遺物出土状況(図版23,第38図)

玄室床面敷石直上より、鉄器類が出土した。南西隅付近に、刀子が長手のものを含めて3本と鏃3本、中央西寄りに刀子1本出土した。刀子の多さが目立つが、長手のものは懐刀的なものであろうか。南西隅のものは、ある程度まとまりをみせるが、すべてが確実に原位置とは考えにくい。

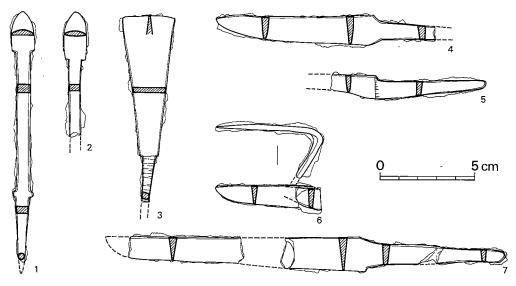
墓道全面の前庭部的にやや窪地になる部分では、かなりの供献土器群が出土した。大甕の破砕されたものを中心に、須恵器趣・杯類・提瓶・長頸壺・横瓶の一部、土師器椀・高杯などが散乱した状態で検出された。割れにくい趣は、口縁を打ち欠かれた程度であったが、他の器種は殆ど破砕された状態であり、意図的な墓前祭祀の様相の一コマを垣間見ることができる。

周溝内の明確な供献品は、II区周溝内の土師器高杯1点である。その他は、III~IV区墳丘内

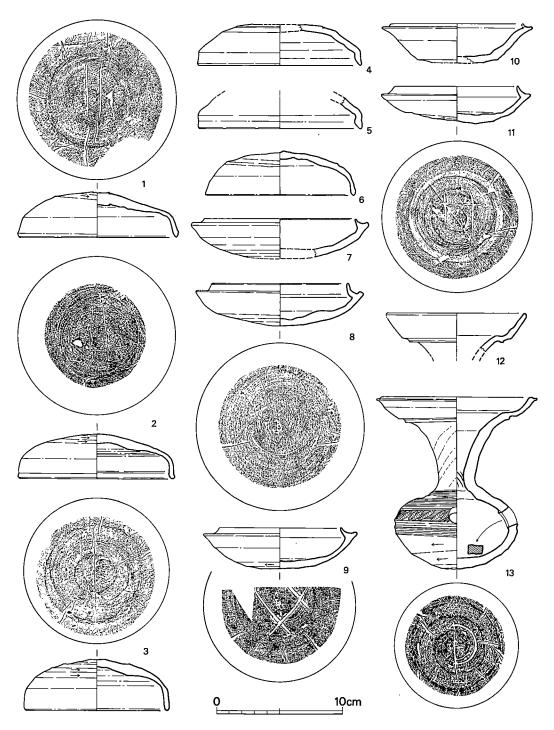


第 38 図 4 号墳玄室副葬鉄器(左), 前庭部供献土器(右)出土状態実測図 (1/30) や墳丘東裾付近出土のものが散見するが, これらの中には, 前庭部出土大甕や横瓶と接合するものが多く, 破砕後の意図的散撒の様相が知り得る。

また、III区墳丘内から古式須恵器片 2 点が出土したが、これは近隣状況から、C-28或いは 19号墳の周溝を切って、本 4 号墳構築の際に混入したものであると考えられる。



第 39 図 4 号墳出土鉄器実測図 (1/2)



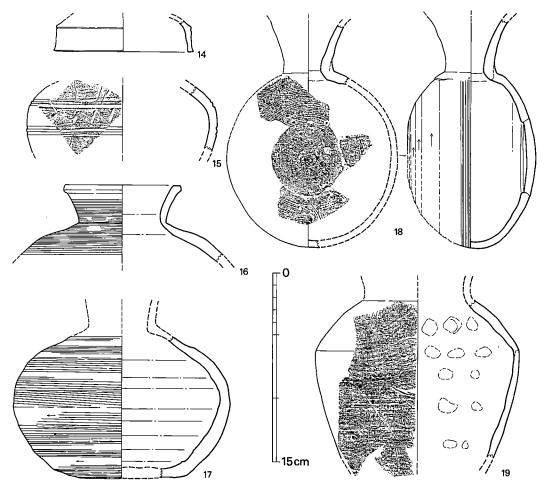
**第 40 図** 4 号墳出土須恵器実測図① (1/3)

## 出土遺物

鉄器 (図版24, 第39図)

鉄鏃( $1\sim3$ )  $1\cdot2$ は、片丸造棘箆被鑿箭式で、全長14cm弱と短いタイプである。 3は、方頭広根斧箭式のもので、身長7.5cm、鋒先幅2.8cmを測る。茎部には樺沓巻きが施される。

**刀子**(4~7) 4は、身長8.3cm、最大幅関際で1.6cmを測る。両削関となり、わずかに反り身を呈する。5は、茎部長5.7cmで、細身のタイプとなる。背側が片角関風となり、身部は使用減りの為か、刃部側で急に細くなる。わずかに木質が認められる。6は、身部と茎部との境が明瞭でなく、曲げられた様な状態で出土したものである。表面に朱が付着しており、石棺系竪穴式石室出土品の可能性が強く、整理途中で混乱したものとも考えられる。7は、全長21cm強の長手のもので、小刀的なタイプである。図の復原は、出土状態の実測図をもとに行った。刃部側が小さな角関、背側が削ぎ関となる。



第 41 図 4 号墳出土須恵器実測図②(1/3)

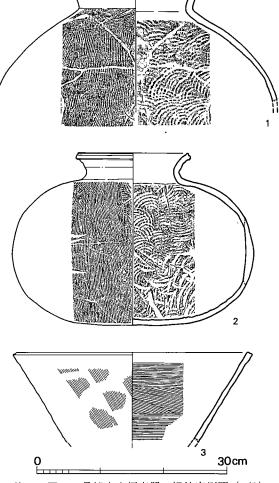
須恵器 (図版24·25, 第40~42図)

杯蓋(1~6)1・2 は、口径12.5~12.4cm、器高3.6cmで、2号墳須恵器杯分類の杯蓋 I 類の小さい部類に入る。3・6 は、口径11.8~11.4cm、器高4.0~3.5cmを測り、杯蓋 II 類になる。4・5 は、口縁部が短く屈折して直口するもので、特異な形態であり、法量からみると蓋 I 類に含まれ得る。1・2・3の天井外面には、鋭利な工具による2本線のへラ記号が施されている。1 は、III 区墳丘内出土品で、2 は、前庭部とIII 区墳丘内出土品が接合したもので、口縁内面に僅かな沈線を巡らす。4・5 は、前庭部出土品で、焼成やや甘く灰白色を呈する。6の天井外面は切り離し後未調整のままである。

**杯身** (7~11) 7 · 8 は、口径12.0~10.8cm、器高3.4~3.2cmと浅いタイプで杯身 I 類の各々大・小部類に入る。 9 は、口径9.8cm、器高3.5cmで杯身 II 類となる。10 · 11は逆転して杯蓋III

類となる可能性が強い。7は,前庭部出土品で,底部外面に直線1本のヘラ記号の一部が残るが全容は明らかでない。8の外面にも細い2本平行直線のヘラ記号がみられる。9は,前庭部出土品で,全体に焼き歪み著しく修正して図示した。外面に太くて深いサの字状へラ記号が施される。10は,墳丘東裾付近出土品で,焼成やや甘い。11は,前庭部出土品で,天井外面は左廻り回転へラ削りを施し,その上にサの字状へラ記号がみられる。

**B** (12・13) 12は、口径11.0cmで、頸下端部で細く締まるタイプとなる。墳丘内出土品で、内外面とも回転ナデで、焼成堅緻である。13は、口径12.8cm、器高13.6cm、胴部最大径9.8cmを測る。頸部外面にはシボリ痕が残り、胴上半には細く密なカキ目を施し、底外面は回転へラ削りのままである。胴外面中央には、櫛目工具による連続圧痕文様が施され、頸内面にはシボリシワが残る。胴部中には、穿孔の際に粘土が中



第 42 図 4 号墳出土須恵器・捏鉢実測図(1/6)

に落ち込んだまま焼成され、頸部から外に出られない為に、振るとカラカラと鳴る。この小塊は、ほぼ穴の形をそのまま呈している。前庭部出土品で、外底面に一本線のやや深いへラ記号が施される。焼成良く、全体が小豆色に焼き上がっている。

蓋(14)古式須恵器の短頸直口壺の蓋となろう。Ⅲ区墳丘内出土品で,復原口径11.0cmで口唇端が平坦面をなす。胎土精良で焼成堅緻にて,外面は部分的に自然釉がみられ,灰かぶりで黄灰色を呈し,内面は淡灰色をなす。

**聰**(15)6号墳Ⅲ区周溝内出土品と同一個体片で、14と同じⅢ区墳丘内出土品の古式須恵器である。2本づつの浅い沈線間に、目の12本以上の細かい櫛描波状文が施される。胎土精良、焼成堅緻で灰白色を呈する。

壺 (16) 前庭部出土品で,外面にはカキ目が顕著である。口径9.2cmで,内面は回転ナデを施す。 長頸壺 (17) 前庭部と墓道中出土品で,胴部最大径17.1cmを測る。外面肩部は回転ナデの上に カキ目,中位から底部までは,回転へラ削りの上を1cmに7~8本のやや粗いカキ目をかなり 雑に施す。内面は回転ナデにより、焼成は良い。胎土に粗石英粒を多く含む。

提瓶 (18) 前庭部出土品で,胴部直径13.6cm,厚さ10.2cmを測る小ぶりのタイプである。胴部 表面には,目の細かい回転カキ目が施され,裏面側は回転へラ削りである。焼成良く,胴部表 面側に灰かぶりがみられ,裏面が下になるように置いて焼成されたものと思われる。

蔵骨器 (19) 肩端に稜をつくり以下がやや長胴となるタイプで、蔵骨器に使用されたものと考える。墳丘前面の表土下出土品で、外面は格子目叩きの上を回転ナデ、図示中の最下端外面付近はヘラ削りの上に叩きがみられる。内面は横位ナデであるが、それ以前の指オサエで凹凸著しい。胎土にわずかに粗石英を含み、焼成堅緻で内面は暗青灰色、外面は灰かぶりで灰色を呈する。平安中期前後の所産であろう。

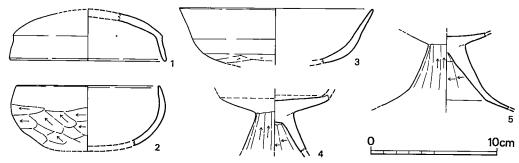
甕(第42図1)前庭部、III~IV区墳丘内出土品である。口径21.5cmで灰白色の生焼けである。 胴部外面は条蓆状叩目の上に間隔をおいたカキ目が巡らされ、内面は粗大な青海波がみられる。 横瓶(第42図2)前庭部、I・III区墳丘内出土品が接合したものである。口径17.3cm、器高27. 7cm、胴部長径37.8cmを測る。胴部外面は格子目に近い条蓆状叩目で、口頸部を中心とする横幅 19cmの範囲内には、叩目の上に縦方向のカキ目を施す。内面は全面青海波で、施法が粗い為凹 凸が著しくなる。

土師器 (第42・43図)

杯蓋(1)№区墳丘内・墓址出土品で,復原口径12.5cmを測る。胎土・焼成良好である。

椀(2)前庭部出土品で、口径11.2cm、器高5.2cmを測る。体部が丸く張り内湾するタイプで、外面には手持ちへラ削りがみられる。胎土精良で肌色をなす。

高杯(3~5)  $3 \cdot 5$  は前庭部, 4 は図示した  $\Pi$  区周溝内出土品である。 3 は底外面が手持ち風のへラ削りで,屈曲部の接合法も通例の高杯と異なり,他器種とも考えられる。  $4 \cdot 5$  は,



第 43 図 4 号墳出土土師器実測図 (1/3)

いずれも胎土精良で小型の類となる。

**捏鉢**(第42図3)石室内埋土中出土品で、明らかに後代の所産である。土師質焼成で、外面には黒く煤がこびりつく。内面のハケは整然としている。

本 4 号墳の主体部は、甘木朝倉地方の後期群集墳期における独特の形態を示している。即ち、 玄室が円形に近い程の強い胴張り床面プランを呈し、前室も玄室よりも幅広い横長の胴張り形態をなしている。この形態は県指定史跡の朝倉町狐塚古墳をはじめ、当地方の群集墳の中に特徴的に見出せる。

本柿原古墳群 I 支群の中では、2号墳が本4号墳に形態的により近いもので、6号墳が4号墳に連続する形態と言える。即ち、4号墳では、玄室の規模に対して前室部の横長方向への長大化と、玄室部のより円形化と小規模化が、2号墳からの最大の変化要素である。また奥壁鏡石の外観は2号墳のそれと同様な感じを受けるが、実際は薄手板石を立てたもので済ましている。仕切りの框石の配置は2号墳のそれと同じで、形式的に踏襲している。更に、言うまでもないが、墳丘の小規模化、また内護列石の形骸化も大きな違いであろう。

次に 6 号墳との異同についてみると、6 号墳では玄室プランが完全に円形化し、奥壁鏡石にあたる部分も幅50cm弱の小さなものとなり、奥壁中心の目印的性格にすぎなくなっている。玄室と前室の間もおそらく仕切り石 1 ヶ所で、両室の袖石を共有する程の、短い空間となってしまう。  $2 \cdot 4$  号墳にみられた羨道部 2 ヶ所の仕切り框石も、6 号墳では前室入口に大きな石を閉塞的に 1 ヶ所据えるのみとなっている。閉塞もこの部分に板石を立てるだけに変化している。内護列石の形骸化は 4 号墳と同様である。

以上のように2号墳→4号墳→6号墳へと石室構造上の、小規模化・形骸化を中心として、新要素も加わった変化をみせている。このうち4号墳から6号墳への変化は、各要素の指摘は出来るものの、全体としてそう大きな隔たりではなく、極めて密接的に連続し得るものと考える。しかし2号墳から4号墳への変化は、各要素は似かよってはいるが、絶対的な規模の縮小化と形骸化の急激な進行の開始という点で、かなり形式的断絶感を伴う。この事は、2号墳の

後に 4 号墳が直接的に結びつくのではなく、恐らくその間に 3 号墳を置くことが出来るのではないかと推測させる処である。

4号墳の他の様相についてみると、まず、前室から手前の追葬時の改修という点が重要であるが、これは先に詳細に述べたのでここでは省略する。ただ、他古墳群でもこの様な崩壊し易い小規模石室においては、このような改修作業が度々行われたであろうと推測されるのである。前庭部の墓前祭祀は、追葬時を含めて、葬送時毎に行われていたと考えられる。

土器についてみると、須恵器杯の分類から 3 期に分けられた。杯 I 類の小から II 類が主流を 占めており、本 4 号墳の初築は、須恵器 IV 期にかかる時期、即ち 7 C 初頭前後と考えられる。 また、杯Ⅲ類の供献も明らかなことから、7 C 前半代の追葬が想定できる。また、平安期の遺 物の出土から、この時期に蔵骨器等による山間の南側緩斜面を利用する、静寂の奥津城として 占地することもあったと考えられる。 (中間)

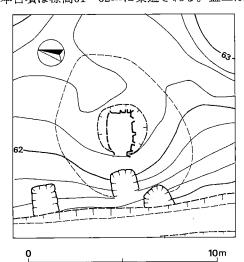
# 4.5 号墳

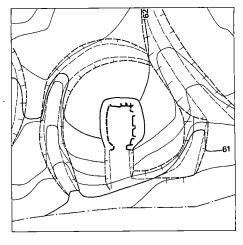
本古墳は、谷部の緩斜面に3号墳と7号墳をそれぞれ南北に置き、その間に位置する。墳丘は低いながらも地形の変換が一目にして認められ、古墳であることが判別された。また、墳頂部に盗掘穴があったことからも判定の裏付けとなった。

本古墳の見かけの高さは0.5m程で、東西径7.5m、南北径7.0mのやや楕円形気味の円墳であると推察された。

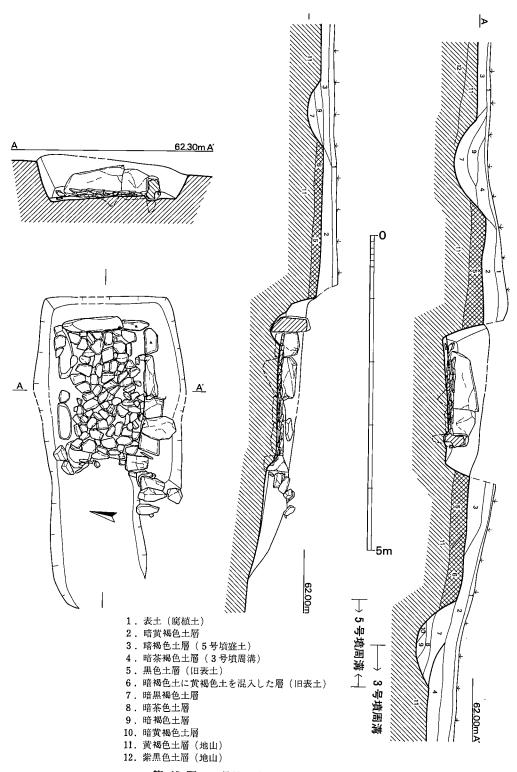
## 增丘(図版26, 第44·45図)

本古墳は標高61~62mに築造される。盛土は地山整形後におこなわれるが、本古墳における





第 44 図 5号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)



第 45 図 5 号墳石室墳丘断面実測図 (1/60)

地山整形は、古墳前面を残して周溝を巡らして掘られるのみで、他に何らの掘削も行なわれない。また、盛土は最高40cmという薄いものであり、墳丘土層観察により、やや流失していると観られることなどから、版築もさほど行なわれず、石室構築時に続けて盛られたものであろう。墳丘の規模は、南北径8.8m、東西径8.7mを測り、本来は径8.8m前後の円墳であると考えられる。

また、本古墳は南側に隣接して築造されている3号墳の周溝に、本古墳周溝が切られているのが確認された。

### 主体部(図版26,第45図)

本主体部の主軸はN76°30′Eで、西方向に石室を開口する。

掘り方は、土層断面で見られる黒色土層(旧表土層)より20~40cm程掘り込まれる。長軸長で3.1m、短軸で2.4mで、平面プラン長方形を呈する。また墓道部は、玄門部から1.2m程水平に掘り込まれ、その先はやや下方に傾斜して掘られ、玄門から1.7m程で旧表土と同一レベルとなる。

石室は、単室両袖の横穴式石室であり、平面プランは掘り方同様長方形を呈する。石室残存 状態は、左側壁は基底部石および左袖石までも抜き取られる。他の部位は、奥壁・右側壁共に 基底部石のみ残存する状態である。また、玄室敷石が残っており、部分的に欠損するが床面の 原形を保っていると見做される。

石室全長は2.2mを測り、玄室の長さは2m、幅推定1.15mを測る。各所の基底部石は、奥壁で2枚、右側壁で4枚である。奥壁は横長に立て、右側壁は奥壁側から2枚は、横長に立て、袖石側から2枚が平積みである。また、平積み部にはやや浮いてはいるが、上段に1枚石を平積みしている。これは元来よりの積みと推察する。袖石は、高さ40cm、縦40cm、横22cmの長方柱状の石を立てる。また左壁は、石抜き痕と考えられる穴が検出され、これにより左側壁の状態が推察され、石2枚を使用し、穴の長軸長や奥壁石の大きさから、横長に立てられる。また、袖石部も石抜き痕から、右袖石とほぼ同じ大きさであることも推察される。玄門部は、玄室床面から下位へ15cm程の段を有する。仕切石の痕跡である可能性はあるが、しかし、石を立てる為の何等の痕跡は認められず、玄室床面より一段下るとあとは平坦になっている事から、仕切石の痕跡とは考え難い。即ち、石室形態から推察されることは、これが閉塞の為の施設であり、閉塞が1枚石で立てて塞がれていたのであろう。

墓道は、前述の如く前面に下る様に掘り込まれているが、右袖石脇に石を3段斜めにスライドさせて平積みが行われている。これは、玄門から上方へと出る事を暗示するかの様である。この石積みを、羨道と見做せば竪穴系横口式石室と考えられる。しかし、墓道は玄門から下方へと移る。これらを思案するに本古墳は、竪穴系横口式石室の構造の名残を、この石積みに残

すものと考える。

本石室の石材は、殆んどが緑色片岩であり、奥壁の右基底部石と右側壁の最も奥寄りの基底 部石の2枚が砂岩である(図中▲印)。

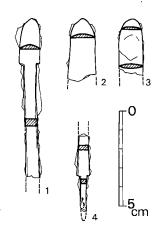
## 遺物出土状況

本古墳の出土遺物は少なく、玄室から鉄鏃4点のみである。その中でも出土位置が確かなものは1である。1は、玄室床面の敷石清掃の際に右側壁前面の敷石間より出土した。また、他の鏃は玄室内埋土除去の際、玄室床面より10cm程浮いて出土している。

### 出土遺物(第46図)

鉄鏃( $1\sim4$ ) 1は、片丸造棘箆被鑿箭式である。残存長8.4cm、身の長さ2.4cm、身の厚さ2.5cmを測る。 $2\cdot3$ は同形であるが、2は片丸造りで、3は鋒部が片丸造りであるが、現存身部では両丸造りとなる。 $2\cdot3$ は、鏃としたがやや疑問ではある。4は、1と同型類の茎と推察する。

本古墳では、時期の決め手となる遺物は出土しておらず、明確な年代決定は困難である。しかし、石室構造より築造時期が推定できる。まず玄室の構築に関して、同形態を示す7・9号墳では、やや大きめの板石が基底部に立てて据えられ、その上段に石積み



**第 46 図** 5 号墳出土鉄器 実測図(1/2)

が行なわれる。しかし、5号墳では大半同様な事が行なわれるが、玄室前半の右側壁のように、基底部より平積みが行なわれている部分もある。また、石積みも7・9号墳に比して壁面も揃わず荒い積みを行なう。7・9号墳よりも新しくなる感を受ける。8号墳は、基底部石は立つがやや小形化して、石積みは5号墳よりも一層荒くなっている。

そして、袖石に関しても同様の変化が認められる。 5 号墳の袖石は、元来両袖である事が認められ、残っている右袖はやや小形ではあるが根部を埋置して立つ。 7 号墳では、片袖であり1個の小形の石を立て、その周囲を石で固めて裾を組織する。 9 号墳は、袖石的に小石塊を床面に置くのみである。  $8\cdot10\cdot11$  号墳では、袖石は両袖とも存し、やや石室中軸寄りに張り出す。やはり袖石でも、  $7\cdot9$  号墳よりも新しく、  $8\cdot10\cdot11$  号墳よりも古式であると考える。

即ち、石室形態による変遷は、9号墳→7号墳→5号墳→8・10・11号墳と追える。5号墳の絶対年代としては、7号墳が5世紀前半後葉であり、8号墳が5世紀後葉~6世紀初葉の年代がつけられており、5号墳は、それらの間で5世紀中頃~末となるだろう。 (平嶋)

# 5.6 号 墳

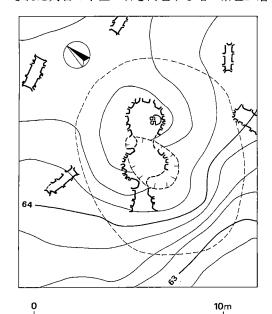
本古墳は、北から詰まった感じで伸びる丘陵の正面にあたり、東側丘陵から延びる緩斜面の谷中央部に位置し、4号墳と隣接し、7号墳の東側に位置する。本古墳の墳丘は一瞥できる。

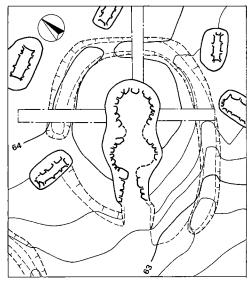
本古墳の見かけの高さは1m程で、南北径11.0m、東西径9.0mのやや長円形気味の円墳と推察された。古墳中央部に南北3.5m、東西2.0mの盗掘穴が存する。

#### 墳丘 (第47・49図)

本古墳は、標高63~64mに位置する。盛土は、地山整形後に行われ、本古墳に於ける地山整形は、自然地形を利用し谷の稜線上に墳丘の基礎を土饅頭状に形成し、また、一方で馬蹄形の周溝を巡らすことである。盛土は、墳丘土層観察により、現状で最高30cmと非常に薄いものである。しかし、雨食などによる盛土流失を考慮しても、古墳築造時と現状の墳丘の厚さは、さほど変わらないと推察する。また、墳丘上及び墳丘内に、羨道部先端から石室を中心として列石が巡る。現状では石室左側に顕著であり、右側では部分的ではあるが周溝縁に見られる。また、他に前方右側の墳丘裾でも列石が若干巡る。この様な列石は、当地区3号墳やH地区3号墳で検出されており、それらに比してやや貧粗ではあるが、内護列石であると推定する。

内護列石の存在を考え合せて墳丘の土層を観察すると、本墳丘築造にあたっては3段階に分けられ、まず第1の段階としては、地山整形の段階であり、第2は、Aトレンチに於いて確認された列石の下位の石を内包する暗い茶色土層(3)で、Cトレンチに於ける灰黒色土層(16)





第 47 図 6号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)

までが第2の築造段階で、第3の段階は、列石の上面まで盛土が施されている段階で、茶褐色 土層(2)や暗茶灰色土層(4)である。墳丘築造の最終段階である。墳丘築造について以上 の3段階の手順が認められる。しかし、これらの諸段階が如何なる意味を有するものであるの かは、後に譲ることとする。

墳丘規模は、石室主軸で10.8m、主軸に直交して8.6mを測る。墳丘の形状は、周溝や内護列石の在り方なども考慮して、北東から南西の長円形を呈すると推察される。

## 主体部 (図版27·28, 第48図)

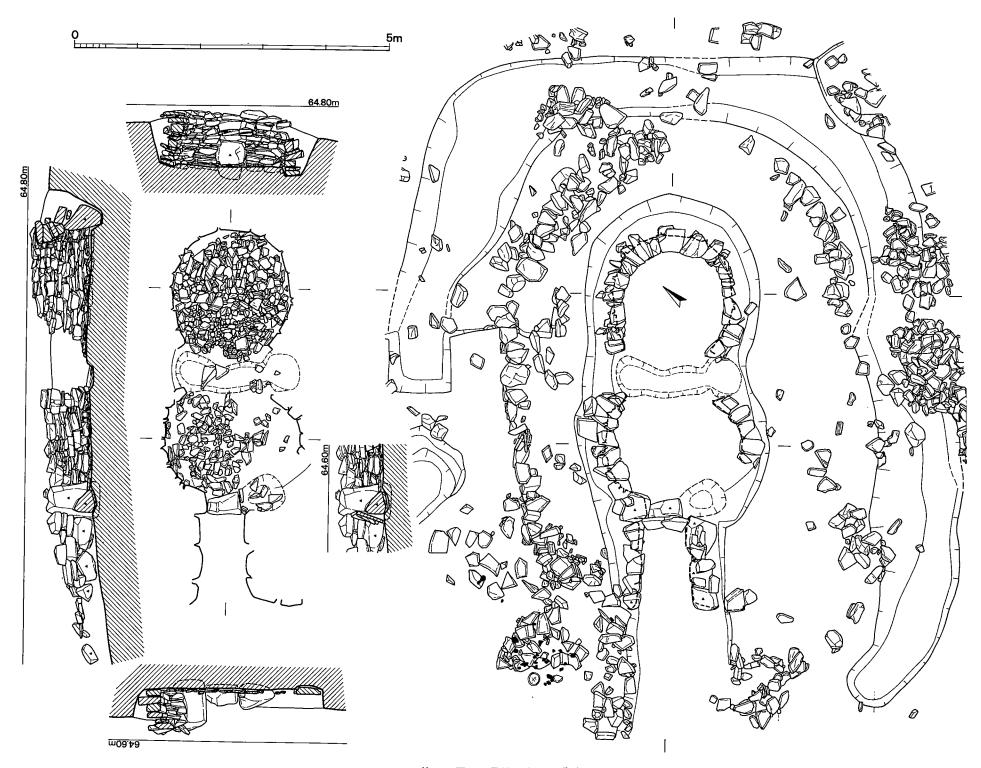
本主体部は、N48°45′Eに主軸をとり南西方向に開口する。石室は複室の横穴式石室であり、石室全長5.92mである。前室・玄室共に円形プランを呈する。

掘り方は、灰味暗黄色土層(10)、微明暗茶色土層(10)、暗灰色土層(11)より掘り込まれ、平面プラン長円形を呈する。深さは玄室で60~70cmであり、石室前面に向い浅くなる。玄室から前室部までの主軸長は5.4m、最大幅前室部で3.1mを測る。

石室の状況は、全体的に右側壁を欠損している。玄室奥壁で高さ80cm程の石積みが残り、玄門部の両袖石と框石を欠損し、またその周囲の積み石も欠損している。前室も、現存状態の良い左壁で高さ70cm程の積みが残り、右壁では、基底部の石が玄門から前室の中央部までの4枚が存する。また、前門も右袖石が欠損する。羨道に於いても、右壁側の上段の積みを欠損すると推定される。

玄室は長さ1.95m,幅1.85mを測り,玄室平面プランはほば正円形を呈す。奥壁に,鏡石としてはやや小さめの高さ40cm(石材の高さ60cm),幅50cm,厚さ,最大で40cmの石を据えている。また,そのすぐ脇より縦,横30cm程の板石を基底部から平積みで75°程の内傾する傾斜をつけて,急な持ち送りをしている。壁面は、この様な持ち送りによりやや凸凹している。玄室の高さは、現存では明確になし得ないが、石室壁面の傾斜具合や墳丘断面の土層観察により、現状の高さからそれ程高く積み上げられるものではなく、玄室内の高さは精々1m前後と推定する。また、床全面に敷石が存するが、石室中央部から奥壁側は、長さ20cm前後の長方形の板石が敷かれ、玄門側では、板石が部分的に存するが、ほぼ全面に小礫が敷かれる。この様に異なった2種の形状を呈する。

前室は長さ1.5m,幅2.1mとやや横長であり、平面プラン楕円形を呈する。積みは、左壁で基底部から平積みにし、基底部より5段ほど直に積み、その上段から急に持ち送りを行う。右側壁は、残存状態は悪いが、左側壁と同じく基底部から平積みを行うと推定される。また、基底部に於いて右壁は、床面を若干掘り込んで据えられるが、左壁は、床面に何等の掘削を行わずに据えている。前室の石積みは、玄室に比して比較的整い、やや大きめの石材を用いている。前室の石敷きは、長方形の板石で行なわれるが、壁面同様に右側の残存状態が悪い。前門に於



第 48 図 6 号墳石室実測図 (1/60)

いても右袖石が欠損する。左袖石は、床面 から高さ60cm(石材の高さ80cm),幅35cm程 の石を用いる。框石は、長さ50cm、幅35cm の塊石を据えている。

羨道は, 玄室・前室の積み石と比して一 層大形の石が用いられるが、乱積みである。 長さは1.8m, 幅は奥で0.7m, 羨門部で0. 9mを測る。

墓道は2m程の長さで,前門から続いて 下降している。

閉塞は, 前門の框石に立てかける様に板 石で行なわれる。2枚割れて重なって検出 されたが, 本来は1枚である。長さ70cm, 幅50cm, 厚さ8cmである。

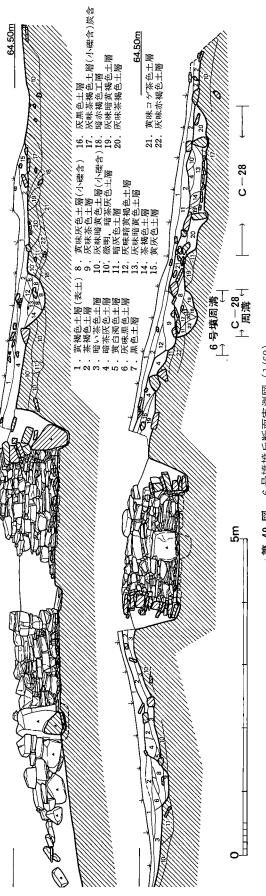
石材は、鏡石、前門袖石と框石と羨道の 一部に安山岩が用いられ(図中▲印), 他は 「柿原石」と呼ばれる緑泥片岩などの片岩 である。

# 遺物出土状況(図版28,第50図)

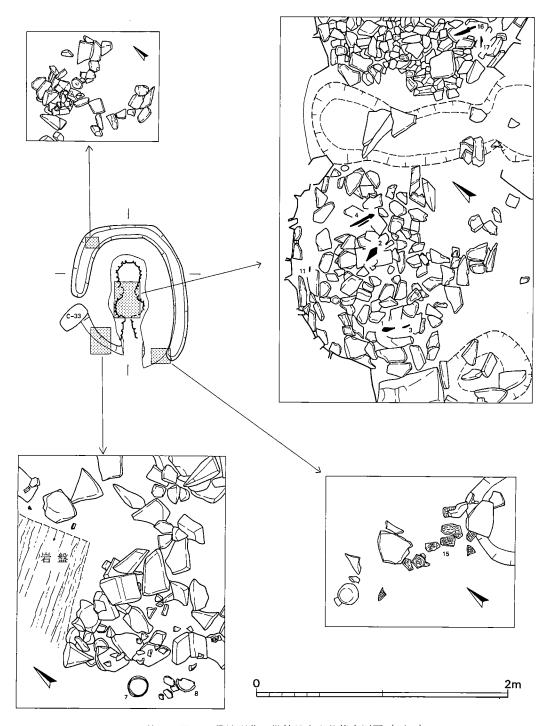
本古墳に於いては、石室より鉄器類が出 土し, また, 墳丘・周溝から須恵器・土師 器の各器種が出土した。

石室に於いては, 玄室のやや玄門寄りに 鉄刀子が, 敷石上1点, 敷石下1点が出土 する。前室では、床面より鉄鏃8点、両頭 座金付金具2点,留金具1点が出土してい る。ここで留金具1点というのは不自然で あり、他の馬具が存し、それら一式が揃っ ていた事が想像される。

墳丘では、墓道西側の I 区で、古墳築造 時の表土上に須恵杯・郞などの他、大量の 土器片が出土した。その中に,酸化焰焼成



6号墳墳丘断面実測図  $\times$ 49 紙

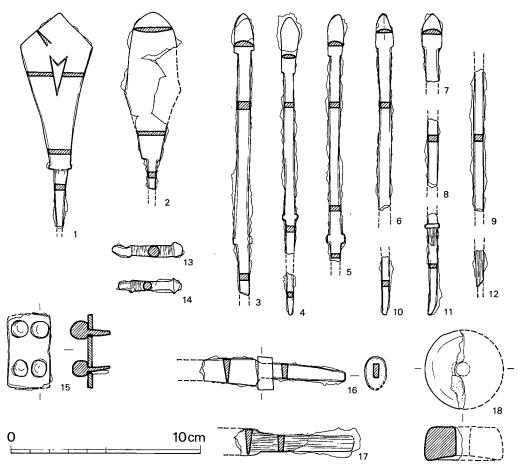


第 50 図 6号墳副葬·供献品出土状態実測図(1/30)

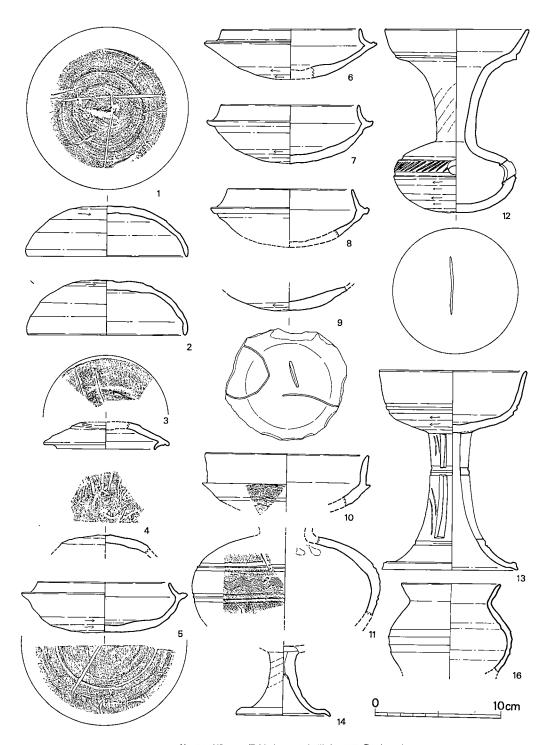
による土師質の杯が出土した。II区に於いては、周溝内に土師甕片などの小片が出土した。しかし、何分小片であるので復原不可能であった。III区は、墳丘内より須恵杯片や須恵高杯片が、周溝内より須恵高杯・慇が出土した。また、墳丘内と周溝内出土の須恵高杯片が同一個体となった。IV区に於いては、墳丘内より須恵杯・須恵高杯と土師高杯が出土し、墳丘裾の周溝が跡切れる所に、提瓶と須恵甕が出土した。しかし、提瓶については、報告書作成の段階では紛失しており、現段階ではこの提瓶については不明であるが、しかし、平面実測図によりその形状を推定すると、口径5cm、器高20cm、胴部最大径は12cm程であろう。

また、他に土製の紡錘車が墳丘東方より出土している。しかし、出土地点も明確ではなく、 本古墳に伴うものであるのか否かは疑問である。

# 出土遺物 (図版29・30, 第51~54図)



**第51図** 6号墳出土鉄器・紡錘車実測図(1/2)



**第 52 図** 6 号墳出土須恵器実測図① (1/3)

鉄鏃 (第51図  $1\sim12$ ) 全て前室より出土する。 1 は透しを有した変形圭頭斧箭式である。残存長11.3cm,身幅3.8cm,厚さ0.2cmである。透しは,逆三角形に矢印形を呈する。 2 は変形広根定角式であり,残存長9.2cm,厚さ0.3cmである。身中央を一部欠損している。  $3\sim7$  は,いずれも片丸造棘箆被鑿箭式である。全長約16cm前後であろう。 6 は身に鋒より鎬が通る。

鉄刀子(16·17)17は玄室床面出土で、16は玄室床面敷石下より出土である。共に鋒を欠損する。16は茎に環状の金具が装着され、金具内側には木質が残る。これは柄根を固定する金具と推察する。

両頭座金付金具(13·14)共に前室床面出土である。片頭は半球状を呈するが、もう一方の片頭はやや角張った柱棒状を呈す。中央棒状部は樺沓巻と推察する。

留金具 (15) 前室床面出土である。 $縦 4 \, \text{cm}$ , 横2.2cmであり、鋲が  $4 \, \text{個つく}$ 。元来から鉄製であると推察され、金銅張りの痕跡は全く認められない。

紡錘車(第51図18)墳丘東側より出土している。古墳に伴うものであるか否かは疑問である。 半損品で残存重量13.5gあり、推定総重量30g前後となるであろう。胎土精良であり、焼成は 部分的に灰黒色を呈し不良であるが、全体的に良である。淡褐色を呈す。

**須恵器杯蓋** (第52図1~4)1はⅣ区墳丘覆土からの出土である。口径12.6cm,器高4.0cmを測 る。薄手の造りで,体部から口縁端部にかけて薄くなり尖っている。外面にT字状のヘラ記号 が印され、天井部は平坦で、天井部と体部の境に凹みをもつ。色調は青灰色を呈し、焼成はや や軟質であり、胎土に石英粒をやや多く含む。調整は外面天井部に逆時計回りの回転へラ削り、 体部から内面天井部にかけて回転ナデ,内面天井部は一方向のナデツケを施している。口縁部 約%を欠損している。2はI区墳丘内旧表上からの出土である。天井部約%が存し,天井部か ら口縁部にかけて小片となる。復原口径12.4cm,器高4.3cmを測る。1 同様に,薄手であるが体 部から口縁端部にかけて肥厚する。外面天井部は、1に比してやや丸みの感を受けるが1同様 平坦である。体部中央に若干の屈曲を有する。色調は灰色を呈する。胎土に粗砂を若干含み、 焼成堅緻である。調整は、外面天井部は逆時計回り回転へラ削りを施し、体部から内面天井部 にかけて回転ナデ,内面天井部に部分的に回転ナデ調整と重複してナデツケを施す。3は周溝 内出土である。前述の2点に比して小形であり、口縁に返りを有する。全体の¾を欠損し、天 井頂部をも欠損している。しかし復原上天井部は平坦であると推察され,天井部と体部の境に 明瞭な段を有する。内面口縁端部に細い沈線を有し,返り部は内傾し外反気味に開き,端部に 細く尖る。外面天井下部から口縁部にかけて平行な2条のへラ記号を印す。復原口径7.8cm, 最 大径9.7cm,器高2.2cm,返り部高0.3cmを測る。調整は,外面天井部は手持ちのヘラ削りを施 し、体部から内面天井部際までに回転ナデ、内面天井部は天井部際で回転ナデ調整と重複する 様にナデツケを施す。胎土は細かい砂粒を多く含み、焼成は堅い。色調は内面淡灰色、外面暗 灰色を呈す。4は111区墳丘出土で、天井頂部のみ残存する。天井部から口縁部方向に、扇状の

広がりをもつ5本の太味で浅いヘラ記号を印す。外面は未調整のままで、内面はナデツケを施 す。胎土は粗い砂粒を多く含む。焼成は堅く、色調は内面淡青灰色、外面灰黒色を呈する。 須恵器杯身(第52図5~9)5は杯蓋1と同じく№区墳丘内出土である。半損品であり、復原 口径10.4cm, 復原受け部径12.6cm, 器高3.9cm, 立上り高0.9cmを測る。立上りは直に内傾し, 受け部は外に強く張る。立上り部と受け部の境に明瞭な沈線を有する。底部平底である。体部 中央から立上り部にかけ肉薄で、底部は肉厚である。外面底部から体部中央は、逆時計回りの へラ削りを施し,体部から内面底部にかけて回転ナデ,一部回転ナデと重複して底部にナデツ ケを施す。外面中央に太い一条のヘラ記号を施す。胎土に粗い石英粒を含み,焼成は堅緻であ る。色調内・外面共に青灰色を呈する。 6は I 区墳丘内出土品である。2/3を欠損し,復原口 径10.9cm, 復原受け部径13.2cm, 器高4.0cm, 立上り高1.1cmを測る。立上り部は内傾し大きく 外反し,端部は直に立上る。受け部は内傾し,端部に一条の細い沈線が入る。また,立上り部, 受け部の境に一条の沈線が入る。底部丸底である。口縁部はやや肉厚であり,また体部から底 部に向って肥厚する。外面底部は逆時計回りの回転へラ削りであり,体部から内面残存部まで 回転ナデを施す。胎土に粗い砂粒を若干含み、焼成はやや堅緻である。色調は内・外面共に灰 色を呈す。7・8は共にI区墳丘内旧表土出土で9はI区墳丘覆土内出土である。7~9は全 て成形、調整手法とも須恵器と同じである。酸化焰焼成により赤変し、土師質となる。全て器 表面が軟質でやや磨滅する。7は完形であり,口径10.9cm,受け部13.0cm,器高4.6cm,立上り 高1.3cmを測る。立上りがやや内傾し、端部が直立し尖る。受け部はやや内傾して外に強く張り 出す。立上り部と受け部の境に若干の凹凸が入る。外面受け部と体部の境に凹みを有し肉薄と なり,底部に向って肥厚する。内表面は体部から底部にやや凹凸が入る。底部丸底である。外 面底部は逆時計回りのヘラ削りで、体部から内面体部は回転ナデ、やや重複して底部にナデツ ケを施す。胎土は精良で,焼成も良である。内面淡黄褐色,外面淡赤褐色を呈す。8は底部欠 損,口縁から体部も½を欠損する。復原口径9.8cm,受け部径12.2cm,器高4.5cm,立上り高1. 5cmを測る。立上りは直に内傾し,受け部はやや内傾して張り出す。共に肉厚である。受け部に は立上り部,体部の上下の境,共に沈線が入る。体部中央内外面共に凹みをつくり,器厚が薄 くなる。外面凹みより下位は磨滅により調整不明,凹み上部から内面凹み下位まで回転ナデ, それより下位はナデツケを施す。胎土精良で,焼成良い。色調は内・外面共に淡茶褐色を呈す。 9は丸底の底部のみ残存する。外面底部逆時計回りのへラ削り、その上部は回転ナデ調整であ る。内面は磨滅により調整は不明である。底部及び底部から体部にかけて太く深い,また細く 浅い3条のヘラ記号を印す。胎土粗い砂粒を若干含み,焼成良である。色調は茶褐色から明茶

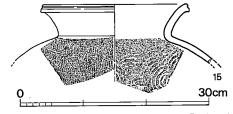
**須恵器高杯**(第52図10・13・14) 10はⅢ区周溝内出土である。口縁から体部への極小片のみ存する。口径,傾きは不明確であり,蓋となる可能性を有する。立上りはやや外傾し,受け部は

強く外へ張り出し端部はシャープに尖る。受け部外面から内面は回転ナデ、受け部下に幅0.9cm の細かい櫛描波状文を施す。それより下位は逆時計回りの回転へラ削りである。胎土に粗い石 英粒を含み、焼成堅緻である。内面体部に暗緑色を呈す自然釉、外面黒色を呈する自然釉が付着する。素地色は暗灰色を呈する。14はIII区墳丘内出土である。脚柱部のみ存し、他は欠損する。底径7.5cmを測る。脚裾部に向い大きく開き、裾部は上下に変化し、やや尖り気味の端部となる。内外面共に回転ナデを施し、脚柱中央にシボリ痕を観察する。胎土粗い砂粒を若干含み、焼成堅緻である。内面灰黒色、外面灰色を呈す。13はIV区墳丘内出土である。杯部口縁約5と脚柱部を縦に½を欠損する。口径11.6cm、器高15.8cm、底径10.7cmを測る。体部から口縁部にかけ直に延び、端部に向いやや外傾し外へ張り出す。体部下位に2条の沈線を施す。脚柱はラッパ状に開き、裾部で小さく上下して外へ張り出す。脚柱部に上下2段の透しをもち、全周に3ヶ所施す。また上下の透し間に2条の沈線を有する。調整は杯部内面から外面沈線部まで回転ナデ、下段の沈線から底部は逆時計回りの回転へラ削りを施す。脚柱は外面の杯部との接合部から内面まで回転ナデを施す。粗い石英粒がかなり目立つ胎土で、焼成は堅緻である。杯部は内・外面共に灰かぶりにより灰黒色を呈し、脚部は暗青灰色を呈する。また脚柱の透しに沿う様に上・下2条平行線のへラ記号が各々1ヶ所印される。

須恵器略(第52図11・12)11はⅢ区周溝内出土である。肩部から体部にかけた小片である。内面肩部に指押えの痕跡を観察する。体部上下に各々2条の浅い沈線を有し、その中間に幅0.6cm程の目の細かい櫛描波状文を施す。内外面共に回転ナデ、胎土精良で焼成堅い。灰白色を呈す。12は I 区墳丘内旧表土上出土。口縁等々各所を欠くが復原によりほぼ完形となる。口径11.2cm、器高14.4cm、胴部最大径9.6cmを測る。口縁部と頸部の境に1条の沈線を入れる。胴部は扁球形で、肩部と胴部に各1条の沈線を巡らし、その間に斜行の櫛目押圧文を施す。外面胴部から底部は逆時計回りの回転へラ削り、肩部から内面頸部に回転ナデを施す。胴部内面は観察不能である。頸部にシボリ痕を認める。外面底部に1条の太く浅いへラ記号を印す。胎土に若干の粗い石英粒を含む。焼成は堅緻である。全面灰色を呈す。

**須恵器甕**(第53図15)Ⅳ区墳丘内出土。口縁部から肩部にかけた半損品で,復原口径22.5cmを 測る。頸部から口縁部に外反し,端部が角張りやや折り返し気味である。端部に1条の沈線を 巡す。焼成軟質にして器表がやや磨滅している。肩部外面に,平行条線状叩目の上に粗いカキ

目を施し、内面粗大な青海波文を施す。胎土に若干の粗い石英粒・長石粒を含む。灰白色を呈す。 須恵器小壺(第52図16)古墳調査終了後、縄文文 化層の調査を行い、そのF7グリッドより出土したもので、前庭部付近に当たる地点かと思われる。



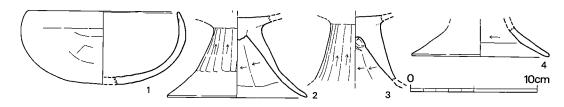
口径7.9cm, 胴部最大径9.9cmを測り, 脚の付くタ 第53図 6号墳出土須恵器実測図②(1/6)

イプかと思われる。胴外面には意識的な太い凹線3本が巡り、内外面ともに回転ナデ調整を施す。胎土に黒色微細粒多く含み、焼成堅緻で、外面淡青灰色、内面は灰色を呈する。

**須恵器提瓶** 現段階に於いて、本提瓶の詳細については述べられない。しかし、平面実測図によりその形状を推定できる。口径 5 cm、器高20cm、胴部最大径12cm程であろう。

土師器椀(第54図1)Cトレンチ墳丘内出土,約%を欠損する。復原口径11.8cm,器高5.9cm。口縁は内傾する。外面底部から体部にかけ手持ちへラ削りの後にナデを施し,外面口縁から内面は横ナデである。しかし、内底面は器表面不明瞭である。胎土精良、焼成良である。器面淡茶色を呈す。

土師器高杯(第54図2~4)2~4はIV区墳丘内出土である。孰れも脚部のみ存する。2は脚裾部は約1/5程の小片であるが、脚柱部は存する。復原底径11.0cm、現存高6.5cmを測る。脚裾部へ大きく開く。比較的薄手の造りである。脚柱外面は上方向へへラ削り、内面は時計回りに弧を描く様にへラ削りを施し、裾部は横ナデを施す。内面裾部と柱部の境に、若干不明瞭な稜線をつくる。胎土、焼成ともに良であり、淡茶色を呈する。3は脚柱部のみ存する。2に比してやや細長い脚部になると推察される。調整は2に同じであるが内面天井部に、へラ削りの際へラ先による抉りの痕が残る。胎土に粗い石英粒を若干含む。焼成良である。全面肌色を呈す。4は脚裾部約¼のみ存する。内面裾部と柱部の境にへラ削りによる稜線が巡る。内面脚柱は時計回りにへラ削りを施す。他は横ナデを施す。胎土、焼成共に良である。全面肌色を呈す。



第 54 図 6 号墳出土土師器実測図(1/3)

本古墳は、当地方特有の石室構造である胴張りの形状をとり、本古墳群では前述の4号墳と同型となるものである。しかし、本古墳と4号墳には若干の異なる点がある。それは、玄室の平面プランに於いて、4号墳は円形に近いが、奥壁に面の広い板石を鏡石として据え、三味線胴張りの形状を保っている。本古墳に於いては、鏡石は小形の塊石を据え、平面プランは正円に近い円形を呈している。また、石積みに於いても違いが見られ、4号墳はやや大形の塊石や板石で面取りをした様に壁面が整い、本古墳では小形の板石を用い、壁面凹凸が著しい。以上のように本古墳は、4号墳と比して荒い構築が成され、やや4号墳よりも後出する感がある。

では、本古墳の出土遺物よりその築造時期をみる。本古墳では、2号墳におけるI・II・IV 類の杯が出土している。まず、I類としては蓋1・2と身7・8がある。蓋2と身7・8は、 出土位置が明確におさえられ、本古墳の初築を知るうえで重要な遺物である。また、Ⅱ類は身 5・6である。共に盛土内より出土している。Ⅳ類は蓋3・4である。Ⅱ類から時期幅があり、 本古墳に直接伴うものではないと考える。

以上の様に I・II 類の杯が、本古墳に伴うもので、若干時期幅を有している。しかし、本古墳で I 類にした杯には新しくなる要素を含み、また、身 7 ・ 8 は酸化焰焼成による土師質のものであり、須恵器の編年観がそのまま当てはまるものとも思えない。やや新しくなる 7 C 初頭を本古墳の初築の時期と考える。 (平嶋)

# 6.7 号 墳

本古墳は、I区の丘陵を挟んで進む谷筋が合流する箇所に位置し、標高61.5~63.5mとなる。 5号墳と共に谷に面して置かれる。

見かけの高さは1.7mと高く、一目にして古墳と判るものである。墳中央に径3.5mの盗掘穴があり、主体部が本古墳も他と同様に荒らされている事が想像された。本古墳は等高線の変換により、径10.5mを呈する円墳と調査当初推定した。

#### 墳丘 (図版31, 第55・56・58図)

地山整形は、石室前面を残して横長の円形に掘られた周溝と、盛土に際して若干地表面の整地が行われる程度である。また、本墳丘はその築造に於いて特異な形状を呈していた。それは、墳丘は本来周溝を掘り、その内縁まで盛土を行い、その内縁が墳丘の裾となるものであるが、しかし、本古墳では盛土の裾から周溝内縁まで1m乃至4mもあり、III区ではこの位置で盛土裾の列石が巡って、周溝は盛土裾から遙か外周を巡っている。

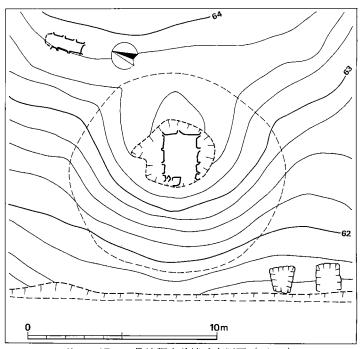
盛土は最高45cm程行われ、墳丘の土層断面からは、石室構築や墳丘築造に関する工法の変化は見受けられない。また、盛土に多量の礫を含んでいるが、これは当古墳に於いて無理からぬ事であり、堆積土下数10cmで片岩質の岩盤にあたり、その岩盤を穿って墓址・周溝が造られ、それにより出た礫石が盛土中に混在しているのである。しかし、墳丘東側に於いては、板石状の礫を層状に盛り上げて奥壁の補強を試すかの様である。また、この礫を重ねる事により、墳丘の形状が良く留まっていたと推察される。このように当墳丘では多くの礫石を用いているが、2号墳や3号墳のような内護列石はみられず、墓道先端で盛土裾両脇の、若干の石列と石室背後の盛土裾の石列が存する程度である。

墳丘の規模は、石室主軸方向で12.6m、直交する軸で14.6mの長円形を呈す。周溝は最大幅で2.7mを測る。また、盛土は径7mの円墳である。

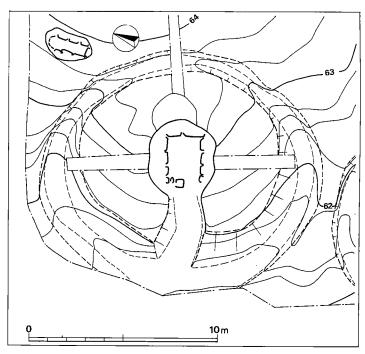
主体部(図版31·32,第57図) 本石室はN70°Eに主軸を おき,全長3.1mを測る。形 態は単室片袖の横穴式石室 である。

掘り方は、長軸で4.4m, 短軸で3.4mを測り、平面プラン長方形を呈する。墳丘 土層断面観察により、黄味 黒褐色土(13)、黒色土(14) から深さ0.6~1 mで掘り込まれる。

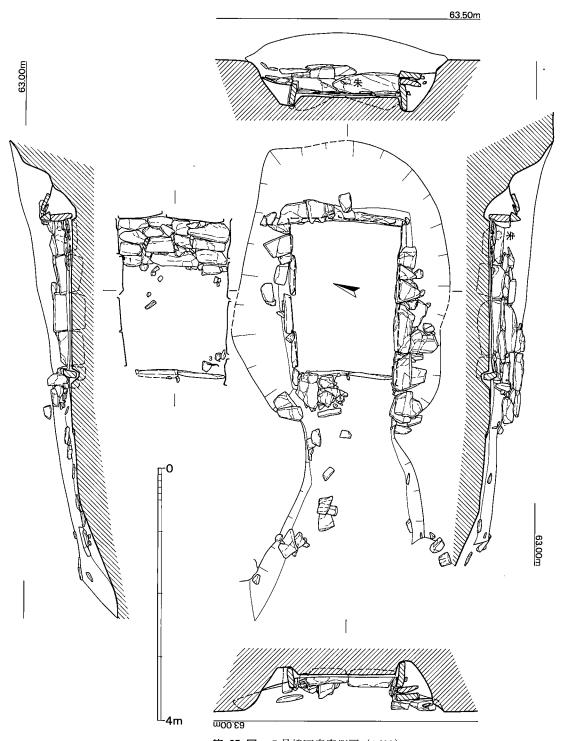
石室の現状は,玄室で基 底部と数段の石積みが残る 程度である。各所の状態は, 奥壁では, 残りの良い所で 高さ40cmで, 基底部石は板 石が横長に立ち、その上段 に 1~2 段程の平積みで、 側壁は残存状態が比較的良 い右側壁前方部で高さ50cm である。側壁の基底部石は, 左右共に奥壁と同じ様に横 長に立てられているが、し かし, 玄門脇の石は左右共 に板石が縦長に立てられて いる。それらの上段に2~3 段の平積みが行なわれた状 態で残っている。また、奥 壁基底部の石は2枚用い, 共に三角形を呈する板石で, 上面を平らに合せて, 三角 形の頂点を下にし、深さ25



第 55 図 7号墳調査前墳丘実測図 (1/200)



第 56 図 7号墳地山整形面実測図 (1/200)



**第 57 図** 7 号墳石室実測図 (1/60)

cm程埋置している。これに対して他の基底部石は方形の板石を用いている。この違いについては、奥壁側掘削面が岩盤であり、容易には掘り下げにくく、労力を少なく石を立たせる為と推察する。

玄室は方形プランを呈し、長さ2.4m、幅奥壁側で1.8m、玄門側で1.6mを測る。また、右側壁は直に並び、左側壁は奥壁側から玄門側にかけて右寄りに狭まる。床面には、奥壁から70~80 cmまで板石による石敷きが行われ、明らかに朱塗付の痕跡が認められる。それより前面では、石敷きは痕跡すら止めていない。即ち、石敷きは、本来からこの様な状態であり、この部分が被葬者の屍床であると推定される。本石室と同様な例として、9号墳の石敷きがあり長さ・幅共に本石室に類似している。

框石は、細長い板石を2枚横長に立てて据えられ、深さ10cm程根部を埋めている。

本石室の袖は片袖であり、一辺20cm、高さ30cm(石材の高さ50cm)のやや細長い石柱状の石が、石室軸の中央寄りに張り出して据えられ、その石の周りに板石を平積みしている。本石室に於ける袖は、立石のみではあまりにも単独で中央に飛び出しすぎており、立石を含めた周囲の積み石により、袖が構成されるものであろう。

また、右側壁に於いて基底部石を持たないが積み石が、框石の存する位置から前方へ飛び出しており羨道を想起させる。しかし羨道としては短く、対峙して袖にあたる事から、石室の上部構造に関わるものであろう。

墓道は、地形に沿って玄門から3.5m程下降している。

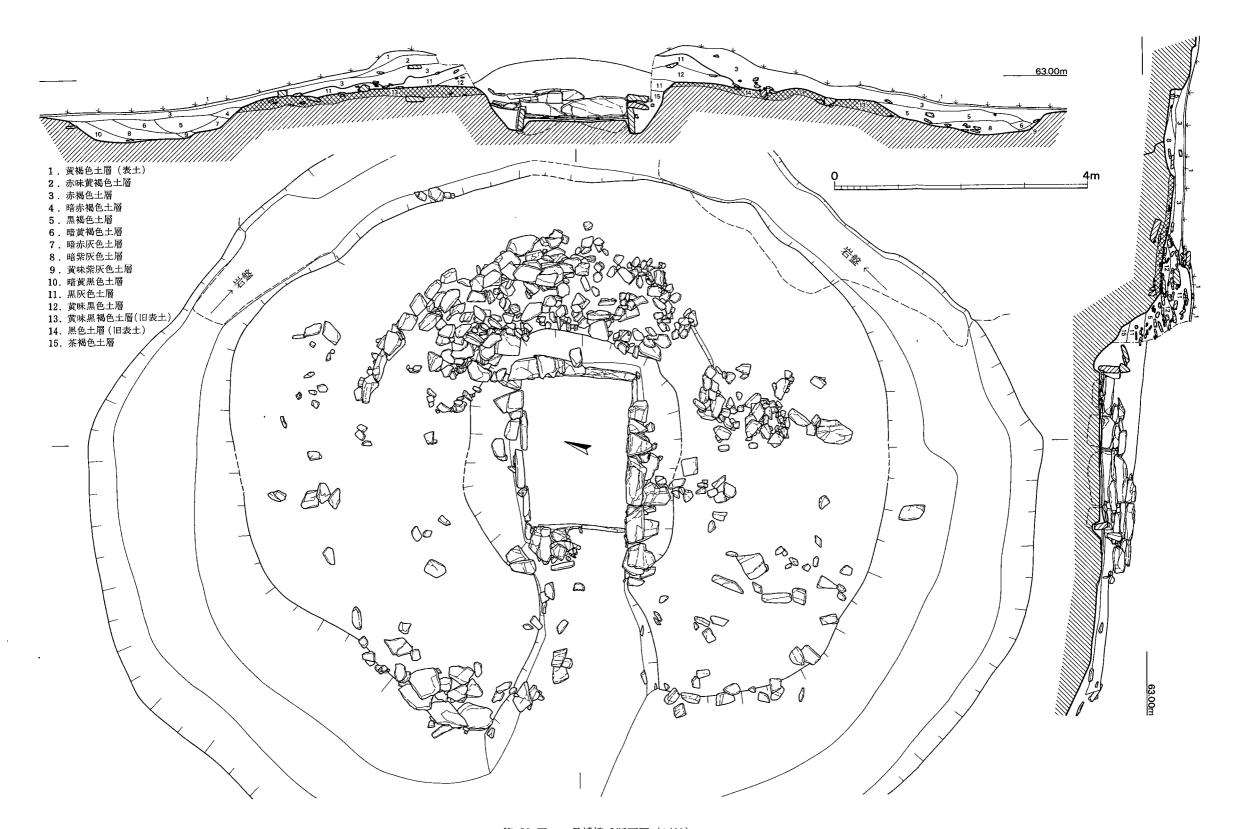
また、玄室の各所で朱の痕跡が認められた。

以上の様な石室の構造や墳丘断面の観察により石室の推定形状は、石室内の高さ1m強であり、全壁面はほぼ直に積み上げられ、石室縦断面も平面と同じく方形を呈するものである。

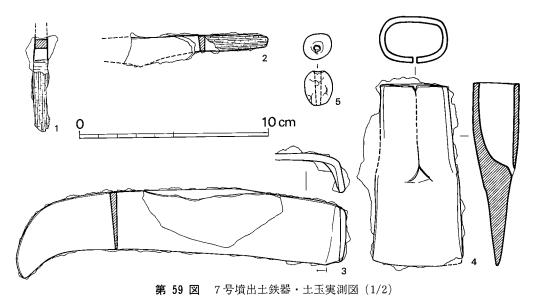
## 遺物出土状況 (第57図)

本古墳に於いて出土位置が明確な遺物は、1の鉄鏃と3の鉄鎌である。共に玄室床面より出土した。鉄鏃1は石敷上で左側壁際に位置し、鉄鎌3は玄室前方の右側壁寄りに、框石の側に位置した。また、陶質土器の甕片が、石室内埋土・墓道・I区周溝内の3ケ所から出土しているが、全て同一個体となり、何らかの意味が存する事が窺われる。他に墓道の埋土より、土玉が出土した。

その他は、次の各所より出土した。III区盛土内より把手、Cトレンチ掘削の際、墳丘表土面より須恵甕片が出土した。墳丘前方部の北側周溝内より、土師器の高杯・椀・甕が出土し、南側より刀子・須恵器甕片が出土した。主体部北側の周溝底より鉄斧が出土した。復原の際、Cトレンチ出土の須恵甕片と南側周溝出土の甕が接合した。この甕は元来墳丘地表面に置かれたものが、周溝に流れ込んだものであると推察する。



第 58 図 7 号墳墳丘断面図 (1/60)



出土遺物 (図版32, 第59~61図)

鉄鏃(第59図1) 茎部破片のみの小片である。茎に木質や沓巻が銹着している。鏃にしては茎が非常に短い感を受ける。玄室床面出土。

鉄鎌(第59図3)玄室床面出土であり、長さ17.5cm、身幅3~3.5cm、背厚3.5mmを測る。折り返しの部分には、木質等の痕跡はみられない。身中央に大きな銹膨れがある。

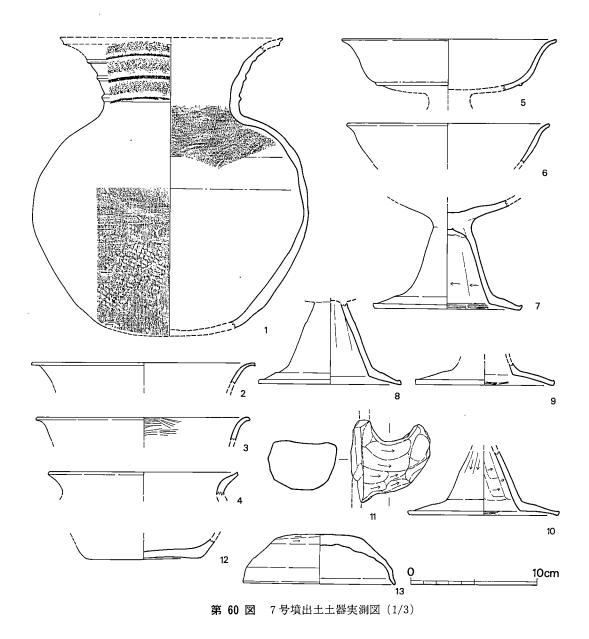
鉄斧 (第59図4) 袋部を有し肩がつく。全長9.7cm, 刃部幅4.7cm, 袋部内径3.8×1.8cmの楕円 形を呈する。北側周溝より出土。

鉄刀子(第59図 2) 周溝より出土した。身部に銹膨れがあり、鋒方向を欠損する。刃部に関を有し、内湾するものである。茎に木質が銹着する。残存長7.7cm、関部幅1.6cm、茎の背厚3.5mmを測る。

土玉 (第59図 5) 墓道埋土より 1点出土した。重さ3.2g,径1.5×1.8㎝を測る土製品である。 焼成良好で淡茶褐色を呈す。胎土に粗い石英粒・雲母片を若干含む。

須恵器壺(第60図1)口縁端部と底部を欠損し、胴部も½を欠損する。推定器高23.5cmである。 頸部に3条の丸味を帯びる凸帯間に、山形状となる稚拙な波状文を有する。口縁は、頸部から 外傾して大きく開く口縁となる。肩部はナデ肩となる。外面胴部表面に凹凸が顕著にあり、内 面頸部も同様である。内面頸部回転ナデ、肩部~胴上半まで青海波文の上を回転ナデ、肩部に 青海波文が明瞭に見られる。胴~底部にかけて横ナデが施され、アテ具痕等の痕跡は見られな い。外面は、胴部全面にへラ削りが施され、その後に胴部上半は回転ナデ、下半は格子目叩き を施す。胎土細かい砂粒を若干含み、焼成堅緻、外面淡青灰色~黒色、内面灰黒色を呈す。

須恵器杯蓋(13)後世の混入品であろう。底部%~口縁大半を欠損する。復原口径12cm,器高

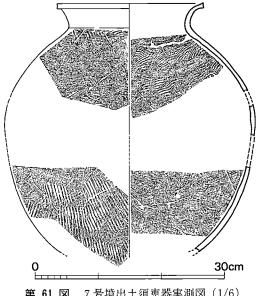


3.9cmである。外面天井部へラ削り、口縁から体部は回転ナデ、内面天井部ナデツケである。へ ラ記号が天井部両脇に間隔をとって2本の平行線を記す。器面凹凸が著しい。胎土、焼成良。 うす灰色を呈す。

須恵器甕(第61図)口径23cmを測る大形甕の破片である。口縁は短く湾曲気味に外反する。外面胴部全面平行叩きの後上半はナデ調整である。しかし,胴中央部破片には叩きは見られない。 内面は青海波叩き目の後ナデ,下半は叩きが若干残る。胎土精良にして,焼成は須恵質で下端 部はやや軟質, 灰茶褐色を呈す。

土師器杯 (第60図12) 後世の混入であろう。 盗掘穴内地表面出土である。底部糸切りで 板目痕が存する。体部は内外面共にナデツ ケ, 内面底部は一方向へのナデツケを施す。 焼成, 胎土良, うす茶色を呈する。

土師器高杯 (第60図2・5~10) 完形にな るものは全く無く、2・6・9は極めて小 片である。杯部は,体部外傾し,口縁部で やや外反する。2は口縁端部が下方へ尖る。 杯部は全て横ナデ調整である。 脚部は、柱 部が全てエンタシス状の膨みをもち, 内面 柱部と裾部の境に稜を有する。裾端部は小 さく上方へはねる。10には、外面柱部上半



7号墳出土須恵器実測図(1/6)

に上から下へ縦方向のヘラ削りが施され、他の柱部は全て横ナデ、また、裾部も横ナデである。 内面は柱部へラ削り、裾部は8を除けばハケ目の後に横ナデを施す。8は横ナデのみの調整で ある。全て胎土, 焼成共に良, うす茶から明るい茶色を各々呈す。

土師器椀(第60図3)口縁部の極小片である。口縁部が大きく外反する。内面ハケ目の後横ナ デ,外面横ナデである。胎土,焼成共に良,うす茶色を呈す。

土師器甕(第60図4)本品も極小片である。全面横ナデ調整,胎土,焼成良,うす茶を呈す。 土師器把手(第60図11) 1点のみ出土する。甑につくものであるか否かは不明である。胎土, 焼成良, うす褐色を呈する。

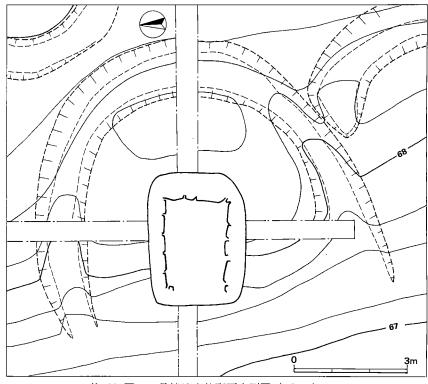
本古墳は単室横穴式石室で、片袖を有し古式の様相を呈している。また、本古墳より出土し た陶質土器は、池の上Ⅲ式、もしくはⅣ式であり、5C前半も中頃に近い時期のものである。 (平嶋) 本古墳の初築も同時期と考えられる。

# 7.8号

#### 增丘(第62図)

I地区中央の大きな谷から更に左右にY字形に支谷が走り、その右側支谷の東側緩斜面に8 号墳は占地する。標高68.5~69.0mに位置し、小支谷側へ開口する。

発掘前には, この付近でわず かに等高線が屈 曲する程度で外 見的な盛土等は 全く観察されな かった。この緩 斜面一帯で次々 に姿を表わして いた石棺系竪穴 式石室を検出せ んとして, 重機 による表土剝ぎ を行っていて、 周溝と石室部を 発見した次第で あった。



よって, 墳丘,

第 62 図 8 号墳地山整形面実測図 (1/100)

盛土は全く残らず、その様相は不明である。周溝は馬蹄形に残るが、石室前半部も含めて谷側が削除されている為、どの程度前面側まで廻るか明確でない。周溝外径が南北方向で9m、内径が6m程となり、径10m弱の小円墳であったと考えられる。周溝の深さは25cm程度で、底面は両前面方向へ急に傾斜している。

# 主体部(図版33,第63図)

本墳の埋葬施設は、主軸をS87°30′Eのほぼ東西にとる単室両袖式横穴式石室である。斜面に 直交して構築されており、東の谷へ開口する。石室上半と玄門付近から前面をかなり削除され ている。

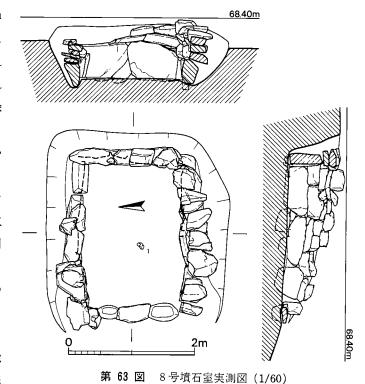
玄室は、主軸上で長さ2.27m、幅は奥壁際で1.55m、中央で1.62m、玄門際で1.50mを測る。 両側壁が僅かに胴張り気味となる、寸詰まりの長方形プランを呈するタイプとなる。

石室構築は、まず幅2.9m、長さ3.1m以上の略長方形の墓址を掘り、その墓址底際に腰石を据えている。奥壁の腰石は厚手板状の大石を2枚立てており、間隙に小板石を立てる。両側壁も厚手の板石を立てて腰石状にしており、その上端レベルを揃える様にして基底部を埋め込んでいる。それらの腰石状立石の上方には、厚手の板石を小口積みにしている。床面から側壁上

端までの現存部高さは0.95m あるが、内側への持ち送りに よるせり出しは殆んどみられ ない。他の横穴式石室のそれ と異なる処である。石材は緑 色片岩を用いている。

玄門部付近は両袖石が抜かれており、その抜き跡の深さは20cm程で深く埋め込んでおり、柱状に近い縦長石材を立てていたと考えられる。玄門部に仕切りの框石がみられるが、板石を置いただけのものである。

床面に敷石は認められず, 当初から存在しなかった可能 性もある。玄室から前面は残 らないが、5・7号墳などの

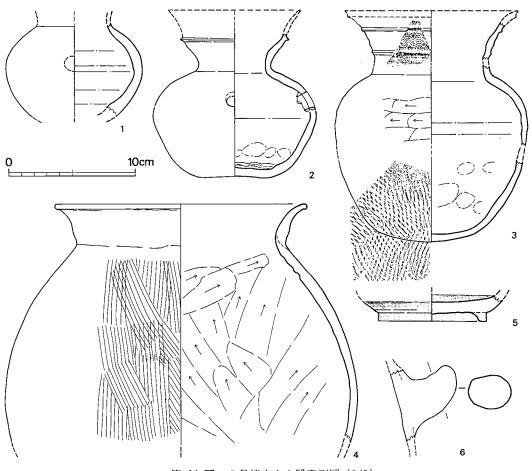


様相から、八の字に開く積石の袖部分が付き、狭い前庭部を形成する形態になると考える。

以上の石室の様相は、全体的に石棺系竪穴式石室の積石法を彷彿とさせるものである。これは19・5・7号墳等からより直接的に連続するタイプであると考える。また玄門際両立石の存在は、5・7号墳の片袖的な片側だけの立石から展開してきた様相であると考える。

### 遺物出土状況

玄室内床面中央より須恵器聴片1点が出土した。また、 $I \sim III \subset III \subset III$  電標内から安定する平底気味の所謂陶質土器 2 点、 $III \subset III \subset III$  国溝内より土師器甕と把手部分が出土した。これらは、全て破片出土品であり、後述するように、玄室の遺物と周溝出土のものと明らかに時期差がみられるため、周溝出土のものは流れ込み品と考えられる。それは、南東隣にC-14が存在し、その周溝の北部分を 8 号墳周溝が切っており、更に東隣には陶質土器を周溝から出したC-39が周溝を接するように近く存在し、これらより新しいと考えられる当 8 号墳の周溝中に混入するのは当然の如き事と考えるからである。よって、この 8 号墳の構築年代を示すのは玄室床面出土の 1 点のみと考えられる。



第 64 図 8 号墳出土土器実測図(1/3)

#### 出土遺物(第64図)

頂恵器聴(1・2)1は玄室床面出土品で、胴部最大径10.8cm、頸部径5.9cmに復原される。円 孔部分は残存しないが、胴部中位より僅かに上位で胴部最大径をなすタイプで、全体に球形に 近く、肩も張るものではなく、なで肩状である。外面器表全面に部厚く、暗緑~黒色の自然釉 がかかり、特徴的である。内面は回転ナデを施し、下位には自然釉がかかる。胎土に細石英粒 を多く含み、焼成極めて堅緻で、内面は灰色を呈する。½残存する。2は北側周溝内出土品で、 胴部円孔直下で上下に分かれる破片を、図上復原したものである。2mmほどの上げ底にさえな る安定した平底をなし、肩が張り、口頸部境にややシャープな凸帯をつくる。胴部最大径から 下の外面はへう削りの上をナデており、その内面は横位にナデる。底内面は指オサエ痕と、棒 状工具突き跡による段がつく。他は内外面とも回転ナデによる。胎土に細石英粒・黒色微細粒 を幾らか含み、焼成堅緻で、口頸部内面・胴部外面肩付近・底内面は灰かぶりを呈し、灰~暗 灰色をなす。他面は灰黒色をなす。

須恵器壺(3)II区を中心としてIII区に及ぶ周溝内に散乱して出土したもので、頸部・胴上半部・胴下半~底部が各々接合しない為、図上復原を行ったものである。頸部には2条の低い凸帯をつまみ出し、その間に振幅・波長ともに短い6本歯の櫛描波状文を施す。胴部外面中位は手持ちの横位へラ削りがなされ、下位から底部へは平行条線状叩目が顕著である。胴部内面中位以下は横~斜めの雑なナデが施され、他面は回転ナデ調整が施される。胎土には細砂粒を幾らか含み、焼成堅緻で内面黒色、外面は灰色を呈する。胴部下半破片の状況から、図より幾らか大きめの胴部となる可能性もある。

土師器甕(4・6) 4 は口径20.0cm, 胴部最大径28.0cmを測る。Ⅲ区周溝内出土品で, %弱残存する。なで肩で, 下膨みとなりそうな胴部に, 中途で中膨みをみせる口縁部をつける。口唇外端は丸く, 外面に段をなす。胴外面は粗い雑なハケを施し, 内面は極めて雑なへラ削りを行う。胴外面には煤がこびりつく。焼成良く茶褐色をなす。 6 は把手部分で, 4 とは別個体である。Ⅲ区周溝内出土品で, 小型で横に扁平な断面をみせるタイプである。胴内面はヘラ削りで, 把手付根周辺は指オサエ痕を残す。粗石英粒をかなり含み, 焼成良く, 淡褐色をなす。

土師器高台付椀(5) II区周溝内・Bトレンチ墳丘内出土品で、高台径8.6cmを測る。かなり磨滅するが、全面に赤茶色スリップをかけており、充分丹塗りと言ってよい。胎土精良で、焼成良く、地色は暗黄褐色を呈する。歴史時代のものとすれば、奈良時代後葉期の所産となろうか。

以上8号墳の出土品を中心として若干の検討を加えてみよう。周溝出土の土器は、5を除いて他は所謂陶質土器と呼ばれる類とそれに伴う土師器甕である。即ち、2・3は池の上I~II 式に相当し、土師器甕4は、池の上II式を伴う池の上D-1出土の土師器甕より胴の張りが下がり、甘木市立野A地区2号墳周溝底供献の甕の形態と酷似してくる。因みに立野A地区2号墳主体部は土城墓に竪穴式石室を付け足した形態のもので、当柿原I地区C-56などと共通しており、更に周溝内から初期須恵器壺が出土しており、時期的に近似する貴重例である。以上の様相から8号墳周溝内出土の2・3の土器は、5 C前葉以前の所産のものであり、また4・6は5 C中頃の様相を呈し、本墳の築造年代を示すものではなく、既述の如く、近隣からの混入品と考える。

それに対し、玄室床面出土の聰(1)は、球形胴に近く、肩も張らず、胴径に比べ頸部径もやや大きくなっており、陶邑 I 型式第 4 段階~II 型式第 1 段階までの所産と考えられ、5 C後葉~6 C 初葉の年代が与えられる。本墳の築造年代としては、石室の形態等からも、こちらの方がより妥当なものと考える。

石室構造については、先に主体部の項で詳述したので、ここでは一応まとめておく事にする。 床面プランが寸詰まり長方形の所謂「只」字タイプとなる事や、壁体の石積み技法が19・7・ 5号墳から続く石棺系竪穴式石室の様相を未だ保ったままである事、また、玄門部両袖の立石の確立などの諸特徴から、以下のような当地区内での変遷を辿ることができる。即ち、石棺系竪穴式石室に入口を付けた19号墳から、未だ長方形の9号墳に平積みの玄門袖が出来、次に寸詰まり気味の長方形プランとなる7・5号墳の片側に立石袖が現れはじめて、次に本8号墳において両側の立石袖が確立する。その後は、やや羽子板形床面プランとなる10・11墳玄室の前面が羨道部的な石積みへと変化する。以上のような変化の流れの中で、8号墳を把握する事ができ、実年代も先に記した幅の中で認識されよう。 (中間)

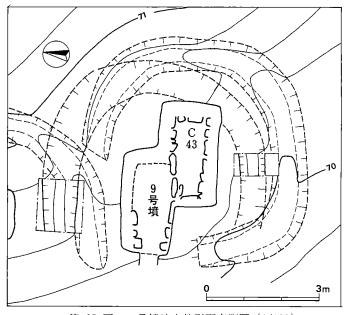
# 8.9 号墳

#### 墳丘 (第65図)

8号墳主体部から北へ18mに位置し、東側支谷へ開口している。C-43に石室部・周溝を切られている。

9号墳周溝は、南半でC-43の周溝の内側に巡り、北半で切られてから更に外側に巡る。周溝径は外径で6.0m内径で4.2m、深さ30cm弱しか残らない。実際はC-43・C-45周溝と込み入って切り合っていた為、北西端と、南側一部を掘り下げて確認したもので、他はプランの検出に留まった。

墳丘盛土は、当初より9号墳がこの位置に存在する事すら予想しない程、全く残存しない。 後述する如く、C-43と主体部自体も側壁を共有する如き様相であり、両者は余り時期差はな



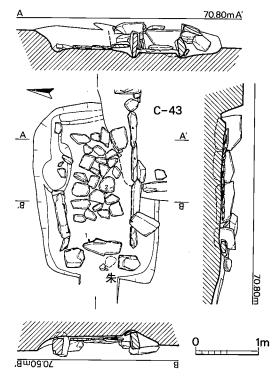
第 65 図 9 号墳地山整形面実測図 (1/100)

く, 9号墳の墳丘を利用して, C-43の主体部を作り, 周溝 を若干掘り直した可能性が考 えられる。

#### 主体部(図版34,第66図)

主軸をN80°Eにとり、斜面 に直交して構築された両袖式 単室横穴式石室である。とい うよりも、確立しない玄門袖 石の段階の横口式石室と呼称 すべきであろう。前面側は削 除されて残存しない。使用石 材は全て緑色片岩である。 玄室は長さ1.85m,中央部近くの最大幅1.05m,玄門部際で幅0.97mとなる。僅かに奥壁側が広くなる長方形床面プランをなす。床面には長さ20~30cm大の板石を敷き並べるが、現状で縦1.4m幅0.8mの中央部の範囲のみにみられ、通常攪乱された石室でも残り易い壁際には全く見当らない。これは、当初から現存範囲にだけ敷いて屍床とした可能性が強い。これは7号墳奥壁際にみられる屍床部分が幅0.8mであり酷似する。本9号墳石室の形態は7号墳のそれに先立つタイプであるところから、7号墳ののような屍床範囲に敷石を敷設することの原初形態にあたると考えられる。

墓址は東南隅をC-43に切られるが,長さ2.8m,幅2.0mの隅丸長方形に掘り,横口部分も掘りつなぐ。左右両側壁と奥壁部分に,やや厚手の板石を基底部に立て,しっかりと埋め込む。この腰石状基底石の上



第 66 図 9 号墳石室実測図 (1/60)

端面レベルは、揃ってはいない。右側壁の奥壁寄りの2石は後にC-43の側石にそのまま利用されている(図中▲印)。また、この腰石状基底石より上は1石しか残らないが、恐らく板石の小口積みであろうと考えられる。

玄室入口部には下框状の仕切石が、やや厚手の板石を置いただけの状態で検出された。更にこの仕切部の前面側の左右には平積み状に板石が置かれており、一見玄門袖石状であるが、実は墓址底面より5~10cm浮いたものであり、19号墳例の如き、前面羨道壁中位に段を設け、その上に積石したものから一歩進んで、墓址内部のより低い位置から積み始め、結果的に平積みの玄門袖状を呈するという類である。これは、7・5号墳の片側に平積み状袖石を残すものへと変化してゆく。

玄室外仕切石前面に朱が検出がされたが、その性格は明確でない。他の玄室内側石・床面等 に全く残らない。遺体埋納・石室閉塞直後の入口封じの祭祀的行為によるものかもしれない。

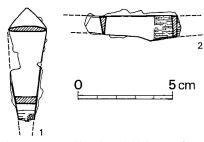
#### 出土遺物(図版34,第67・68図)

9 号墳からは、玄室床面で 2 点の副葬鉄器が、更に石室内埋土中及び墓址底から土師器高杯

片が出土した。

鉄鏃(第67図1)玄室玄門際より出土したもので圭 頭の類になるかと思われるが、接合の状況より若干 疑問もあり、他器種の可能性もある。

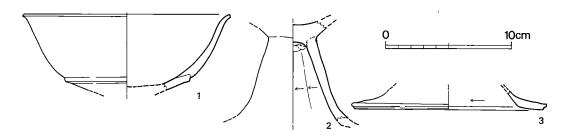
鉄刀子(第67図 2)玄室床面中央敷石間より出土したもので、細い身から関部で最大幅となるタイプである。茎部には木質が残存する。



第 67 図 9 号墳出土鉄器実測図(1/2)

土師器高杯 (第68図1~3) 1・2は石室内埋土中、

3は墓址底出土品である。1は復原口径16.4cmを測り、杯部下半で丸味を持ち、口縁で外反する。口唇部は小さい面をなす。内外面ともに横ナデで、胎土精良、淡茶色をなす。 %残存して、全体にシャープである。2は脚柱中位が中膨みをみせるもので、外面は磨いているようであるが明らかでない。脚柱内面は横方向へのへラ削りが施されている。3は復原脚端径16.5cmの、裾広がりに大きく開くタイプである。脚端部は凹線を巡らし、脚柱内面は横位へラ削りを施す。



第 68 図 9 号墳出土土師器実測図(1/3)

以上の9号墳の石室・遺物の様相をまとめてみよう。

まず、石室形態が、細身長方形の原初型竪穴系横口式石室の次の段階にくるタイプである事。 即ち、玄室床面プランがやや幅の広くなった羽子板的長方形になっている事。更に、玄門から 羨道部への形態が、羨道石積の最初が墓址内に平積みされ、結果的に玄門袖としての景観を呈 するようになる事。また、床面敷石範囲が中央に寄って、後の敷石屍床部設定例の先駆的形態 をなすと思われる事などの諸特徴が指摘できる。これらは、この9号墳の前段階として19号墳 が、そして後段階として7号墳石室の形態が位置付けられる事を示す処である。

出土遺物のうち、鉄器 2 点の副葬品がみられるが、刀子は細身でその形態は、前期古墳出土例の特徴を良く残している。土師器高杯 3 点は、いずれも小片で、確実に当墳の副葬・供献品とは断定しにくい。しかし、年代的に当古墳石室構造と矛盾するものではない。石室構造で当墳の前段階とする19号墳周溝出土の高杯と比較すると、全体に類似点が多く、型式的に一型式中に含まれ得る程である。ただ、脚柱中位のエンタシス状膨みの違い、脚端部の形態の違いな

ど細部に於いて若干の相違がみられる。これら細部はむしろ7号墳出土高杯と共通する部分も みられ、土器の編年観からも、当9号墳は19・7号墳の中間位置を占めている事が判る。

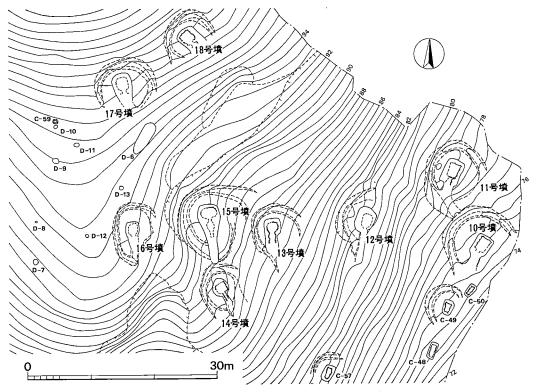
以上の石室形態・遺物の年代等の検討から、詳細は後論に譲るとして、ここでは取敢えず、本9号墳は5C前半代の範囲に収まる時期の所産としておきたい。 (中間)

# 9.10 号 墳

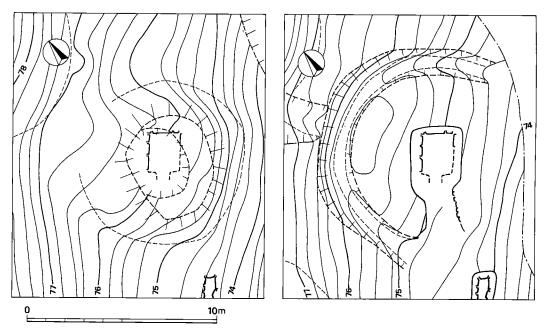
# 墳丘 (第70・72図)

東側小支谷の奥の方の左斜面の群集する古墳群のうち、最下位の谷際の狭い緩斜面に位置する。北々西側に11号墳と隣接し、主体部付近は標高76m前後となる。

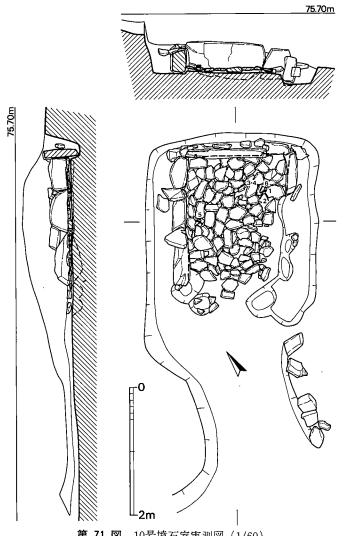
墳丘の発掘前の観察では、直径8.5mのほぼ円形の高まりがみられ、谷側はやや急斜面をなしていた。墳頂部までの高さは、南側から1.2m程、東側から2m程で、全体に谷側に出っ張り状の墳丘であった。墳頂中央には径3.5m程の陥没孔がみられ。実際石材採出によると思われる破壊が大規模に行なわれていた。



第 69 図 10~18号墳周辺遺構配置図 (1/600)



**第70 図** 10号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)



**第71 図** 10号墳石室実測図 (1/60)

第72 図 10号墳墳丘断面実測図 (1/60)

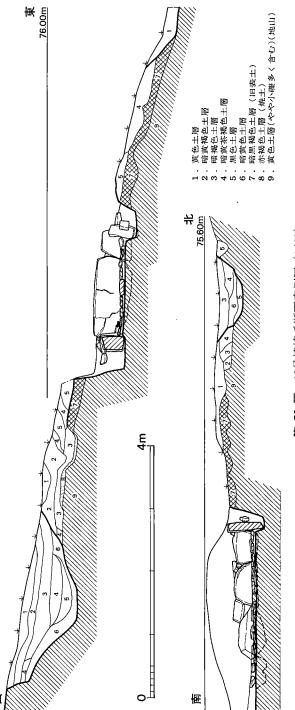
周溝は、玄室中心から半径6. 0~5.5mの半円形に巡り、羨道前 面から西側周溝へは連続する。斜 面築造古墳の常として、斜面上位 側の周溝は深く、西側で1.15m, 北側では浅く0.45mとなる。

墳丘盛土は西側で4層・0.4m, 東側で2層・0.2m程しか残らず, その作業工程は明確ではない。た だ,玄室を中心として2.7m範囲内 に,石積み控えの強化盛土を行っ ているらしい事は判る。(図中4・ 5層)また,西側墳丘下に旧表土 を切り込んで焼土の浅い拡が検出 された。これは,全く当墳より古 い時期の所産か,或いは,築造当 初の地山整形作業時に,火を焚く 行為を伴う祭祀的行為が行なわれ たものか,孰れか俄かには判断し 難い。

# 主体部(図版35·37, 第71図)

本墳の埋葬主体は,主軸をN35°30′Eにとる両袖式単室横穴式石室である。玄室床面は,長さ2.25m,幅は奥壁際で1.6mの寸詰まり長方形プランを呈する。床面には小板石が敷き詰められる。

側壁は腰石上の小口積み一段までしか残らない。右側壁・玄門側壁は大きく破壊され石が抜かれている。玄門入口は幅0.5m程で,両袖石が深く埋め込まれて,11号墳



残存例より、板状立石であった可能性が強い。奥壁には板石を横長に立てており、両側壁は厚手板石を横長に立てる。玄門部仕切石は残らないが、その掘り込み痕跡も残らない事から、板石を平積み状に置いたタイプであったと考えられる。

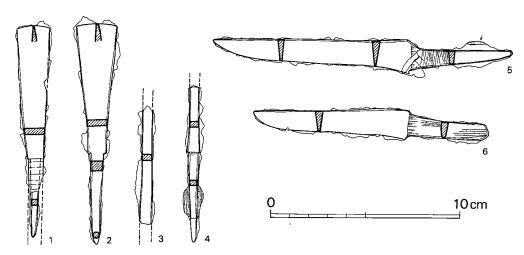
玄門前面には右側辺に列石が残り、長さ2m前後の羨道石積みがあった事が判かる。この羨道石積みは玄門袖石より外側へ50cm程引いた位置、つまり石室側壁ラインに合わせるように積み始め、最前面側へとハの字状にやや開くように構築している。ただ、前面側は南へ、つまり谷方向からの墓道へ続けるが如く、東へ振っている。

#### 出土遺物(図版36・37, 第73・74図)

玄室内床面直上から、鉄鏃3本、鉄刀子2本が出土した。また、古墳前面側のI区周溝内より土師器椀3点が出土した。

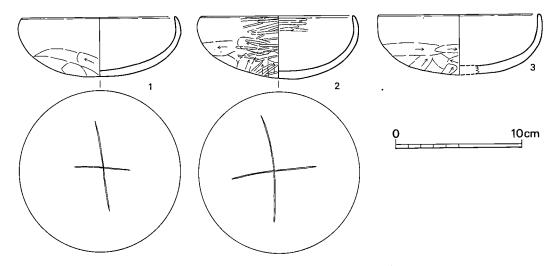
鉄鏃( $1\sim4$ )  $1\cdot2$  は,方頭斧箭式のやや広根気味の類である。 1 は全長11.2cm,身長7.1 cm,鋒先幅1.8cmで,沓巻が残る。 2 は全長11.6cm,身長6.8cm,鋒先幅2.1cmを測る。  $3\cdot4$  は同一個体と思われ,箆被細根のタイプである。

鉄刀子(5・6) 5 は全長15.9cm, 身長10.4cmで, 茎部には関寄りの部分に, 糸ではないが何か繊維質のものが鉄地に直に巻かれている。また, その上にごく僅かではあるが鹿角が残存している。 6 は全長12.5cm, 身長8.3cmで, 茎部に木質付着する。



第 73 図 10号墳出土鉄器実測図 (1/2)

土師器椀( $1 \sim 3$ )  $1 \cdot 2$  は器形,法量ともに類似しており,口径12.2cm,器高 $4.7 \sim 4.9$ cmで,口縁内湾するタイプである。1 の内面は平滑なナデで,底外面は手持ちへラ削りの上をナデている。明茶色スリップを全面にかける。2 は,底外面に手持ちへラ削りを施し,その上に全面



第74図 10号墳出土土師器実測図(1/3)

に横位の雑なへう磨きが施されている。 $1\cdot 2$  ともに底外面に細く浅い十字形のへう記号が施される。3 は、 $1\cdot 2$  程には内湾せず、未だやや直立気味のタイプで、口径12.9cm、器高4.7cm を測る。底外面は手持ちへう削りの上を雑な磨きかと思われる。内外面に赤茶色スリップが残る。

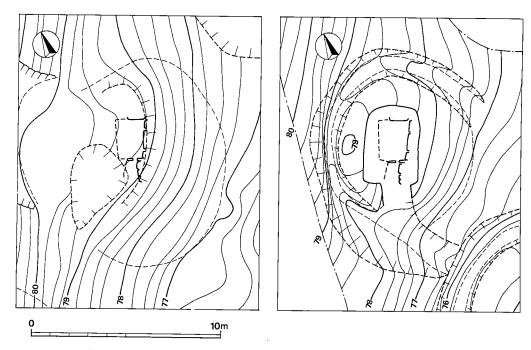
以上の10号墳は、その占地からも11号墳より古いと考えられ、石室の諸特徴は8・11号墳に 共通するものが多い。8号墳の石室も残り悪く、明確さを欠くが、その占地、古式須恵器の出 土から、当10号墳に先行するかと思われる。11号墳は玄門袖部立石の内側面に揃えて羨道部を 築いており、10号墳より新しい様相を示すと考えられる。

出土遺物は、刀子においても、既に長く、古墳前期の様相とは異なる。土師器椀は未だ完全に内湾しないものもある事や、底外面へラ削りの痕跡を残す点などから、5 C後半~6 C中頃までの幅を考えることができる。ただ、連続的に後出すると思われる11号墳から、土師器杯蓋の漆塗大口径のタイプが出土しており、小田氏編年の須恵器 II 後半~III A 期に伴う類であることから、本10号墳はそれの直前の6 C 初~前葉期の築造と考える。 (中間)

# 10.11 号 墳

### 墳丘 (図版38, 第75·77図)

東側小支谷の奥の方の左急斜面に、へばりついたように群集する古墳群のうち、下から2番目、つまり10号墳の一段上の位置に築造されている。10号墳周溝の一部を11号墳周溝が切り、



第 75 図 11号墳墳丘実測図 (左:調査前,右:地山整形面) (1/200)

主体部付近は標高79.5m前後となる。

墳丘の発掘前の観察では、南北方向に径11mのほぼ楕円形に高まりがみられ、谷側はやや急 斜面をなしていた。墳頂部までの高さは、東裾端から2m強で、全体に谷側への突出部状の墳 丘であった。墳頂やや南西寄りには径3m程の陥没孔がみられ、実際、石材採出によると思わ れる石室破壊が大規模に行なわれていた。

周溝は、玄室中心から半径4.5~5 mの馬蹄形に巡り、古墳前面側で広くなり、谷側へ墓道となって開く。深さは西側で0.9m、北側で0.4mとなる。

盛土は、旧表土上に東側で0.8m残るが、北・西側では薄く一層のみ残存するだけである。東側の土層観察から、玄室中心より2.8mの範囲で、玄室石積の強化の為の小墳丘が形成される作業段階が看取される。

# 主体部(図版38, 第76図)

11号墳は、主軸をN22°30′Eにとり、斜面の等高線に平行に築造された、両袖式単室横穴式石室である。

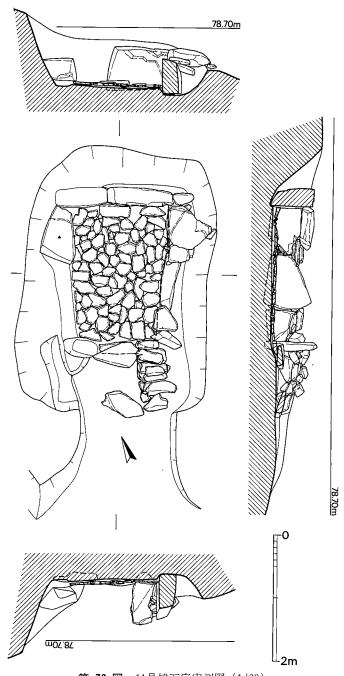
玄室床面は,長さ2.15m,幅は奥壁際で1.55m,中央部で1.45m,玄門部際で1.2mの,寸詰まり羽子板状長方形プランを呈する。床面には小板石の敷石が密に敷かれている。石室使用石

材はすべて緑色片岩である。

奥壁・側壁の腰石は,厚手板状石を横長に立てたもので,それより上は板石の小口積みがなされる。左側壁の奥壁際の石(図中▲印)は,墓址底に接しておらず,また,敷石の一部に載っており,攪乱時に腰石が横転されたままの状態と考えられる。

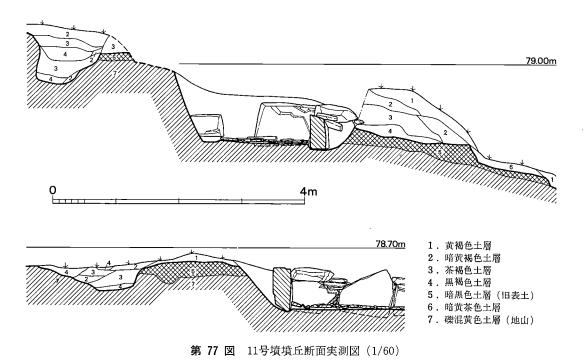
玄門部は右壁側しか残らないが、袖には長い板石を立てており、左袖も同様であったと考えられる。玄門部仕切石は、細長い板石を平積み状に据えただけのものである。仕切石上と羨道入口近くに、2枚の広めの板石が検出されたが、これは各々閉塞石が倒れたものと考えられる。

羨道部石積みは、略長方形の石室墓址内に丁度収まるように構築される。その内側ラインは、玄門袖石の内側に揃えており、長さ1m程の羨道部を形成している。石積みはやや雑な小口積みで、その基底地山面は羨道床面より5~10cm程高く、左壁掘方にも残るように、一段高く掘り残してその上に構築している。



第 76 図 11号墳石室実測図 (1/60)

羨道前面は、玄門辺りより僅かに床面が高くなっており、また、地山掘削により墓道状の短い空間を形成している。そしてこの床面は、わずかな窪み状に10号墳北西側周溝へと続いてお



り、恐らく10号墳の次に築造のこの11号墳は、10号墳の周溝部を墓道として利用して、谷筋の幹線墓道へと繋がっていたものと考えられる。

#### 出土遺物 (図版36, 第78・79図)

11号墳では、玄室床面敷石直上から鉄刀子1点が副葬品として出土した。また、I区の周溝底より土師器杯蓋1点と小型甕片1点が出土した。

鉄刀子 (第78図) 身長7.9cm, 最大身幅 1.6cmで, 茎部端を欠く。茎部には表面 僅かに木質を残す。10号墳出土例と良 く類似する。

**土師器杯蓋**(第79図1)□径13.3cm**,** 

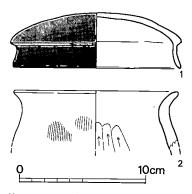
0 10 cm 第 78 図 11号墳出土鉄器実測図 (1/2)

器高4.3cmで,体部と口縁の境の段の突

出が大きく、口縁は外方へ開く。内外全面に細かいへラ磨きが施され、外面には黒色の漆塗りがかなり残る。胎土精良で焼成やや良く、地色は暗茶褐色をなす。

土師器小型甕(第79図 2) 口径13.0cmで,胴部のいくらか張る程度の器形となろう。胴外面にはハケが残り,内面はヘラ削り上げを施す。

以上の11号墳の諸様相をまとめてみよう。まず,石室構造は隣接する10号墳のそれと類似する。即ち,寸詰まり的な羽子板状プランの玄室に,短い羨道部を付ける形式で,竪穴系横口式石室の系列で追えるタイプのうち,最発展段階に近いものである。ただ,玄門袖石に板石を立てる手法や,短く,床面より一段高い位置での積石をみせる羨道部の様相は,未だ古い特徴を残している。しかし,10号墳のように玄門袖石内側ラインから外方へ引いて羨道積石内側面を揃える,つまり,玄室側壁ラインに揃えるようにした羨道部の様相とは明らかに異なってきている。所謂「只の



**第79回** 11号墳出土土師器実測図 (1/3)

字形」の古式のものから明らかに脱皮した形態を示している。

また、この11号墳の後に続くものとして、本古墳群の中では明確な石室形態の連続がみられない。或いは12号墳がほぼ同形態的なものとして後続するかと考えるが、大破しており明確ではない。孰れにしろこの後は2号墳やG・1、H・3号墳のような大型の整美な胴張り複室の出現を俟つしかなく、これら大型墳が6C後葉まで溯ったとしても、この11号墳タイプのものとの間は年代的にも空白期間が認められる。ましてや石室系統論からは、この両者間に大きな断絶を認めざるを得ない。

占地の面からも、これまで古式の石室から11号墳等の谷奥まで昇ってきたものが、大規模古墳では再び谷前面寄りに下がって、更には年代が下降するにつれ、また谷奥方向へと占地を変えていくという、2回の谷奥方向への進出という現象がみられる。この事から、11号墳の後に続く石室形態のものは、より谷前面の、或いはもっと平野部に近い低丘陵上等に存在する可能性も考えられる。或いは、或日突然、強い胴張り石室の大型墳丘が出現する可能性も、あながち無視は出来まい。以上の諸様相については後論において具体的に検討を加えたい。

11号墳出土の遺物は僅少であるが、黒漆塗りの土師器杯蓋は若干の類例があるので検討したい。口径13cm強の大型で口縁が外開きとなるこのタイプは、山門郡瀬高町名木野 7・8号墳に各々 2・1 例出土している。名木野 7号墳 2 例は当11号墳例に酷似し、名木野 8号墳例は外面に手持ちへラ削りを残すものである。共伴須恵器は小田氏編年の II ~ III A 期のものである。また石室形態は、8号墳の方がより小型長方形で、当柿原 I・11号墳の如き短い羨道部を付けたもので、7号墳は、大型で三味胴張りの石室に長く「擬複室」的構造につくる羨道を付けるタイプで、明らかに8号墳の方が古式である。よって、名木野 8号墳は古い年代を採って6 C 初~前葉を中心とする時期、名木野 7号墳は6 C 前~中葉頃に築造されたものと考えられる。以上のことから、当11号墳出土土師器杯は、より名木野 7号墳例に近く、一応6 C 前葉~中頃の年代が考えられよう。しかし、石室形態に於いては、当11号墳は上述した、玄門袖石と羨道積石と

の関係等から、名木野古墳群中でも8号墳に最も近似した段階であり、年代もそう隔たるものではあるまい。

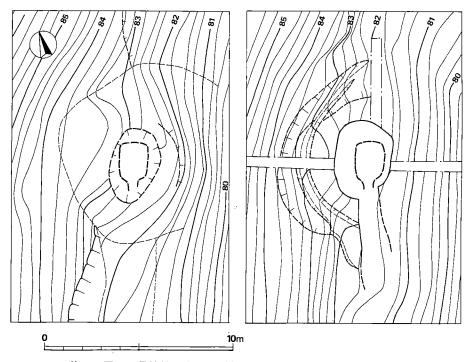
以上の諸検討から、11号墳は、10号墳に連続するような、6 C中頃を下らない、6 C前葉~中 葉期の築造と考えられる。 (中間)

# 11.12 号 墳

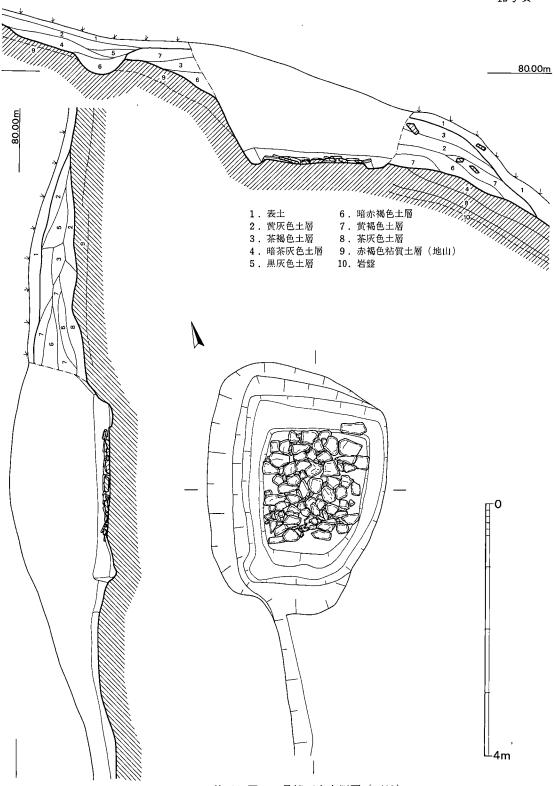
#### 墳丘 (図版40, 第80・81図)

12号墳は I 地区丘陵東斜面中腹の急傾斜面に孤立して所在し、標高79~84mの間に位置する 円墳である。調査前の墳丘規模は長径11m, 短径 9 mの楕円形を呈し、盛土は下位側へ大きく 流失している。墳丘頂部は盗掘のため大きく陥没し、また、当墳近くにて斜面が地滑りを起こ して崖面状をなし、とくに墓道付近で崩壊が著しい。

調査の結果、斜面高位側には墓道から玄室裏側まで延びる半弧状の周溝が巡らされ、左側壁裏付近で最も周溝底は高くなる。その部分での周溝幅は0.8m、深さ0.25mを測る。トレンチによる観察では、墳丘径は東西方向で約7.3mで、盛土は6層程の荒い積みがなされているが、石室掘方が深く掘られているため、築造当時の墳丘高はさほど高くなかったものと思われる。



第80図 12号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)

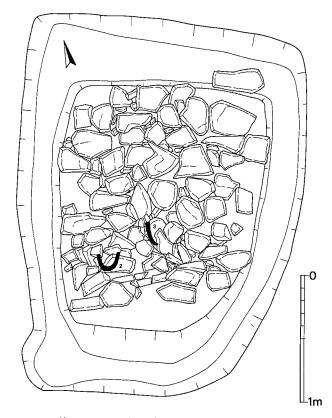


**第81 図** 12号墳石室実測図(1/60) - 87 -

#### 主体部(図版40,第81図)

12号墳の主体部は、主軸方 位をN17°Wにとる単式の横穴 式石室である。石室掘方は3. 5×2.5mの長方形状プランを 呈し、急斜面に掘られている ため左側壁で約1mの深さを 有するが、右側壁では0.1mほ どしかない。石室は盗掘が著 しく天井及び周壁の石材は全 て抜かれ, 玄室床面の敷石を 残すのみである。掘方底面周 縁は更に一段溝状に掘り下げ られているが, 奥壁及び両側 壁は板石が横長に据えられて いたものであろう。玄室の規 模は長さ1.9m, 奥壁側幅1.5 m, 玄門側幅1.3mを測り、梯 形を呈する。

羨道及び前庭部の石は完全 に抜かれているが、羨道部が



第 82 図 12号墳遺物出土状態実測図(1/30)

あったとしても短いものであったろう。羨道はやや東へカーブしながら斜面下位側へと延び, 玄室中心より3mの所にて強く東へ屈折する。また,墓道床面は玄室床面より高くなる部分が ある。

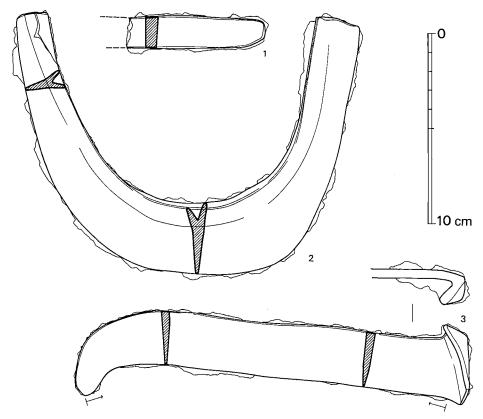
# 遺物出土状況 (図版41,82図)

周壁石材の徹底的な抜き取りにもかかわらず、玄室床面にて鉄鋤先1と鉄鎌1が、埋土からは鉄刀片が出土した。また、墓道床面からは土師器椀も出土している。 (新原)

# 出土遺物(図版41, 第83・84図)

鉄刀(第83図1)玄室内埋土より出土したもので、残存長7.3cm、幅1.7cm、厚さ0.7cmの、大刀の茎部分と思われる破片である。

鉄鋤先(第83図2)僅かに左右不均等な,U字形鋤先である。最大幅18.1cm,長さ13.8cmでや

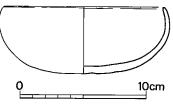


第 83 図 12号墳出土鉄器実測図 (1/2)

や大振りタイプである。Y字状断面をなし、柄等の木質の残存状況は銹著しく不明である。 鉄鎌(第83図3)全長20.8cm、最大幅3.0cmの、長く、先端部で丸く屈曲するタイプである。図 中矢印範囲内が刃部をなす。基部屈折部付近に柄の木質は

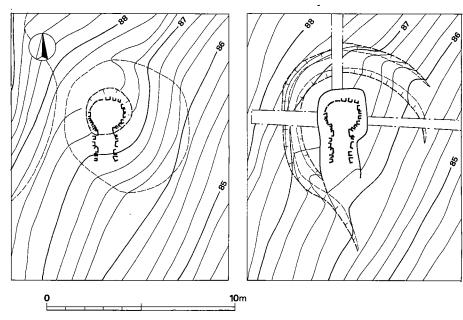
残らない。基部の状況から,柄と刃部は約110°の角度をなしたと考えられる。

土師器椀(第84図)墓道中出土品で、口径12.7cm、器高5.3cmを測り、口縁部が内湾するタイプである。胎土精良で焼成良く、淡橙色を呈し、全体に薄手精製であるが、内外面磨滅して調整は明確でない。底外面はやや凹凸があり、手持ちへラ削りの可能性がある。完形品。 (中間)



**第84 図** 12号墳出土土師器実測図 (1/3)

# 12.13 号 墳



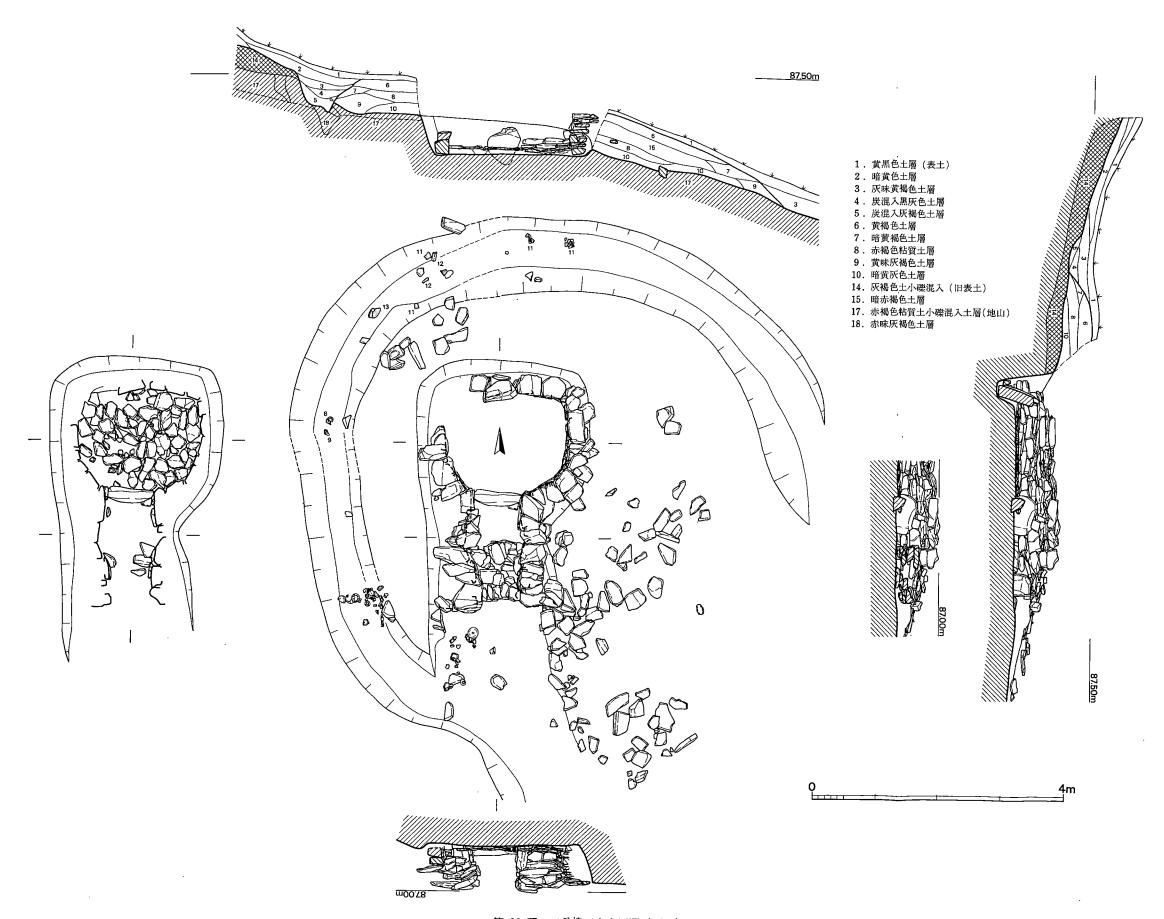
第 85 図 13号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)

### 墳丘(図版42・43, 第85図)

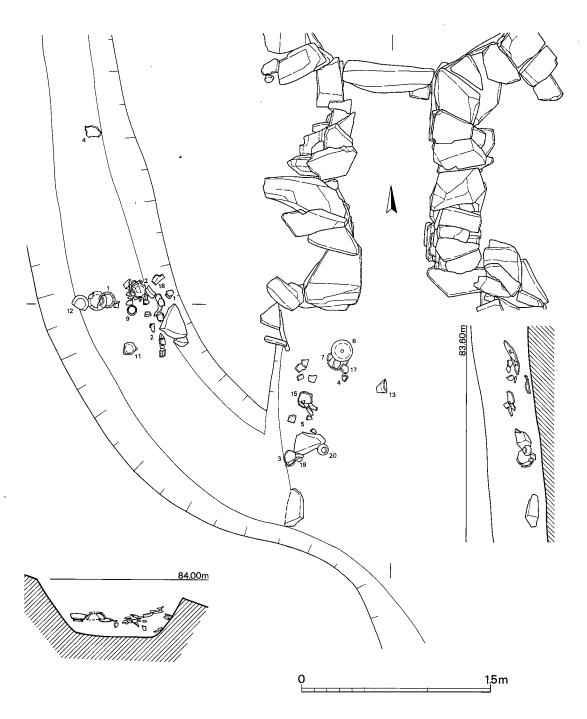
13号墳は、14~16号墳とともに丘陵尾根近くにて一群を構成するが、その中でも最も低所の標高86~87.5mの間に築かれた円墳である。調査前の墳丘規模は 7×6 mの楕円形を呈していたが、調査の結果斜面高位側に全周の¾ほど周溝が巡ることが確認され、築造当時の墳丘径は、東西方向の周溝内縁で7.1mの規模であることが判った。墳丘盛土は周溝掘削土を盛っただけの簡単なもので、盛土中のある時点に於いて、羨道部東側から墳丘中を周るように扁平な石が並べられ列石が築かれている。

### 主体部 (図版44·45, 第86図)

主体部は主軸方位をN1°Eにとり、ほぼ真南に開口する複室の横穴式石室である。石室は全長4.5m,幅2.7m,深さ0.6mの一辺が開口する長方形プランの掘方内に構築されているが、掘方は円形に巡る周溝の中心よりやや西寄りに掘られている。石室は盗掘のため玄室左側壁の大半と周壁の上半部を欠損するが、I地区丘陵上の古墳の中では比較的残存状況が良い方である。玄室は全長1.6m,奥壁側幅1.8m,最大幅は玄室中央で1.91m,玄門側で1.05mを測り、寸



第 86 図 13号墳石室実測図 (1/60)



**第 87 図** 13号墳遺物出土状態実測図 (1/30)

詰まりの胴張りプランを呈する。奥壁は主軸中心に高さ0.6m,幅0.5mの大石を縦長に据えて 鏡石とし、その両脇は基底部から板石を平積みして奥壁としている。両側壁もやはり基底部か ら板石の平積みであるが、奥壁側寄りの部分には、大きめの石材が使われている。玄門部の袖 石は大石を横長に据え、更に3~4段板石を平積みして側壁を造り出している。玄門幅は0.75 mで、底面には仕切石が据えられている。

前室は全長0.59m,最大幅1.0mと狭少で,前庭部との境には左右ともに立石を,石室内側に入り込んで縦長に据え,羨門とし,その幅は0.65mである。玄門と羨門の間は左右ともに板石を平積みして側壁を造り出し現存高0.7mを測る。羨道は長さ0.7m,幅0.6mと,前室の規模とあまり変わらず,前室と羨道とは一体化した構造をなすものと考えられる。即ち,玄室の縦長胴張りプランの崩れとともに,前室も意識としてはあるものの構造上では明らか退化現象として石室構築技法上に現れている。この前室の退化する段階の複室を一応「擬複室」と仮称するとして,柿原古墳群内での複室構造の変遷がたどられ,今後に残された問題点でもある。

また、羨道部には全長1.0mの長さで閉塞がなされ、玄門側と入口側両端は板石の平積みで、その間は土砂で充塡している。前庭部は全長約1m、羨門側幅は1.6mで墓道側へやや開く。前庭部側壁下半は掘方で、その上面には割石が一段平積みされている。

### 遺物出土状況 (図版45, 第86・87図)

当墳からの遺物は、墓道と周溝内に集中して出土している。墓道のものは左壁寄りにて出土し、周溝内出土のものはI区に集中している。 (新原)

### 出土遺物

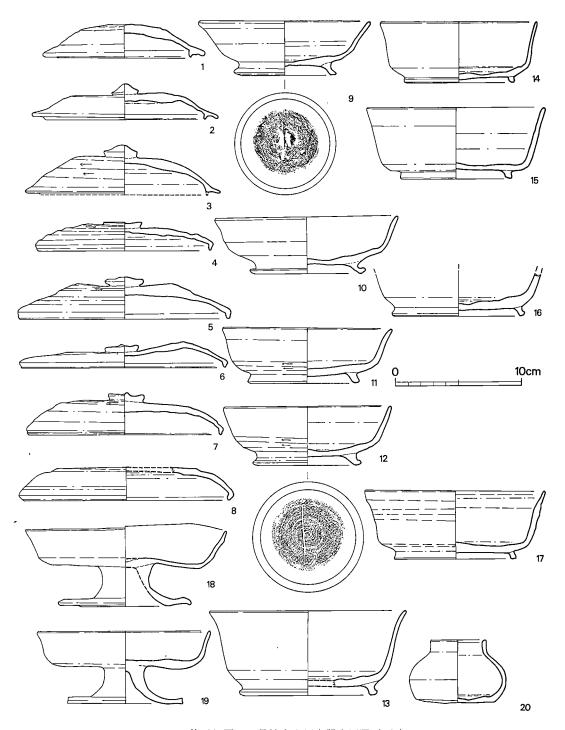
須恵器 (図版46·47, 第88図)

杯蓋 I a類 (1) I 区周溝内出土品で、口径10.6cm、器高2.7cmと、 I b 類よりも径が小さく、体部全体が丸く高まりをみせ、短い返りを有する類である。天井外面は回転へラ削りをみせ、焼成軟質で灰白色をなす。

杯蓋 I b類  $(2 \cdot 3)$  口径 $13.0 \sim 12.7$ cm,器高 $4.0 \sim 2.8$ cmで,小さな返りを有し,擬宝珠形撮を付ける類である。2 は I 区周溝内,3 は墓道中出土品である。3 は焼成甘く,淡褐~淡茶色を呈し,孰れも天井外面は回転へラ削りを施す。

杯蓋II類( $4\sim8$ )鳥嘴状口縁に扁平化した撮を付ける類で,大小2類ある。4は口径13.6cm の小類である。 $5\sim8$ は口径 $16.5\sim15.8$ cmで,5はやや軟質,6は焼き歪み著しい。7はやや軟質,8は軟質で黄灰色を呈する。 $4\cdot5$ は I 区周溝内, $6\sim8$ は墓道出土品である。

**杯身** I 類  $(9 \sim 12)$  口が大きく開き、体部下位で屈折して、やや長めの高台が外方へ踏ん張る類である。口径 $14.5 \sim 13.4$ cm、器高 $4.5 \sim 4.2$ cmを測る。 $9 \cdot 12$ は焼成やや軟質で、孰れも底外

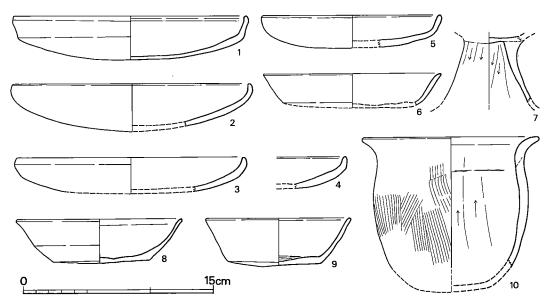


第 88 図 13号墳出土須恵器実測図(1/3)

面に1本直線のヘラ記号が施される。すべてI区周溝内の土器群1中より出土したものである。 杯身II類(13~17)体部が立ち上がり、深い器形となり、短く外方へ僅かに踏ん張り気味の高 台を付ける類である。口径で大中小類があり、孰れも墓道出土品である。13は高台が内端で接 地し、全体にやや古相を残し、焼成軟質で灰白色を呈する。15は焼き歪み著しく、高台は外端 で接地する。16も焼成軟質で灰白色をなす。

高杯(18・19)18は I 区周溝内土器群中のものと墓道埋土のものが接合したもので、口径16.0 cmの大型品である。19も I 区周溝と墓道のものが接合したもので、口径13.8cm、器高5.7cmを測る。孰れも杯部底外面は回転へラ削りを残す。

小坩 (20) 口径4.4cm, 器高4.9cm, 胴部最大径7.7cmを測る可愛いい稀品である。墓道出土品で,底外面は回転へラ削りが施され,黒灰色をなす。

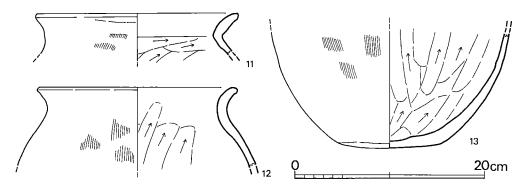


第 89 図 13号墳出土土師器実測図① (1/3)

土師器 (図版48, 第89・90図)

皿 (1~6)大小2類ある。1は口径18.3cm,器高3.4cmを測り、体部が屈折して口縁が直線的に開き、口唇内面に段をつくるタイプである。I区周溝内出土品で、底部外面はヘラ削りの上をナデている。2もI区周溝内出土品で、口縁が丸味をもって内湾気味に立ち上がるタイプで、口径18.7cmを測る。3・4は墓道出土品で、口縁部がやや厚く丸味を帯びるものとなる。5は小径化したもので、墓道出土品。口径14.2cmを測り、端部は丸くおさめる。6は墓道埋土出土品で、復原口径13.9cmで、II区周溝出土杯と同じ8C末~9C初の所産である。

高杯(7)Ⅳ区表土出土品で,脚外面は縦位へラ削りが施される。胎土精良で淡褐色をなす。



第 90 図 13号墳出土土師器実測図② (1/4)

**杯** (8・9) II 区周溝出土品で、孰れも底部へラ切りの類である。8 は口径12.9cm、器高3.5 cm, 底径7.7cmを測る。9 は口径11.4cm、器高3.9cm, 底径7.4cmを測る。孰れも8 C末~9 C初期の所産であろう。

**小型甕** (10) I 区前面の墓道と周溝の境目辺りで出土したもので、口径14.0cmの小類である。 外面は縦位の粗いハケ、内面はヘラ削りの上をナデる。

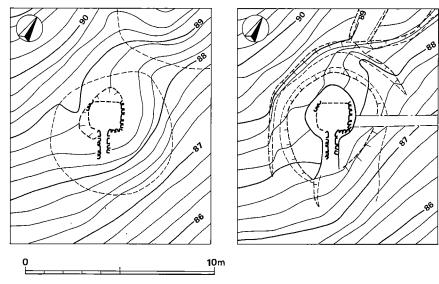
甕(11~13)11は、Ⅱ・Ⅲ区周溝内出土品が接合したもので、頸内面に明瞭な稜をつくる。胴外面にはハケ、内面はヘラ削りが施される。12はⅡ区周溝内出土品とⅢ区墳丘表土出土品が接合したもので、胴内面へラ削り、外面には粗いハケが施される。13は、I区周溝内出土品とⅡ区周溝内出土のものとが接合したもので、レンズ状の平底をなす類である。内面はヘラ削り上げ、外面上半は僅かにハケが残る。以上の土師器甕は周溝内のかなりの範囲に散乱した状態で、意図的に破砕・散撤されたものと考えられる。

以上の出土土器の年代をみてみると、須恵器杯蓋・高台付杯身 I 類が 7 C後葉の時期に、同 II 類が 8 C前葉にかかる時期までの間に比定できる。土師器皿も大口径で、周溝内出土の1・2 は古い様相を有し、小径の5 などは新しく、各々上記 2 時期に対応するものである。周溝内出土の甕も、未だ胴が張り、8 Cまでは下降しないタイプである。以上の 2 時期の他に、土師皿 6 や杯 8・9 のように 8 C末~9 C 初期のものが若干みられ、少なくとも都合 3 回の埋葬が行なわれたと考えられる。 (中間)

# 13.14 号 墳

墳丘 (図版49, 第91図)

14号墳は、13~16号墳とともに一群を形成しており、丘陵尾根上よりやや下の、標高87m~89



第 91 図 14号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)

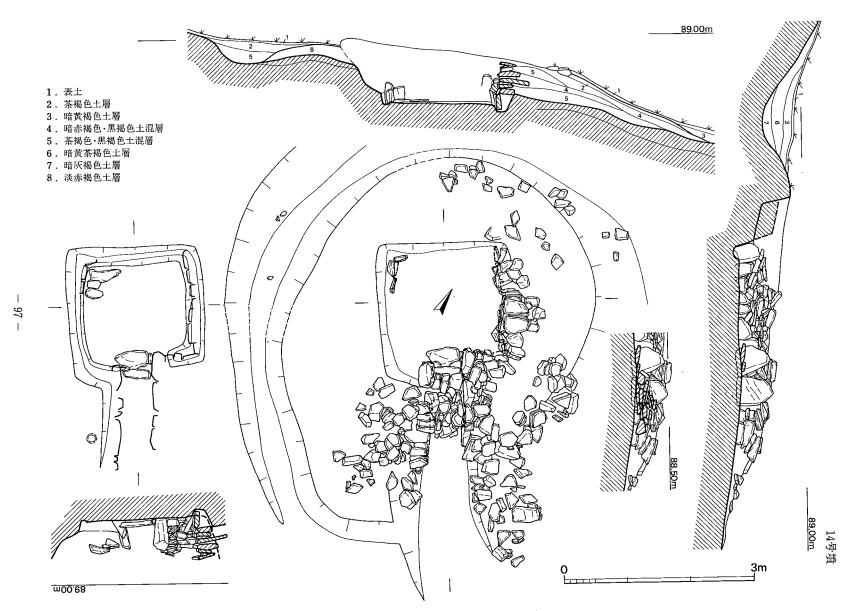
mの間に築かれた円墳である。調査前の観察による墳丘は径6.5mで、墳丘高も僅かに認められた程度である。墳丘頂部は陥没していた。

古墳は、斜面高位側を半弧状に削って周溝を造り出し、玄室左側壁奥壁コーナー部裏付近で最も高くなる。トレンチによる観察では、墳丘径は東西間で約6.0mを測る。墳丘は周溝掘削土を単純に盛り上げたもので、現状最厚部で0.6mしかない。墳丘下の地山整形面では、羨道部入口付近から墳丘内へ内護列石が張り出し、とくに東側のものは玄室奥壁裏まで続いている。なお、14号墳の周溝は、当墳の北に隣接する15号墳の墓道を切って造られている。

#### 主体部(図版50・51, 第92図)

当墳の主体部は単室の横穴式石室で、主軸方位はN32°Wをとり、ほぼ南東方向に開口する。石室は2.1m四方の掘方内に築かれているが、破壊が著しく、玄室の右側壁から袖石にかけての周壁を残すのみである。床面敷石も、玄門付近と玄室北西コーナー部に数個残存するのみであるが、玄室は掘方基底面の規模からすると、玄室全長約1.65m、奥壁側幅1.5m、最大幅は玄室中央で1.7m、玄門側幅は1.5mで、中膨らみの方形を呈する。掘方底面周縁部は溝状に更に一段掘られ、この内に周壁の基底部となる板石が縦長に据えられている。右側壁では、腰石から上の積みは板石の平積みであるが、孰れも水平に構架されておらず、稚拙な技法である。

羨道部は玄室に比べ残存状況がよく,長さ1.65m~1.55m,幅0.5mと,長さは左右多少くい違って造られている。両側壁は玄門袖石も含めて各々2枚の立石で構成され、その間を小石で埋めている。袖石間には仕切石がみられ、そこから入口側にかけて1mの長さにわたって割石



第 92 図 14号墳石室実測図 (1/60)

を7~8段平積みして閉塞石としている。

### 遺物出土状況

14号墳からの出土遺物は、I区羨道部裏側の地山直上に於いて、供献土器と思われる土師器皿1と、II・III区周溝内より土師器片が、I区墳丘裾表面に於いて須恵器片が出土したのみで、石室内からの出土はない。 (新原)

#### 出土遺物(図版51, 第93図)

土師器皿 I 区墳丘下の供献土器である。口径16.0 cm, 器高3.0cmで, 口唇部は尖り, 底部からやや強く 屈曲して立ち上がり, 僅かに内湾気味を呈する。胎土精良で焼成良好, 茶褐色をなす。内外面磨滅して調整不明。殆んど完形に近い。



第 93 図 14号墳出土土師器実測図(1/3)

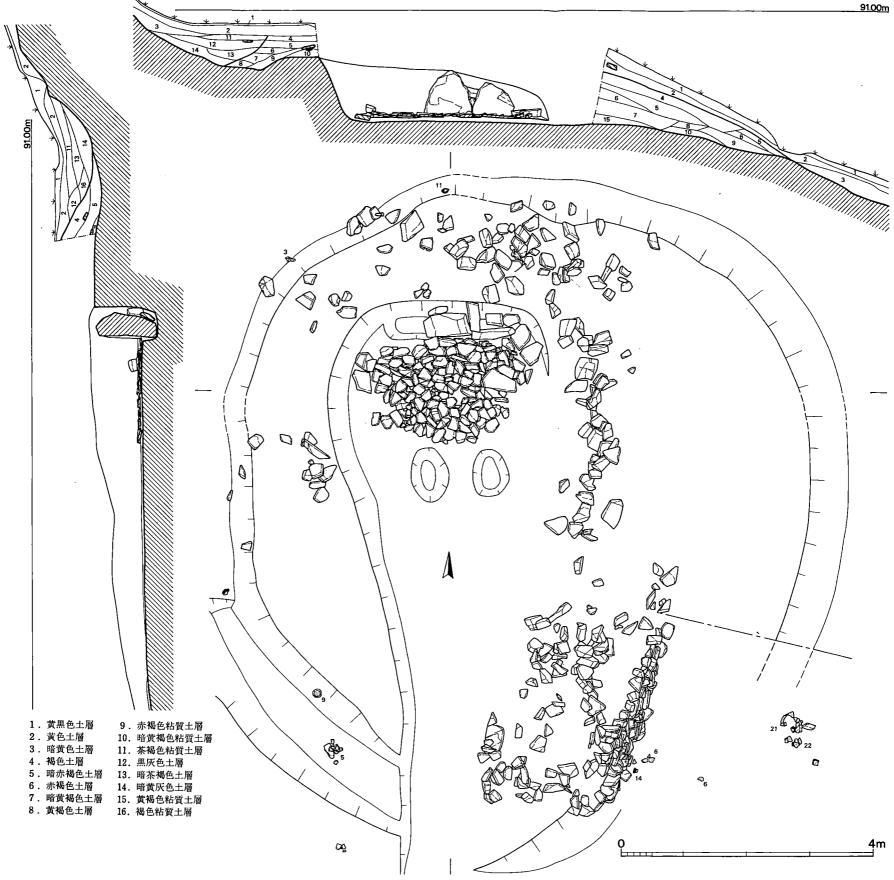
この皿は、7℃後葉的な諸相を良く残しており、その年代が妥当とされよう。 (中間)

# 14.15 号 墳

#### 墳丘 (図版52・53, 第94~96図)

15号墳は、13~16号墳と一群を形成し、標高88~92mの高さに位置した円墳である。調査前の墳丘は頂部が大きく陥没しており、大規模な盗掘が予想された。調査の結果、やはり、石室の残存状況は惨憺たるものであった。当墳も他の古墳と同様斜面高位側に周溝を、半弧状に巡らしているが、急斜面に掘られているためそう深くはない。トレンチによる観察では、東西方向の墳丘径は約9mで、墳丘高は東側裾部から見上げると2mほどになり、I地区丘陵上の古墳では最も大きい墳丘をもった古墳といえる。墳丘下では玄室の東側を周る「列石」と、前庭部東端からN区墳丘下へ続く「内護積石」が確認された。この列石は盛土中に巡らされたもので、前室の裏側付近から玄室を囲繞するように延びているが、玄室奥壁裏や左側壁裏では相当乱れている。「内護積石」は斜面下方側にのみなされ、しかも基底部は地山面上に、上端は羨道部床面の高さまで積まれているところから、この内護積石は斜面下方にあたる羨道部を安定させるために構築されたものと考えられる。積石は片岩の割石を、基底部には大きめのものを据え、上段には小振りの割石を5~6段積みし、高い所で0.8mの高さに積んでいる。

# 主体部(図版54,第94図)

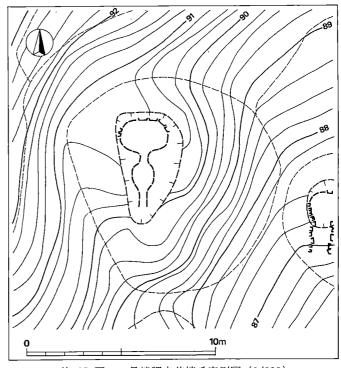


第 94 図 15号墳石室実測図 (1/60)

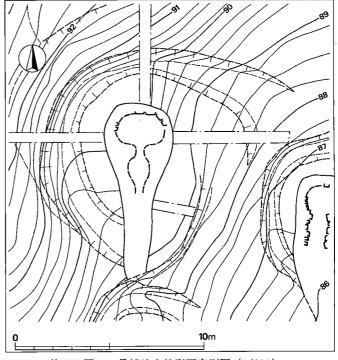
前述したように、当墳の主体部は残存状況が悪いため明確には言い難いが、複室の横穴式石室であると考えられる。石室掘方は斜面高位側は1mほど掘り下げているが、下位側ではみられず、斜面側のみ掘ったものと思われる。

石室は玄室奥壁と側壁の一 部と、床面敷石を半分ほど残 すのみで, それ以外の石材は 完全に抜き取られている。奥 壁は2枚の腰石が残っている が、当初は3枚あったものと 思われ, 中央の鏡石となるも のには大石を使用している。 側壁は, 奥壁側のものが基底 部のみ左右とも2個づつ残存 し、割石の平積みである。ま た,床面敷石は周壁に比べ残 りが良く、割石を主として奥 壁側は横長に, 玄門側は縦長 に敷き詰めている。これら僅 かな形跡をたよりに玄室規模 を復原すると,全長1.8m,奥 壁側幅1.8m,最大幅は中央で 2.6m, 玄門側幅1.2mで, 横 長の胴張りプランをなすもの と考えられ, ほぼ真南に開口 する。

前室, 羨道部の形跡はないが, 奥壁より7.3mほど開口部寄りの東側で, 当古墳群では



第 95 図 15号墳調査前墳丘実測図 (1/200)



第 96 図 15号墳地山整形面実測図(1/200)

通有の石組が直角に曲がる前庭部の東コーナー部分が遺存しており、とすれば石室全長からして複室の石室が想定されよう。また、前室及び羨道付近から東墳丘内へ続く列石があり、これは複室であることを裏付けるものであろう。周溝外へ延びる墓道は14号墳周溝により切られている。

#### 遺物出土状況

石室の遺存度に比し遺物は比較的出土し、玄室内床面奥壁寄り左側壁前にて、鉄刀子1が出土した。また、I・II区周溝内からは、須恵器平瓶や土師器杯・皿などが、IV区内護積石前面からは、祭祀に使用したものと思われる土師器椀や高杯、それに甑などが出土した。孰れも土師器類ばかりで、甑の出土とともに興味深い。 (新原)

#### 出土遺物(図版55, 第97~99図)

鉄刀子 (第97図) 玄室内床面出土品で, 現存長6.0cm, 現存幅1. 3cmのやや細身のタイプである。



#### 須恵器 (第98図)

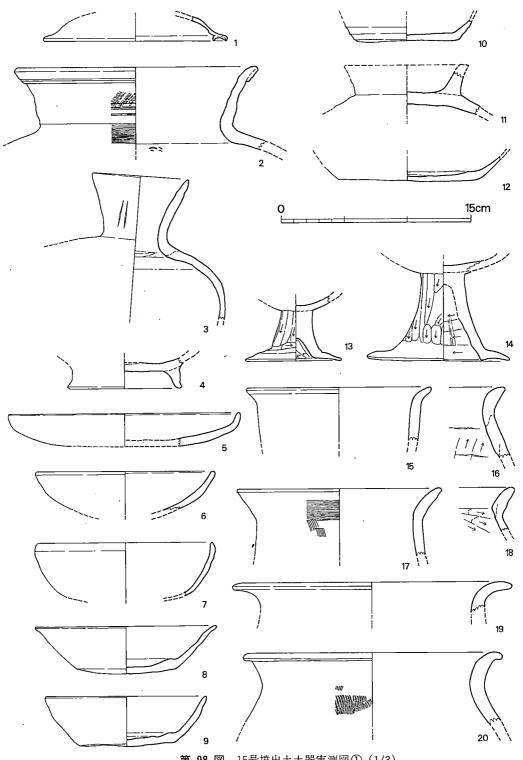
杯蓋(1)Ⅳ区墳丘裾表土下出土品で、復原口径12.6cm、小さな返りを付けるタイプである。天井外面はナデツケの可能性が大きい。

**第 97 図** 15号墳出土鉄器 実測図 (1/2)

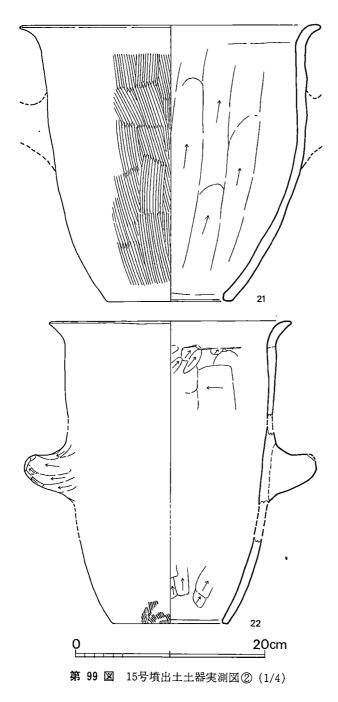
- 平瓶(3) II 区周溝内出土品で、口径7.7cmを測る。やや小ぶりのタイプで、焼成堅緻で、外面 黒色、内面は淡灰色をなす。頸部外面に2本、平行線のヘラ記号がみられる。
- 壺(2)II区周溝埋土(上位)出土のもので,頸部外面には3本沈線が施され,その周辺には 斜位の平行叩目がかすかに残る。胴部外面はカキ目,内面には青海波がみられる。

土師器 (第98・99図)

- 高台付杯(4)Aトレンチ溝内出土品で、高台径9.0cmを測る。外底面中央部はヘラ切りのままで、他面は横ナデ、内底面はナデツケがみられる。
- 皿(5) I 区周溝内出土品で、復原口径18.4cmを測る大形タイプである。器表磨滅して調整不明。
- 椀(6・7)6はIV区積石前面旧表土中出土のもので、復原口径14.2cmとなる皿とも椀ともつかぬ器形である。7は玄室内床面直上出土品で、復原口径13.9cmを測る。内湾気味の体部をなす深い器形である。内外面ともに横ナデを施す。
- 杯(8~10·12)8は周溝内出土品で、底面へラ切り離し、口縁部が僅かに外反するタイプである。9はI区周溝内出土品で、口径12.8cm、器高4.0cm、底径7.4cmを測る。底外面はヘラ切りの上に板目圧痕がみられる。口縁内面の一部に油煙がこびりつく。10はI区周溝内出土品で、底径8.0cm、底部へラ切り離しの類である。内面一部に油煙の付着が認められる。以上の8~10



第 98 図 15号墳出土土器実測図① (1/3) - 101 -



は8 C末~9 C初期の所産である。 12は底部のみで大型の杯とも皿と もつかぬ類である。Aトレンチ周 溝内出土品で、底外面はヘラ切り 離し、底内面にはナデツケがみら れる。

蓋(11) II区周溝内出土品で、厚 手の輪状撮部を付ける類である。 外面中心部は回転へラ削りが残り、 胎土精良で、明茶褐色を呈する。 高杯(13・14) 13は I 区墳丘内出 土品で、脚端径7.6cm、脚部高4.0 cmの小型品である。脚柱内面は回 転方向のへラ削り、外面は縦位へ ラ削りが施される。14は IV 区積石 前面出土品で、脚端径11.3cmを測 る。脚柱内面は横方向へのへラ削 り、外面は雑な縦位へラ削りを施 す。

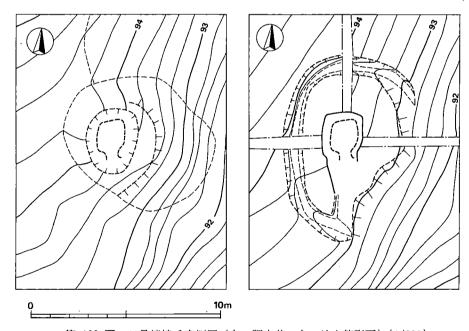
甕(15~20)15はⅣ区墳丘裾表土 下出土品で、復原口径14.6cmの小型甕である。16もⅣ区墳裾表土出 土品で、やや胴が張り、内面へラ 削り、外面には雑なハケがみられ る。17は墓道埋土出土品で、胴外 面には縦ハケが施される。18は北 側斜面表土中出土品で、外面には 粗い縦ハケ、内面はへラ削りがみ られる。外面に煤がこびりつく。 19はⅣ区墳丘表土下出土品で、大 きく外反する口縁につくる。20は

Ⅲ区外斜面表土層出土品で、復原口径20.5cmを測る。口頸部が丸く屈曲して開き、胴外面にはハケがみられる。

甑 (21・22) 21は N 区積石前面旧地表上出土品で、口径31.8cm、器高29.2cm、底径13.1cmを測る。胴部外面は粗いやや雑な縦ハケ、内面は縦へラ削り上げ、口頸部内外と底孔部内外縁は横ナデを施す。頸内面の稜線は部分的につく。22は、21と同じ位置のN 区列石前面出土品で、上中下各部片を図上で並べたものである。把手部分はもっと上位にくるかもしれない。胴外面はハケ、内面はヘラ削り上げ、底部孔の下端面と内側面はヘラ切りで面取り状をなす。把手外面はヘラ削り様の調整がみられる。

以上の出土遺物は、須恵器杯蓋が7C後葉で、あまり肥厚しない口縁の甕・甑・小甕や土師器高杯など7C後葉の特徴を良く示している。また、土師器杯は8C末~9C初の年代を示し、13号墳例と同様に、この頃までの当古墳の使用が考えられる処である。 (中間)

# 15.16 号 墳



第 100 図 16号墳墳丘実測図(左:調査前,右:地山整形面)(1/200)

当地区に於いて古墳は、谷の緩斜面に位置するものと、丘陵の急斜面に位置するものがある。本古墳は後者であり、丘陵東側の斜面に横穴式石室が9基存する。本古墳は、斜面に東西に並ぶ群のうち西端、或いは最頂部で丘陵尾根線やや東寄りの斜面に位置する。標高92.5~94mに築く。

見かけの高さを0.5m程有し、墳中央に南北3.5m、東西3.0m程の盗掘穴が存しており、古墳であると判断できた。また、地形の変換により南北に7m、東西は東側への急傾斜によりだらけているが8m程であることが推察され、調査当初本古墳が円墳であると推定した。

#### 墳丘 (第100・101図)

墳丘築造に際して、基礎作業である地山整形が行われる。本古墳に於ける地山整形は、墳丘築造当時の地表面を均す程度である。墳丘断面の土層観察による墳丘高は20~40cmを示す。また、盛土内に礫石を多く含み、III区に石列らしきものが積み石状を成している。しかし、本古墳の位置する地形は丘陵の斜面であり、III区は墳の下位方向に位置し、上位方向の I・II区には、石列は痕跡すらない。そして礫石は、当古墳の位置する地下、数10cm程に岩盤があり、石室の墓址や周溝を穿つことにより、それらを産することが出来る。これらにより、III区の石積みは、列石の築造を意図したものではなく、無意識に盛土として積まれたものと考える。また周溝については、Aトレンチの断面土層観察によると、周溝内の堆積土上端が、外側で旧地表面で、内側では盛土である暗黄褐色土層(8)の上面となる。この事により周溝は、墳丘築造後に画されたと考えられる。

墳丘の規模は、南北に9.8m、東西に7.0mを測り、やや南北に長い長円形墳である。

# 主体部 (図版56, 第101図)

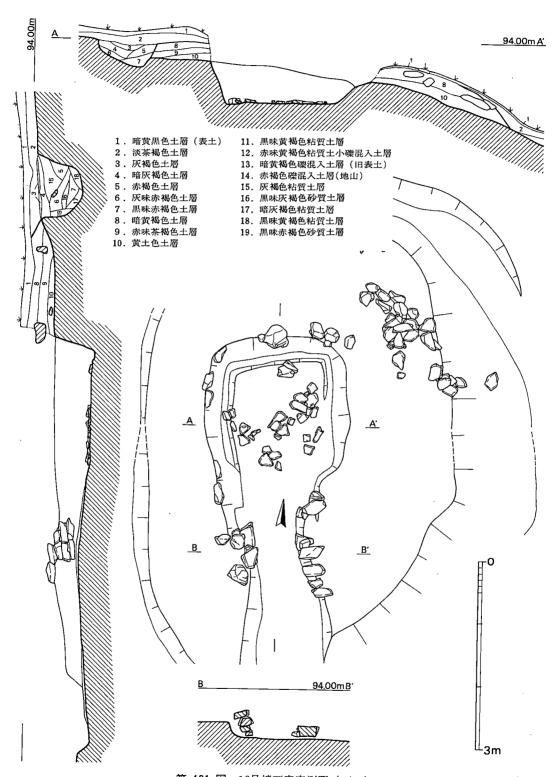
主体部は残存状態が非常に悪く、玄室床面に散点する石が敷石であることを知り得るのみで、玄室内に他の施設は残片すら見られない。また、主体前方部には、左右に若干の石積みや石列が残り、左側では3~4段の積みがある。これらの石が床面から若干浮いているのが疑問ではあるが、これが羨道の残片であると推定する。

掘り方は、南北2.4m、東西2.3mの方形を呈し、小礫が混在する暗黄褐色土層(旧表土面)より40~60cm程掘り込まれている。また、墓址の底端に深さ5~10cmで、溝状の穴が巡り、壁面基底部の石が据えられていた事を物語っている。この溝状の穴により、本石室が1.7m×1.4mの方形を呈すると推定する。また、玄室から墓道にかけて床面に変化が見られ、玄室から羨道部にかけてやや高くなり、羨道前面で頂に達し、墓道へ下降している。

この様な状況から、本主体について推定される事は、本主体部が玄室方形を呈する横穴式石室で、玄室から羨道部の掘り方により単室であるという事である。石室の構造は、他の古墳と同様に板石平積みによる構築であろう。

# 遺物出土状況

本古墳は、前述の如く石室の残存状態が悪く、石室内出土の遺物は皆無である。しかし、墳 丘及び周溝に若干の出土遺物が見られる。墳丘では、I区墳丘裾で須恵器小片と耳皿が出土し、

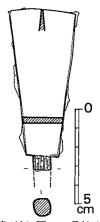


第 101 図 16号墳石室実測図 (1/60) - 105 -

II区は土師器杯、III区では須恵器皿が出土した。また周溝からは鉄鏃・須恵器杯が出土した。この中で、本古墳に伴うと考えられるものは、II区盛土内出土の土師器杯2点である。双方共、やや上位ではあるが暗黄褐色土層(8)に包含されていた。他の遺物は全て、この層より上から出土したものである。また、周溝出土の鉄鏃と須恵器皿は、周溝内堆積土の上位から出土した。

### 出土遺物 (図版56, 第102・103図)

鉄鏃 方頭広根斧箭式鏃であり、茎を欠損している。身の長さ7.6cm、鋒部幅3.5cmを測る。周溝出土。



第 102 図 16号墳出

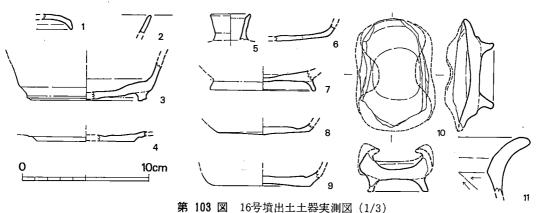
**須恵器杯蓋**(1)1は杯蓋口縁部の小片である。焼成良好で緑味灰色を呈 土鉄器実測図 (1/2)す。胎土にやや白色砂粒が目につく。I区墳丘中出土。

**須恵器杯身**(2・3)2・3は杯身である。2は極小片である為確かではない。残部は全て回転ナデ調整を施す。胎土・焼成共に良。緑味灰色を呈する。3は体部から底部の約½程の破片である。低く安定した高台がつく。体部はやや外傾して立つ。内面回転ナデの後,底部中央にナデツケ、外面体部回転ナデ、底部はナデツケを施す。胎土にやや白色砂粒が目立つ。焼成良好で灰色黄緑色を呈す。復原底径9.4cmである。I 区墳丘中出土。

**須恵器小皿**(4)小片であるが、須恵器の小皿であろう。復原底径7.6cmを測る。内面ナデ、外面体部ナデ、底部へラ切りである。胎土、焼成共に良。色調は内面灰味黄緑色、外面緑味灰色を呈す、Ⅲ区墳丘上面出土である。

土師器蓋 (5) 5 は蓋の撮の部分である。胎土, 焼成共に良であり, 薄茶を呈す。やや手捏ね的である。 I 区墳丘中出土。

**土師器杯身**(6~9)孰れも破片であり器表面の磨滅も著しい。6は胎土良好であるが、焼きがあまく内面は著しい磨滅により調整不明である。外面は体部から底部にかけてナデが施され、



10万項山工工研天側因(1/3

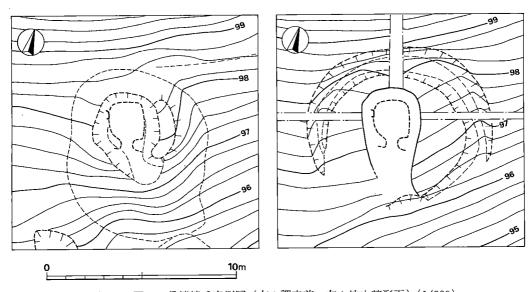
底部中ほどに板目が見られる。薄茶を呈す。墳丘上面出土。7は底部のみ存し、外反し、細い高台が付く。底径8.2cmを測る。胎土、焼成良。明るい茶色を呈す。調整は不明瞭であるがナデ調整であろう。8は底部%の小片である。底部へラ切りで、他はナデが施される。胎土、焼成良。薄茶色を呈す。9も底部のみ存し、内面体部と底部の境に明瞭な沈線が巡る。体部内外面共にナデ、内底面ナデツケ、外面底部は不明瞭ではあるがナデツケを施している様である。

**土師器耳皿**(10)胎土精良にして焼成良である。淡茶褐色を呈す。全面に横ナデが施される様である。全体に雑なつくりである。墳丘上面出土。

土師器甕 (11) 11は甕の小片である。薄茶色を呈し、胎土、焼成共に良である。内面頸部に稜を有し、頸部から大きく外反する口縁となる。内面体部へラケズリ、口縁部は内外面共に回転ナデを施す。

以上の遺物は、孰れも確実な副葬・供献品としての出土状況をみせないが、1~4の須恵器類は8 C代で、1の蓋は9 Cに降る可能性もある。土師器の7~9は8 C末~9 C初、耳皿は平安期となる。本16号墳初築は、隣接する他の古墳同様に7 C後葉前後で、上記遺物がその後の追葬年代を示すものであろう。

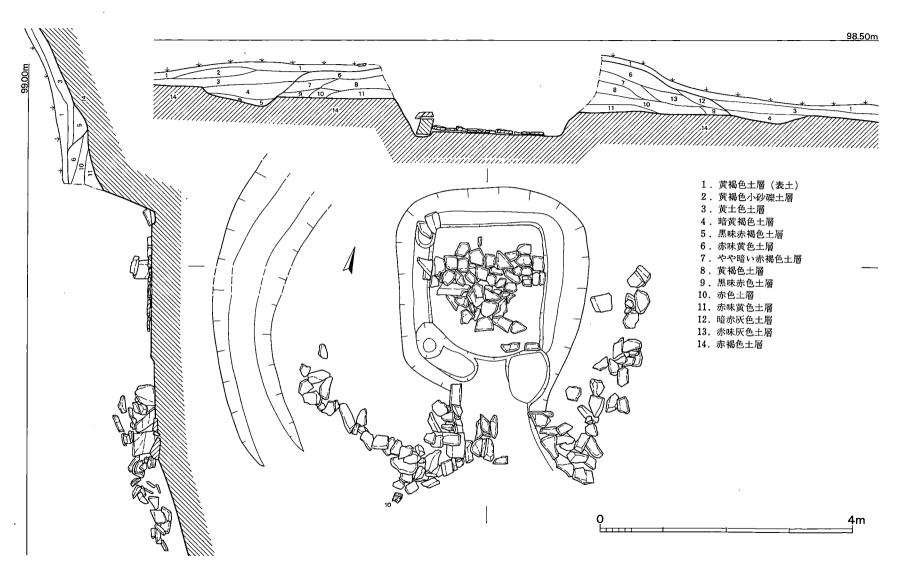
# 16.17 号 墳



第 104 図 17号墳墳丘実測図(左:調査前、右:地山整形面)(1/200)

增丘(図版57·58, 第104·105図)

17号墳は、18号墳とともに I 地区古墳群中最も高所に築かれた古墳で、標高96~98mの位置



第 105 図 17号墳石室実測図 (1/60)

に存在する。調査前の墳丘規模は9.7×7.8mで、頂部は陥没していた。発掘の結果、斜面高位側には半弧状に周溝が巡らされていることが判明し、周溝底は玄室奥壁裏付近が最も高く、その部分で周溝幅0.7m、深さ0.3mを測る。トレンチ観察による墳丘規模は、周溝下端内底からすると東西方向で約7.5mの円墳となり、盛土は厚い所で0.8mしかなく、低墳丘であったろう。

### 主体部(図版58,第105図)

当墳の主体部は単室の横穴式石室で、主軸方位はN17°Wにとり、南東へ開口している。石室の掘方は、地山を0.5~0.7m掘り下げた隅丸方形プランを呈し、玄室周壁基底部は更に一段掘りくぼめられている。

玄室の残存状況は悪いが、全長2.05m、奥壁側幅1.75m、玄門側幅1.6mの長方形プランをなす。周壁は左側壁の一部を残すのみであるが、それによると基底部には板石を1枚縦長に据え、その上は板石の平積みがなされている。床面敷石も中央部のみ残存している。

玄門の袖石は抜かれて、掘り方を残すのみで、全長約1.5mの短い羨道部が付く。羨道左側壁は3枚の板石が縦長に据えられ、現状では、その上に割石が1~2段平積みされているが、右側壁は抜かれている。羨道入口床面には閉塞石の基底部が残存している。また、羨道入口両端には、前庭部をつくる側壁と墳丘内部へ延びる内護列石が取り付いている。

遺物はI区墳丘裾付近や前庭部、墓道などから出土しているがまとまりはない。また、古墳南前面にて須恵器や土師器が採集されているが、これは後述するように当墳に伴うものではなく、土址D-6に伴うものである。土器実測図番号では4・7・8のものがこれにあたる。

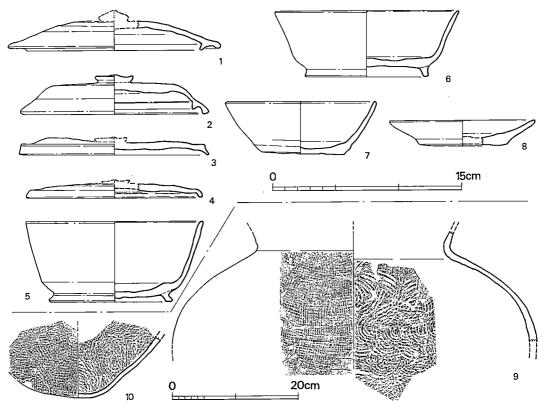
(新原)

### 出土遺物

須恵器 (図版59, 第106図)

杯蓋(1~4)口縁内面に返りを残すもの(1・2)と、シャープな鳥嘴状口縁となるもの(3)、丸味を帯びた小さな鳥嘴状口縁となるもの(4)などがある。1・2はI区墳裾表土出土品で、天井外面は回転へラ削りを施す。3は南前面土坑内・前面表土出土品で、天井外面は回転へラ削りを施す。口縁上下端はかなりシャープである。4はII区墳裾表土出土品で、口径13.9cmを測る。天井外面は回転へラ削りを施す。

高台付杯身(5・6) 5 は墓道埋土・南前面土坂内出土品で、口径14.0cm、器高6.3cm、高台径9.7cmを測る。高台は外方へ強く踏ん張るが、深い器形となっている。 6 は前面表土・前面土坂内出土品である。口径14.6cm、器高5.2cm、高台径9.8cmを測る。体部のやや開く器形となる。 空(9・10) 9 は前庭部・ I 区盛土内・前面土坂内の各破片が接合されたものである。やや肩の張る器形をなし、胴部外面は格子目に近い条蓆状叩目の上にカキ目、内面は大きい青海波を



第 106 図 17号墳出土土器実測図 (1/3·1/6)

施す。10は I 区列石前面・ I 区盛土内・西集石遺構中の各片が接合されたもので、外面は条席 状叩目の上にカキ目を施す。内面は青海波が密にみられる。

#### 土師器 (第106図)

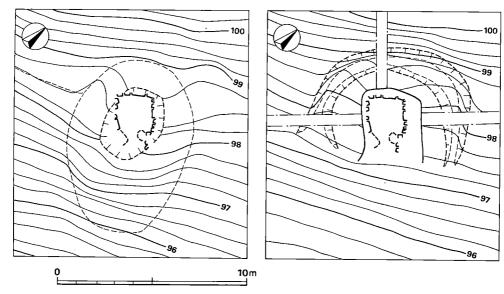
杯 (7) 前面の表土中出土品で、底部ヘラ切り離し、口径11.9cm、器高4.1cm、底径6.6cmを測る。体部最下端にはヘラ削りが残る。

小皿(8)前面の表土中出土品で、底部糸切りかと思われる。復原口径11.6cm、器高2.0cm、底径7.0cmを測る。

以上の出土遺物は、須恵器杯蓋1・2と、杯身5・6が7C後葉でも末に近い時期を示し、蓋4などは8C末前後となろう。また、土師器杯7は8C末~9C初前後、8は鎌倉期以降の所産であろう。

この17号墳は、床面の平面形がほぼ正方形を呈し、後述する類別の™類である。 (中間)

# 17.18 号 墳



第 107 図 18号墳墳丘実測図 (左:調査前,右:地山整形面) (1/200)

### 增丘(図版60,第107·108図)

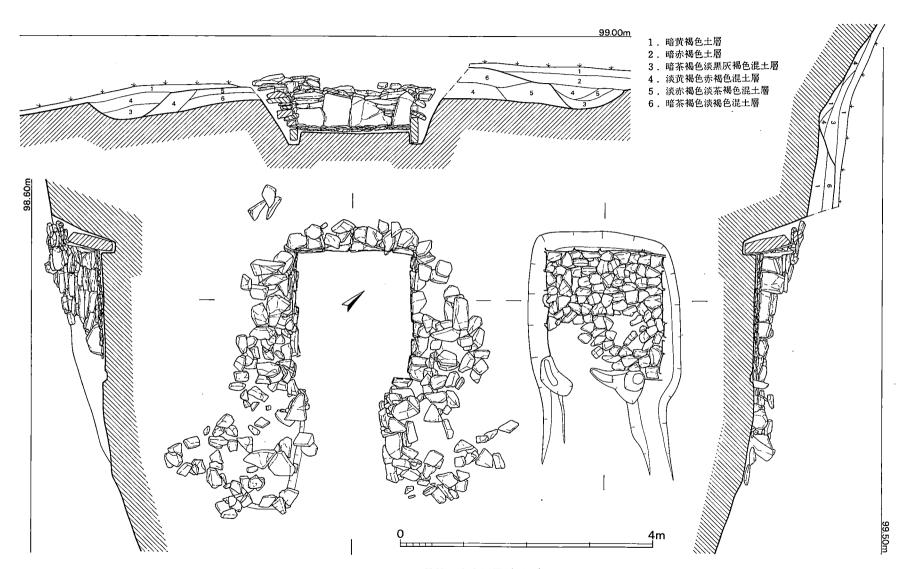
18号墳は17号墳と対をなすように、その東側に築かれた円墳で、標高96~99mの間に位置している。調査前の墳丘は頂部に陥没拡がみられ、墳丘は南東側へ大きく流れていた。

当墳も他の古墳と同様に、斜面高位側に半弧状の周溝を設けており、その底面は玄室奥壁裏付近が最も高く、その部分で溝幅1.35m、深さ0.3mを測る。周溝両端は前庭部両端から左右に延びた内護列石付近まで掘られている。トレンチの観察による墳丘規模は、周溝下端内底からすると東西方向で約6.9mとなり、盛土は残りの良い所で0.5mと低い。盛土は雑な積みである。

### 主体部 (図版60·61, 第108図)

主体部は単室の横穴式石室で、主軸方位はN48\*Wをとり、I地区丘陵上に所在する9基の古墳のうち最も東へ偏して開口している。石室の掘方は、一方を開口するほぼ長方形で、最深部は0.8mほど掘られ、玄室基底面の周縁部では更に0.2mほど深くなる。

玄室は全長2m,幅は奥壁側が最大で1.85m,玄門側幅は1.7mの平面長方形をなし、17号墳の玄室規模とほぼ一致する。奥壁は比較的残りが良く、腰石は4枚の板石で構成されているが上端が不揃いで、間隙を小割石で充填している。両側壁も他に比し残りが良く、右側壁では、基底部には板石を横長に据えて腰石としているが、奥壁寄りの2枚は縦長に使用している。腰石の上部は板石が平積みされる。左側壁も右側壁とほぼ同様な石積み構成であるが、上部の側



第 108 図 18号墳石室実測図 (1/60)

壁には大きめの石材が使用されている。玄室床面には敷石が良く残り、主として割石を横長に 敷いているが側壁前面では縦長に使っている。

羨道部両脇の玄門袖石は抜かれているが、全長1.1m、幅1mを測る。羨道部左側壁の石材も 抜かれているが、右側壁では板石を縦長に埋め込んだ基底部が残り、その上に板石を平積みしている。前庭部入口両端から列石がそれぞれ両脇へ延びており、周溝付近まで続いている。

以上,当18号墳横穴式石室の規模・構築状況は17号墳とほぼ同じであり,同一工人の所産によるものであろう。

出土遺物としては、玄室内埋土中と墳丘内 I 区地山面に於いて須恵器片が数点出土したのみである。 (新原)



### 出土遺物

須恵器 (第109図)

杯蓋(1)玄室埋土中出土品で,復原口径14.3cmを測る。天井外面は回転へラ削りを施し,口唇端はややシャープに尖る。焼成堅緻で淡青灰色を呈する。

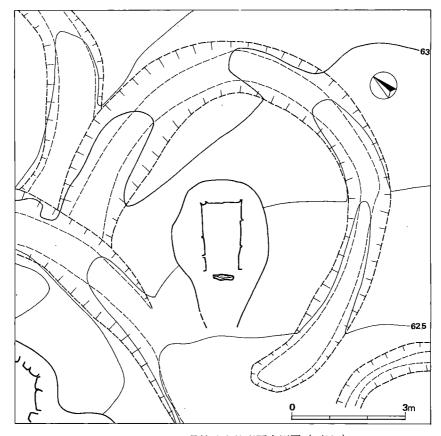
高台付杯身(2・3) I 区墳丘内出土品で、復原口径13.0cm、器高4.7cm、高台径8.5cmを測る。高台は低いが外方へやや踏ん張り、体部下半で屈折気味となる。焼成堅緻で内面淡青灰色、外面は淡灰色をなす。 3 は I 区表土中出土品で、直線的に立ち上がる口縁でやや深めの器形となろう。薄手で、推定口径12.8cm程となり、焼成堅緻で内面淡青灰色、外面は青灰色を呈する。以上の18号墳出土土器は、7 C 後葉代のうちでも末葉に近い特徴を良く示している。(中間)

# 18.19 号 墳

I地区谷間部にあり、標高62~62.5mの間に位置している。当墳は樹木伐採後の観察では墳丘などの高まりもなく、また里道の下に埋没していたため、表土除去の段階で確認されたものである。

### 墳丘 (図版62, 第110図)

墳丘は、前述した如く、調査前には全くみられなかったが、調査の結果、周溝が確認された。 周溝は主体部墓道付近で途切れ、陸橋をつくり主体部を囲繞するが、石室左側壁側付近ではC-

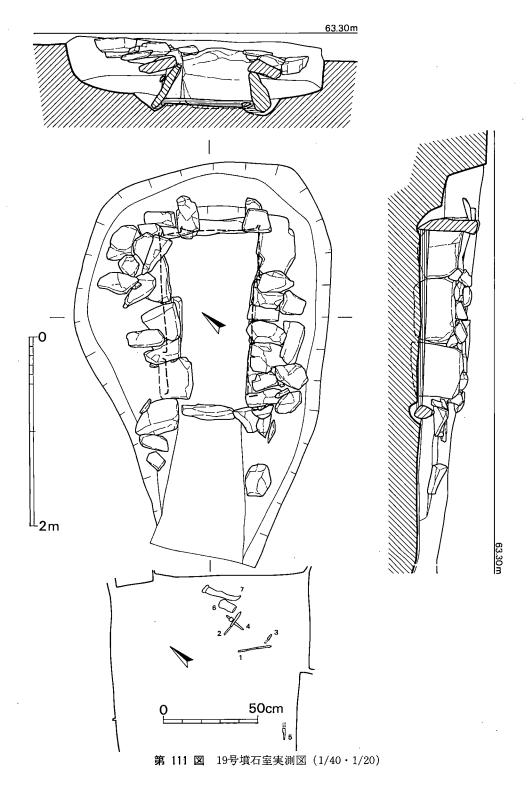


第 110 図 19号墳地山整形面実測図 (1/100)

25の周溝を切り、その南側で4号墳周溝により切られている。周溝の規模は、側壁間の方向でみると周溝外縁は8.8m、周溝下端内縁からすると6.7mを測り、墳丘径6.7m前後のものであったと考えられる。周溝幅は、石室北コーナー部裏付近が最も広く約2mあり、その部分での深さは0.31mある。

# 主体部(図版62・63, 第111図)

主体部は竪穴系横口式石室である。石室は地山を0.7mほど掘り下げた、南西部が開口する平面不整形な墓址内に構築され、墓址底面では周縁部が更に一段浅く掘り下げられ、二段掘りとなる。石室は全長2.12mで、幅は奥壁側で1.07m、横口側で0.85mと横口側が狭くなり、平面形はバチ型を呈する。奥壁は2枚の板石で構成され、左側の板石は幅20cmと小さく、石室に必要な横幅を確保するため選定されたものであろう。左右の側壁腰石には、ともに3枚の板石が横長に据えられているが、石室内へ強く傾斜して倒れかかっている。腰石上部には板石もしくは塊石が残存する個所で3段積みされ、高さは0.67mある。側壁上面の石は控え積みの所もあ



**-** 115 **-**

る。横口部には袖石は設置されず、床面には仕切石を置いている。前庭部側壁は地山掘方でなされ、地山上面に板石が一段平積みされている。前庭部床面は立ち上がらない。

### 遺物出土状況(図版63, 第111図)

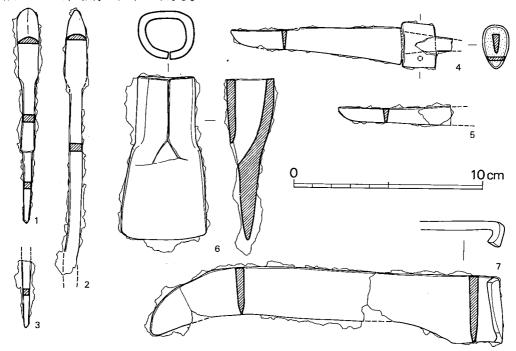
当墳からの出土遺物は、主体部石室内からのものと、周溝内からのものとがある。石室内からは、右側壁前面の床面にて、奥壁側より順に鉄鎌、鉄斧、鉄刀子、鉄鏃があり、左側壁前面中央部付近にも刀子がみられる。また、周溝内からは須恵器壺や土師器高杯などが出土している。 (新原)

### 出土遺物

鉄器 (図版64, 第112図)

鉄鏃(1~3) 1は箆被片丸造柳葉式で、全長11.3cmの短いタイプである。また、身部先端寄りは中央に鎬が入るものである。2も箆被片丸造柳葉式であるが、鋒先が細くなり、細根の長い類となる。3は茎部分であろう。

**鉄刀子**(4・5) 4 は身長9.1cm, 最大身幅1.9cm, の先端へ細くなるタイプである。茎部関際には断面倒卵形の鉄製鐔口金具が装着され、その下半で釘を通して、柄と留めている。 5 は現存長6.0cmで、細身のタイプである。

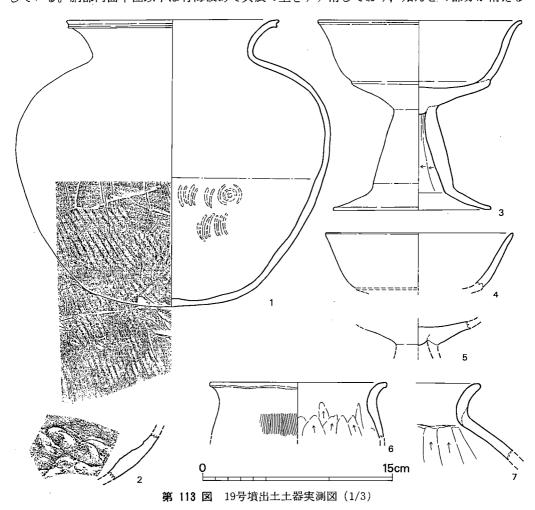


第 112 図 19号墳出土鉄器実測図 (1/2)

鉄斧(6)全長8.6cm, 刃部幅4.5cmの両側で有肩気味となるやや小型類である。袋部内の木質の有無は明確でない。

鉄鎌 (7) 全長18.7cm,最大幅3.6cmで,基部折り曲げ部には木質は残らない。基部端から2.7 cmの間は鈍い刃部状をなすが、木柄を付けた部分で、研ぎ残し部かとも考えられる。ただこの部位の形態が本来的なものであるとすれば、池の上D-7副葬品と同タイプであり、全長まで一致する。因みに、池の上D-7は池の上I式の陶質土器副葬壺が出土している。土器(図版63、第113図)

須恵器壺(1・2)1は南側周溝内出土品で、口径16.8cm、器高22.6cm、胴部最大径24.8cmを 測る。口唇部外面を凹状にして、上下端を突出させる。底部は安定する平底状につくり、器壁 が全体に薄いことは特徴的である。胴部下位から底外面は、太い平行条線状叩目の上をナデ消 している。胴部内面中位以下は青海波あて具痕の上をナデ消しており、殆んどの部分が消える



状況である。口頸部から胴部上半の内外面は回転ナデを施す。胎土に細砂粒が幾らか目立ち、焼成堅緻で、胴外面から頸部内面までは僅かに紫がかった青灰色、胴内面は淡青灰色を呈する。 2は周溝内出土品で、C-4周溝内出土2と接合するものである。腿下半片と思われ、外面は へラ削りの上を丁寧なナデ、内面上位は回転ナデ、下半は棒による突き跡がみられる。胎土精 良で焼成堅緻、灰白色を呈する。

土師器高杯(3~5)3は西側周溝内出土品で、口径16.1cm、器高15.0cm、脚部径12.4cmを測るほぼ完形品である。杯部は屈折部が明瞭で、その上がややふくらみをみせて、口縁で外反する。脚柱部はエンタシス状のふくらみをみせる。杯部内底面は丁寧なナデ、他は横ナデ、脚柱内面は横位へラ削り、その最奥部にはシボリによるシワが残る。胎土精良、焼成良好で赤茶褐色を呈する。杯部上半端と脚部端の同じ側で黒斑部がみられる。4・5も周溝内出土の小片で、4は復原口径14.7cmを測る。

土師器甕 (6・7) 孰れも周溝内出土の小片で、6は復原口径14.0㎝を測り、胴部内面へラ削り上げ、外面には細かいハケが施される。7は張る胴部に、一度立ってから外反する口縁をつける類である。胴部外面には雑なハケ、内面にはヘラ削り上げがみられる。

以上の出土遺物を検討してみよう。鉄器は、孰れも古墳時代前期的様相を良く残しており、 池の上遺跡の陶質土器を伴う時期のものと近似する。

土器は全て周溝出土品であるが、隣接或いは切り合うC-1、C-25、4号墳等からの混入品も考慮せねばならず、壺2のように他石室周溝出土品と接合する例もある事から、全てが本19号墳に伴うとは言い難い。その中で、壺1と高杯3だけは少なくとも、本墳への供献土器として確実視出来よう。そこで、明らかに古墳時代後期以降の甕6などを含めて、一応小破片類は除外して本墳の年代を考えておく。

壺1は口頸部の特徴や、やや肩が張り平底様の底部となることなどから、池の上Ⅲ式の陶質 土器の傾向を良く残している。ただ内面の青海波あて具痕を擦り消す手法、外面もナデ消しを 行っている事などから、陶邑Ⅰ型式第2~3段階を上るものではないと考えられる。

高杯3は杯部外面が丸味をおびる傾向にあり、脚部も布留式の段階からすると短くなり、5 C中頃に近いものとなっている。

以上の事から、19号墳供献のこの2個の土器は、5C中頃に近い前半代の年代が与えられよう。 (中間)

# 19. 20 号 墳

本古墳はH尾根西の裾にあたり、3~7号墳の様な大形墳の北東側に位置し、北に21号墳を

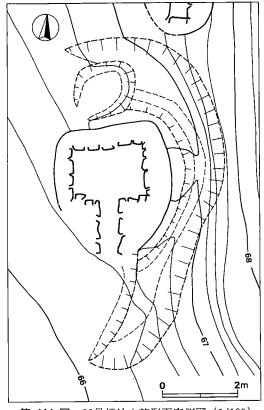
置く。当初本古墳には、墳丘が認められず、 古墳である事がわからなかった。当地の堆 積土を除去し、遺構検出作業により石室の 存在を知り得た。

標高66~68mの急斜面に築かれる。石室の上方となる東側に馬蹄形の周溝を有し、 古墳を画している。墳丘の規模は、南北9 m、東西約5m程であり、長円形を呈する 円墳となる。

また,石室前面左側の2×2.6mの範囲に板状の礫が存外密にみられる。葺石と考えられる。右側においても周溝内などに石が散点し、こちら側にも葺石が存していた形跡である。しかし、石室後方などの部位では見あたらない。

### 主体部(図版65·66, 第115図)

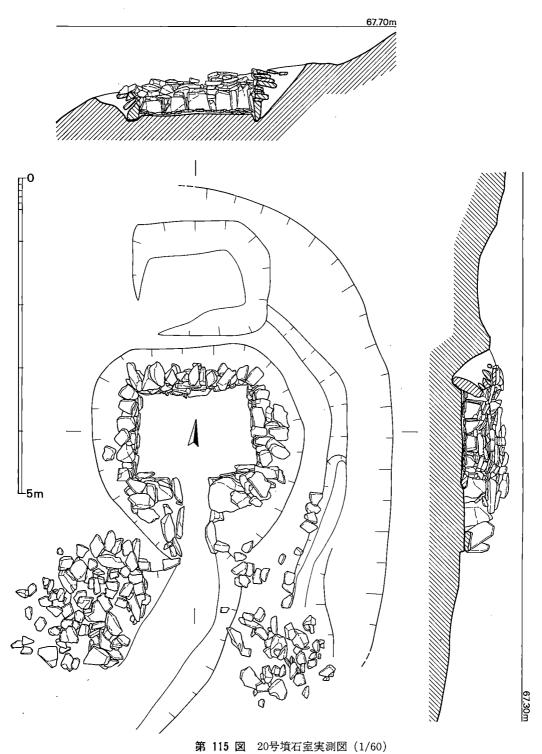
主軸をN 7°30′Wにおき、全長2.6mを測る単室の横穴式石室である。掘り方は、3.4×3.35mの歪んだ円形を呈し、30~80cm程掘り込まれる。

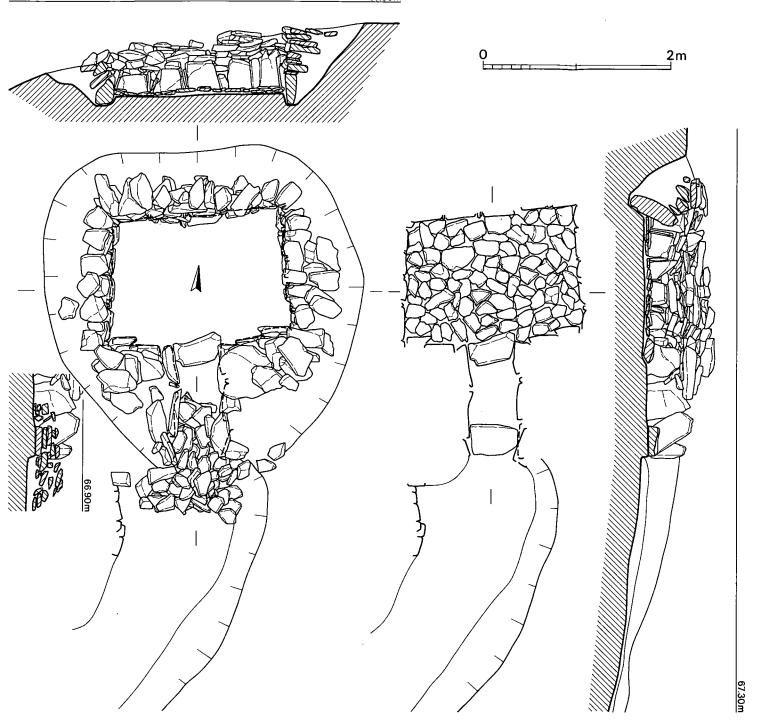


第 114 図 20号墳地山整形面実測図 (1/100)

玄室は、主軸方向で中央部1.3m、右側壁1.3m、左側壁1.25mを測り、主軸に直交する中央部で1.82m、奥壁側1.8m、玄門側1.9mを測る。平面プランは方形を呈する。構造は、四方壁共に基底部石を縦長に立て、その上段に、小形の板石を平積みにして4~8段程行う。石積みは荒く、間隙が著しく、間に一層小形の板石や粘土を詰め込む。壁面はやや外反気味であるが、ほぼ直に立つ。奥壁には鏡石と呼べるものはなく、同形の石を基底部に5枚並べている。他壁面の基底部も奥壁と同様である。また、石室が若干変容している部位がある。一つは、奥壁中央部に於いて基底部石が、玄室の中央に傾き倒れかけている。また左側壁では、石積みが外側へ傾き流れかけている。石敷きは、床全面に密に行われ、薄手の板石を用いている。上部構造は、現存の壁で床面からの高さが最大で70㎝を測る。発掘前の状況からみてさほど高くなるものではなく、天井まで精々1m前後となるものであり、持ち送りを行わず、壁面直に立ち玄室断面方形を呈するものであろう。

玄門は框石を有し、50×30cmのやや敷石よりも大きめの板石が据えられる。袖石は、両袖共





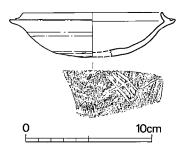
第 116 図 20号墳主体部実測図 (1/40)

に50×50cm程の板石が立てられ、玄門側壁と面を並べている。

羨道は、袖石と面を揃えて左右両側、各2枚板石を並べている。右側壁の先端部の石が、内側に傾いていた。他は本来の姿を呈しているのであろう。また、羨門に玄門同様に板石を置き 框石としている。閉塞はこの部位に行われ、石とその間に粘土を入れて行われる。殆んどの石 材が板状の小礫である。

### 出土遺物 (図版66, 第117図)

頂恵器杯身 全体の%を欠損し、石室前面に散点し、そのほとんどが墓道埋土よりの出土であるが、口縁部小片が閉塞石上より出土している。復原口径11cm、器高3.5cmで、底部回転へラ削り他は回転ナデおよび内面底部ナデを施す。受け部上面に沈線が巡る。また、外面底部に「卅」状のへラ記号を深く太く記す。胎土に砂粒が多く観られ、若干の石英粒を含む。焼成はやや軟質である。内面緑灰色、外面暗灰~茶灰色を呈す。7 C初頭頃のものである。



**第 117 図** 20号墳出土須恵器実測図 (1/3)

以上が20号墳についてである。本墳の初築の時期も杯身の時期と同じく7C前葉頃と考える。 また、石室の構造について若干述べる。

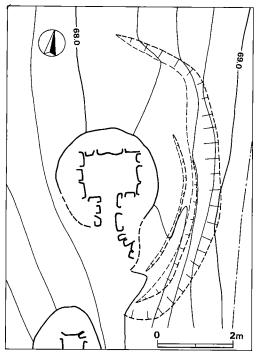
それは、本石室は構造上に問題を有している。前述した左側壁、奥壁の変容は構築の段階に 於ける欠陥を物語る。

左側壁の現象は、当石室の撰地に関わる事である。即ち、石室の位置する地形は、石室右側から左側への急斜面であり、石室上部構造の重みが左壁に負担となり、壊れ易いのは当然の事である。ところが、それに対する何等の工夫も見られない。

また奥壁側については、同様に上部構造と下部構造のギャップにより起った現象である。即ち、奥壁でも単に上部構造の過重によるもののみでなく、基礎構築にミスがある。一辺2m弱もある壁の中央に据える石としては、中央部の石ではやはり小形すぎ、根部も床面から20cm程が埋められてはいるが、上部構造との関係からは不安定といえる。奥壁中央の石では、本石室を支える大黒柱としては貧弱である。以上のような事が、本石室の現状から推察される。

(平嶋)

## 20.21 号 墳



第 118 図 21号墳地山整形面実測図 (1/100)

本古墳もH区丘陵裾に位置し、C-6を挟んで20号墳の直北側である。本墳も20号墳同様に墳丘が認められず、遺構検出作業により検出した。

標高67.5~69mで,20号墳と同じく東側斜面に馬蹄形の周溝を穿つ。墳丘の規模は南北7.8m,東西4.5m程である。石室前面右側に礫石が点在し、やや大きめの石が立てられ、前庭部を形成したものであろう。

主体部 (図版67.68,第119.120図)

単室の横穴式石室で,主軸をN12°Wにおく。

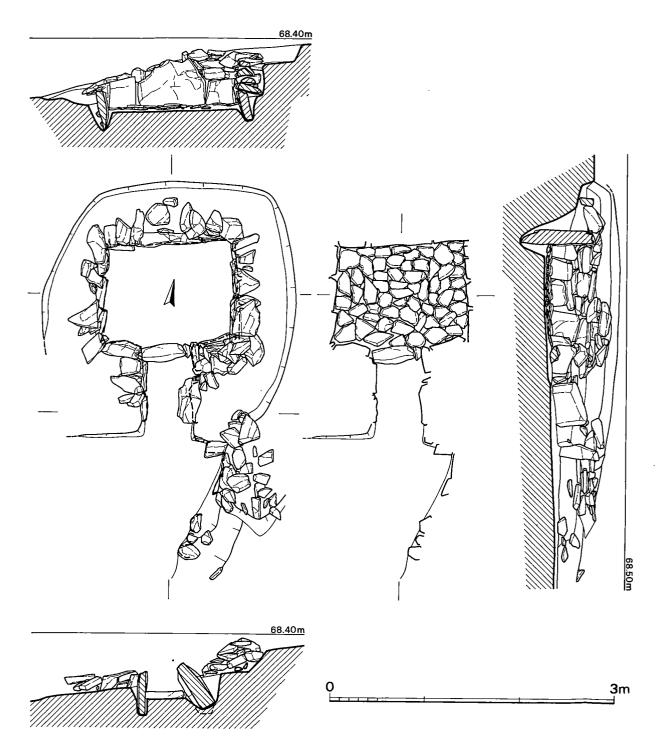
掘り方は、2.7×2.7mの歪円形を呈し、現 状で深さ10~60cm程穿たれる。

石室全長2.25mを測る。玄室は主軸方向中 央部で1.05m, 左・右側壁で1.0mを測る。直

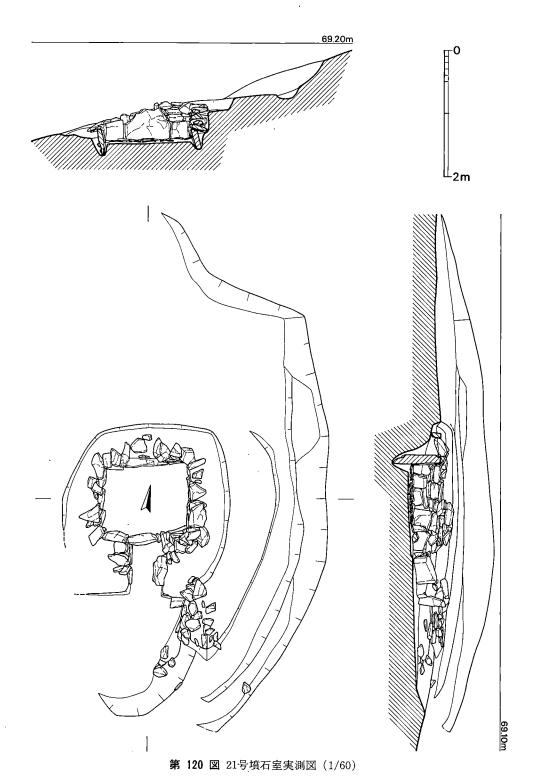
交軸中央1.4m, 奥壁側1.35m, 玄門側1.45mを測る。平面プラン方形を呈する。石室構造は, ほぼ20号墳と同型を示すが, 本石室に於いては, 奥壁中央に大形の板石を用いて鏡石とし, 根部もしっかりと埋置されている。また, 比較的大形の板石を基底部石としている。上段の積み石に関してもやはり大形化している。積み石間に隙間は目立たず, 密な感を受ける。石積みも最高5段存し, 床面から70cmを測る。本石室も20号墳同様に, 天井が1m前後となるであろうが, 墳丘の規模, 玄室の規模が小形化するので, 1m弱となるのであろう。敷石は板石を密に行われる。

玄門には、框石として細長い塊石を床面に置く。袖石としては、框石の両側に立つ30×40cm 程の石と考えられる。しかし、左側は若干石室前方へ出ており、框石の横には玄門側壁の石が くる。即ち、この框石の両脇に、羨道と面を合わせて並ぶ石を、袖石として意識して据えてい るのか、それともこの部位が羨道部なのかは疑問である。

羨道は、袖石の横に左右各々1枚横長に立てられる。また、袖石と羨道石の隙間を埋める様に小板石を詰め込んでいる。長さは、框石から先端まで1.1mで、幅は玄門側・先端部共に50cm



第 119 図 21号墳主体部実測図 (1/40)



-123-

である。

また、前庭部は、東側にその痕跡が見られる。羨道部先端から東側に45cm程広がり、周溝を切って石室前方南側へ進む。角ばった所に60×20cmの細長い塊石を縦長に立てている。また、前庭部の上段にあたる周溝底には、石が積み上げられた形跡があり、周溝から前庭を画していたものであろう。

以上のように20号墳とさほど形態を異にせず、本古墳に時期を決める遺物はなく、本古墳の時期としては、20号墳の前後もしくは併行期であろう。

#### 21号墳付近の出土遺物 (第121図)

須恵器杯身である。低く小さい高台を付け、体部はやや外反気味に外傾して開く。外面高台内側~内面体部まで回転ナデ、内面底部ナデツケする。口径14.4cm、器高3.4cm、高台径9.3cmを測る。8 C末頃のものである。



**第 121 図** 21号墳周辺出土須恵器 実測図(1/3)

本遺物の本古墳群との関係は、最も新しい古墳で7C中頃のもので、時期幅があり、直接的関係は認められない。しかし、当地に8C末頃の何らかの施設が存していた可能性を留めるものであろう。 (平嶋)

# 21.22 号 墳

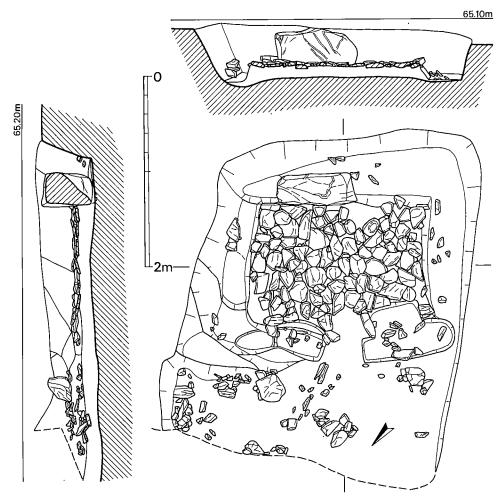
谷筋に面した緩斜面に位置し、20・21号墳の西方23m、6号墳の北20mに位置する。本古墳は、谷筋に向って北西方向に開口する。

若干の等高線の変換や、墳中央に位置した盗掘穴が存したが、本墳前面が谷筋で急傾斜し、変換線は谷筋によるものと考え、穴も、谷筋に関するものであると判断し、本墳の検出は、堆積土除去の際行なえた。標高64.7~65.0mにおく。

周溝の存在は認められず、墳形については不明であるが、円墳であろうと推察する。

### 主体部(図版68,第122図)

石室残存状態が著しく悪い。壁面は、奥壁に60×50cm程で厚さ30cmの石が一個残る。他壁は一切残っていない。敷石は、大小様々の板石を敷く。敷石は、床面の元来の姿を留めているものであると思われる。また、石室前面両脇に大きな穴が検出された。袖石や石室基底部の掘り方であろう。床面の周囲も溝状の凹みを有し、基底部掘り方であろう。これらの敷石や掘り方から、玄室床面の法量を推定すると主軸長1.4m、直交する長さは1.8mを測り、方形のプラン



第 122 図 22号墳石室実測図 (1/40)

であろう。主軸方位も床面から割り出しN42°Eにおく。袖石の掘り方より、前方は残りが悪く、原形を推定する痕跡も見あたらない。

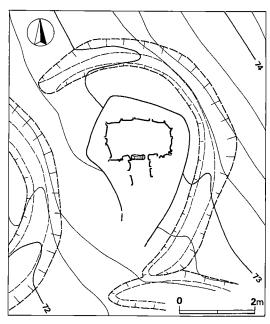
石室形態は判然とはしないが、石室前方部は直に谷筋への急斜面であり、石室はさほど前方へ連続しないであろう。また、前述したように袖石の掘り方より前に、前門部袖石の痕跡が見られないことから判断して、本石室は、方形を呈する単室横穴式石室であろう。

掘り方は、主軸方向で $3.5+\alpha$ m、直交する方向で2.9mを測る方形プランで、深さ $20\sim50$ cm穿 つ。

出土遺物皆無である。

以上のように、残りが悪く、その上部構造は判然としない。しかし、石室床面が横長方形を

呈し、単室と考えられる点から、本古墳も20号墳などと同型となるであろう。 (平嶋)



第 123 図 23号墳地山整形面実測図 (1/100)

## 22.23 号 墳

H地区丘陵裾に存する古墳の内で、北方に位置し、9号墳の北東15mに位置する。20・21号墳と同じく急斜面に形成され、墳丘の存在が認められなかった。

標高72.5~73.6mにおき、石室を半周する馬蹄形周溝を有する。墳丘の規模は、南北6.6m、東西5.0mとなる円墳であろう。 (第123図)

### 主体部 (図版69, 第124図)

N1°Eに主軸をおき、南に開口する。石室全長1.65mを測る、単室の横穴式石室である。

掘り方は、2.5×2.6mの円形を呈し、深さ20~50cmほど穿つ。

玄室は、主軸中央で0.9m、右側壁で0.6m、左側壁0.95mであり、幅は中央で1.7m、奥壁1.6m、玄門側で1.5mを測る。隅が丸味を帯び、長円形を呈する。基底部石は、根部をしっかり埋められ、立てられている。石の立て方は、縦長・横長様々である。積み石も、石材の形が区々であり乱積みである。また、積み石の間隙が著しく、間に粘土が詰め込まれる。高さは、最高45cm程残り、4・5段残っている。壁面はほぼ直に立つ。石敷きは床全面に行われ、大小様々の板石をばら蒔いた感を受ける。

玄門に框石が存する。 $40 \times 5$  cmの細長い石を、床を若干穿って据えている。袖石は、右側で $20 \times 15$  cm、左側で $30 \times 15$  cmの細長い石を縦長に立てている。また、袖石の根部もしっかり固定され、右で 7 cm、左では15 cm も埋められている。

羨道の基底部は、両側に2枚横長に立てられている。しかし、右側と左側袖石横の石は、ほぼ床面に埋没している。高さ40cmを測り、不揃いの石材を乱積みしている。また、玄室同様積み石間に著しく間隙が見られる。

墓道には、床面より浮いた状態で、石積みが羨道先端から右で1m、左で40cm程行われる。 墓道は、石積みが存する部位まで真っすぐで、石積みの右側先端から大きく左に曲がって、斜

第 124 図 23号墳石室実測図 (1/40)

面を下る。

出土遺物は皆無で、人骨は骨片すらも検出できない。また、赤色顔料塗付の痕跡も認められない。

以上のように、本墳も横長方形の平面プランを呈する点から、20号墳などと同型種と考える。 また、本墳では20号墳と比して、斜面下位方向の構造に工夫が見られ、左側壁側の基底部石 は、右側壁よりも大形で根もしっかり固められている。これらの相違については、後に譲る。

#### 横長方形石室について では、20~23号墳の構造について若干の考察を試みる。

これらは前述の如く、形状からは同型の石室といえる。しかし、石室構造を観るとやや異なる点が見出せる。それは基底部に於いて顕著である。20号墳は、基底部に薄手の板石を用い、雑然と縦長に立てている。基底部石間の間隙は著しく、そこに小石を詰め込み、面を整えている。21号墳に於いては、奥壁中央に割に大きめの板石を据え鏡石とし、他基底部にはやや間隙が目につくが、20号墳のように石を詰め込むほどではなく、20号墳に比して割に大きめの板石を用い、縦長に立て基底部としている。23号墳では、形状がややくずれ、全体にやや丸味を帯びているが、しかし、奥壁と左側壁の基底部は、露出する面に比べ根部が深く頑丈に固められている。一方、右側壁に於いては根部が浅く立てられ、貧弱な感じを受ける。

これらは、本石室の構造上の変遷を物語るものである。即ち、20号墳は表面の体裁を繕うことに重点をおき、構造上は前述の如く欠陥が目立ち、稚拙である。しかし、23号墳に於いては、地形的な面を勘案して構築されている。それは、自然地形が斜面下方となる左側が強固に構築され、また石室の長辺である奥壁中央に大形の石を用いて、中央部の強固を計り、石室の自然崩壊を防ぐことを試みている。一方、21号墳は前代の石室を踏襲して鏡石を据え、石室の構築も左右奥各所に於いて別段変化が見られず、石室構築は形式的なものであり、23号墳に於ける自然地形に対する考慮が介する点などは見出せない。

即ち、構造上に於ける当石室の変遷としては、21号墳が最も古く、鏡石を有し、基底部上面が揃い腰石的である。次の段階としては、20号墳であり形状的には整っているが、基底部が貧弱であり、壁面も応急処置的に小石を詰め込んで面取りを行っている。次の段階の23号墳になると形状が崩れ、変化してはいるが、基底部はがっしりとし、実質的な構築を行っている。即ち、構築の順序としては21→20→23号墳の順と考える。 (平嶋)

第2表 横穴式石室計測表

	墳 丘 規 模						主用物。	 体						
No.	外径		内	内 径					<u> </u>		玄室			
	軸	直交	軸	直交	周溝幅	石室形態	主軸方位		石室 全長	主軸方向	床面絶対高	長さ	最大幅	高さ
2	17.5	17.0	16.0	12.0	1.8	複室横穴式	N 43°	Е	10.97	斜面直交	61.0	3.27	3.35	_
3	15.5	15.6	13.7	12.0	2.25	複室横穴式?	N 38°	Е	7.0 ?	斜面直交	61.35	_	_	_
4	9.4	9.3	8.5	6.6	1.2	複室横穴式	N 17° 30′	Е	5.9	斜面直交	63.75	1.9	2.15	_
5	8.7	8.8	7.0	6.4	1.95	単室横穴式	N 76° 30′	Е	2.2	斜面直交	61.6	2.0	1.15 + α	_
6	10.8	8.6	9.8	6.5	0.9	複室横穴式	N 48° 45′	Е	5.92	斜面直交	63.9	1.95	1.85	_
7	12.6	14.6	11.5	10.3	2.75	単室横穴式	N 70°	Е	3.1	斜面直交	62.35	2.4	1.8	_
8	8.8	9.2	6.8	6.3	1.6	"	S 87° 30′	É	2.6	斜面直交	67.7	2.25	1.65	_
9	6.5	6.0	5.5	4.0	0.7	"	N 80°	Е	2.35	斜面直交	69.9	1.85	1.05	_
10	12.0	10.7	8.5	8.0	2.3	"	N 35° 30′	Е	2.5	斜面平行	74.9	2.25	1.55	_
11	11.6	10.0	7.5	7.0	1.25	11	N 22° 30′	E	3.3	斜面平行	77.8	2.15	1.5	
12	8.9	7.3	7.0	6.0	2.15	"	N 17°	E	2.45	斜面平行	78.65	_	_	_
13	8.6	. 8.4	7.6	7.1	1.1	複室横穴式?	N 1°	Ε	3.38	斜面直交	83.35	1.6	1.91	_
14	9.0	6.8	6.0	4.6	1.7	単室横穴式	N 32°	W	3.0 ?	斜面直交	87.0	_	_	_
15	11.35	13.0	9.0	8.0	2.1	複室横穴式?	N 1°	W	4.0 ?	斜面平行	89.35	_	-	_
16	9.8	7.0	8.4	4.8	1.0	単室横穴式	N 6°	W	3.5?	斜面平行	93.05	-	-	-
17	6.7	9.4	5.4	7.2	1.7	"	N 17°	W	3.65?	斜面直交	96.55	_	-	-
18	7.0	8.4	5.6	6.9	1.3	"	N 48°	W	3.1	斜面直交	97.5	2.0	1.85	
19	9.5	9.0	7.0	6.1	1.7	"	N 50°	Е	2.12	斜面直交	62.6	1.8	1.06	_
20	9.0	5.1	5.0	3.7	1.4	"	N 7°30′	W	2.6	斜面平行	66.4	1.3	1.82	
21	7.8	4.4	5.0	3.8	1.0	n.	N 12°	W	2.25	斜面平行	67.7	1.05	1.4	_
22	_	-	_	_	_	n	S 42°	Е	2.5 ?	斜面平行	64.65	_	_	-
23	6.6	5.0	5.4	4.0	1.1	"	N 1°	Ε	1.65	斜面平行	72.65	0.9	1.7	. –

単位(m)

部								+ 12 ( m )		
前 室			羨 道			86 chr	出土遺物	備考		
長さ	最大幅	高さ	長さ	奥 幅	高さ	閉塞				
1.0	1.63	_	5.4	1.7 1.0	_	0	(玄室)耳環、鉄鏃、鉄刀子 (周溝) (前室)須恵杯、馬具、鉄鏃 須恵藝 (前庭部)須恵杯、須恵藝、醸	内護列石存		
_	_	1	_	_	-		(玄室)鉄鏃	内護列石存 石室石材抜取られる		
1.9	2.7	1	1.6	0.9 0.7	-	0	(玄室)鉄鏃、鉄刀子 (前庭部)須惠杯、			
		/	_	_	_		(玄室)鉄鏃			
1.5	2.1	1	1.8	0.9	_	一部	(玄室)鉄刀子 (前室)鉄鉄 (周滿)須惠緶	袖石とその周辺抜取られる		
			0.7	0.8 0.8	_		(玄室)鉄鎌、鉄鏃 (嘉道)土玉 (周溝)鉄刀子、鉄斧	屍床部敷石・朱		
		/	_	_	_		(周溝)陶質腿、陶質壺、土師觀  (玄室)須惠腿			
			0.25	0.55	_		(玄室)鉄鏃、鉄刀子	敷石存、腰石一部抜取られる 仕切石左前面に朱検出		
			_	_	-		(玄室)鉄鏃、鉄刀子 (周溝)土師椀	敷石存、左壁腰石一部欠 ·		
			1.1	_	_		(玄室)鉄刀子 (周溝)土師杯	敷石存 左側袖石、側壁奥壁欠		
			-	_	_		(玄室)鉄鋤先、鉄鎌 (墓道)土師椀	敷石存 腰石全欠		
0.59	1.0	1	1.0	0.8 0.66	_	0	(墓道)須恵杯、土師杯 (周溝)土師觐、土師杯、土師皿	腰石一部欠		
			1.65	0.5 0.5	_	0				
			_	_	_		(周潾)土師杯	敷石散存		
		/	_	-	_			敷石散存		
			_	-	_		(墓道)須惠杯	敷石散存		
			1.1	-	_			<b>敷石散存</b>		
			0.85	0.63 0.9	-		(玄室)鉄鏃、鉄刀子、鉄斧、鉄鎌 (周溝)陶質壺、土師高杯			
			1.25	0.45 0.5	_	0				
			1.1	0.5 0.5	_			<b>敷石存</b>		
			_	_	_			敷石存 腰石、奥壁1残存		
			0.7	0.5 0.5	_					

# 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 — 6 —

上 巻

昭和61年3月31日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会 福岡市博多区東公園7番7号

印刷 赤坂印刷株式会社 福岡市中央区大手門1丁目8-34

# 付 図

柿原古墳群地形図 (1/2,000)

